

インフィニット・ストラトス 蒼炎の炎

クロスボーンズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏。男でありながら、ISを起動させた特異例。彼の登場により、世間は衝撃を受けた。

だが、この時世間はまだ知らなかった。彼より以前、男でありながらISを操縦するものがいた事に。

巷で蒼炎の狩人と呼ばれる存在が追い求める物。それは7年前の事件。あの時間で止まってしまった、自分の時であった・・・

※注意！この作品の閲覧前に、以下の要素をご確認ください。

・作者は原作の知識がロクにありません。原作と異なる箇所が存在します。その点をご留意下さい。

・基本はアニメ版をベースとして進めますが、時々オリジナル関係を進める場合があります。

・この作品はオリジナル関係の都合上、アニメ版の1話、2話、3話を消化済みです。この作品の1話の途中から、アニメ4話の途中と合流します。話的な補足として、1話、2話、3話の内容を含めますが、予めこの三つの回を見てから閲覧する事をお勧めします。

・たぶん駄文。

以上のどれかが苦手、無理！という方は、ブラウザバックを推奨しています。

目次

プロローグ	1
第一章 1学期編	
第1話 復讐の狩人	7
第2話 臨時の協力戦線	16
第3話 仮初の旅立ち	22
第4話 ボーイ・ミーツ・ダブルボーイ	31
第5話 実習開始	40
第6話 疑惑と出会い	46
第7話 シヤルルの秘密	54
第8話 明かされる事実	64
第9話 蒼炎の狩人と黒き兎	72
第10話 炎と油（最悪）の組み合わせ	80
第11話 トーナメント一回戦 開始！	88
第12話 動きだした闇	94
第13話 アステカの祭壇と越界の瞳	102
第14話 打ち明かす本音	110
第15話 久しぶりの街へ	120
第16話 女子の思惑 底知れず	128
第17話 臨海学校での再会	135
第18話 ポーカー勝負	143
第19話 ひとときの談笑 前編	153
第20話 ひとときの談笑 後編	161
第21話 第四世代型IS	168

プロローグ

今から10年前、男女平等の社会は崩壊した。

IS。インフィニット・ストラトス。ISの名称。10年前に篠ノ之束という人物によって発表された、宇宙開発を目的としたマルチフォーム・スーツ。現在はアラスカ条約に基づき、ISの軍事的利用は禁止。だが、宇宙開発に関しても、今は停滞中。専ら、競技などで使用されるパワードスーツが、一番真つ当な評価だろう。

だが、この画期的な存在であるISには重大な欠点が存在した。それは何と、女性にしか動かせないという事だ。この事実により、男女の社会的な立場が完全に一変、女尊男卑が当たり前になってしまった。

とはいえ、一応の建前として世間的には、これまで通りの男女平等ではある。下手な波風を立てる事を人間は毛嫌う。精々心中でバカにする程度に留まっていた。

だが、その流れに敢えて逆らう者。つまりは過激な差別主義者は、どの時代にも存在するものだ。彼女達は自分達が正しいと酔いしれ、暴力を振りかざす。

この世に、正しい事など、あるのだろうか・・・

「おいお前達!!動くな!!」

真昼間のショッピングモールの中。本来お客さんで賑わうべきこの場所で、今まさに、恐怖の時間が訪れていた。

この場に三人のテロリストが現れ、ショッピングモールを占拠し、人質を取り立て籠った。これが普通のテロリストならまだ警察だけでなんとか出来る代物かもしれない。

問題は彼女達の中の三人がISを持っていてる事なのだ。これにより、自衛隊が派遣された。

ISの扱いはアラスカ条約に則り、この様な事は本来ならあり得ない。ISの総数はある事情で467が絶対数と決められている。本来、テロリスト風情が持てるような代物ではないのだ。

「いいか！日本政府に告げる！私達はどこにいる人質全員の命と引き換えに、現在伊豆等に収監されている、極東赤軍の幹部達全員の解放を要求するのだ!!」

人質を一階の一箇所に纏め、その番にISが三機。下手な手向かい人は人質を即痛めつける。最悪殺すという雰囲気醸し出している。すると一人の子どもが恐怖のあまり泣き出した。

「ママー!!怖いよー!!」

「うるせえ!その小僧を黙らせろ!!」

母親にしがみつく子供に、ISの銃を突きつけ泣き止む様に脅しかける。

「やめてください!子どもに手出しだけは!!」

「来るな!来るな!!」

「いてっ!」

買い物袋の中にあつた物を出鱈目に投げつける。それがテロリストの顔に命中する。角にぶつかったのか、空いてる手で押さええている。

「どんでもねえガキだ!ぶっ殺してやる!!」

【シュー!】

【痛っ!】

すると突然、銃を握ったその手に、ナイフが投げられ手の甲へと突

き刺さる。刺さったナイフは結ばれた糸が引つ張られ、手の甲から引き抜かれた。

「だっ！誰だ！」

真ん中に開いた穴から、壁が崩れ落ちてきた。開かれた穴からは、打鉄でもリヴァイヴでもない。目の前にいるのは見た事の無いISであった。その操縦者も、ゴーグルとマスクで顔を覆っており、表情は一切読み取れない。

「なっ！なんだお前！！」

「……」

「そのIS、まさか日本の第三世代か!?」

そのISは白色を基調としていた。唯一と言えるべき違う色は、両腕にある青色だけだ。両手の青色はまるで、蒼炎の様に焼き付いていた。

「……いや違う！日本の第三世代はつい先月辺りに発見された特異例の機体の筈だ！代表候補生の機体だって、そいつのせいで開発が止まってるはず」

そのISは再びナイフを投げつけようと構えた。

「う、動くなよ。人質の息の根を止められてほしくなけりやなあ」

その言葉に一瞬動きが硬直する。やがて静かにナイフを腰の部分に収める。リヴァイヴの銃口は人質達へと向けられていたが、ナイフが納められた後に、こちらへと向けられた。

「へへっ！死ねえ!!」

その言葉と共に、謎のISに対しての集中砲火が行われた。鉛玉の雨霰はISに降り注ぎ、煙ですぐに見えなくなっていくた。

「へへっ！やった！ザマアみやがれ！」

「……!!?」

「……!!?」

「……!!?」

煙が晴れてきた。そこには先程のISが、まるで何事もなかったかの様に、当たり前前に立っていた。

「言われた通り、動かなかったぞ」

【maximum】

謎のISの乗り手の言葉が先か、直ぐに取り出したナイフがビームで蒼い炎を纏うが先か、次の瞬間には三機のISは簡単に吹き飛ばされていった。そして勢い良く壁へと叩きつけられる。

「馬鹿な！相手はたかが一人なのに！」

すると三人の内の一人が、青ざめた顔で何かを察した。

「こっ！こいつまさか、蒼炎の狩人なんじゃ！」

「蒼炎の狩人!?なんだそれ!?!」

「ほら！巷の噂で聞いたことあるだろ!?謎のISを駆り、風のように現れ、風のように消えるISキラー！あの蒼い炎は、目に映る全てを焼き払う」

「ヤベエ！ISのエネルギーが切れちゃう！」

テロリスト達のISのシールドエネルギーはもう枯渇していた。あと一撃加えれば強制解除されるだろう。

「ちっ！こっ！こうなったら人質を盾にして」

次の瞬間、再び蒼炎が三人に襲いかかった。今度はシールドエネルギーも完全になくなり、強制解除となった。敵のISが解除される直前、マスク野郎は三人のISに切りかかり、そこから何かを取り出していた。

ISが強制解除され、三人は地面へと倒れ伏す。人質達は先程の戦いをただ、ポカーンと口を開けて見ているだけだった。何が起きたのか、理解ができない。

するとマスク野郎は人質を見る事もなく、立ち去ろうとした。

「動くな!!」

すると謎のISが崩した壁から、何かがわらわらと湧いてきた。それは日本の自衛隊のIS部隊であった。

「テロリストを撃退し、人質を救出した手際には素直に称賛を送らせてもらおうが、貴様はここまでだ！今ここは精鋭のIS部隊がいる！」

謎のISの周囲には第二世代ISの打鉄が包囲していた。しかし謎のISは全くの無反応である。

「ISの運用はアラスカ条約に乗っ取り、規定されている！所属不明

のISを扱う貴様は規定違反だ！よってここに処罰する！」

「・・・国家権力の犬に用はない」

次の瞬間、謎のISは打鉄達に構う事なく上空へと飛び立っていった。

「待て！逃すな！あいつを捕らえろお!!」

直後、謎のISが去った方の壁が崩落し、瓦礫の山が形成された。これではISの追跡など出来るわけもない。レーダーで確認もとるが案の定、もう謎のISの姿は影も形もなくなっていた。

「くそっ！また逃げられたか!!」

誰もいないと思わしき林道。謎のISはそこに降り立つ。すると近くにアイスクリームの車の移動販売店があった。そこから一人の男が顔を出す。

「ご活躍、お疲れさん。もうネットニュースで情報が上がってるぜ。蒼炎の狩人出現。人質の救出も、テロリストの撃退も、ロクな成果を挙げられなかった日本政府に批判集中ってな」

その言葉を聞きながら、ISを解除し操縦者がマスクとゴーグルを取り外す。そこから現れた一つの顔。右頬に目立つ黄色いマーカーの様な跡。

何より驚くのが、その人物の性別。そのIS操縦者は男であった。

つい先月、男でありながらISを起動させた特異例が一人いる。織斑一夏。第一回モンド・グロツソ優勝者、あの初代ブリュンヒルデ、織斑千冬の弟。

男がISを起動させた事は瞬く間に全世界に報道された。女にしか扱えないISを男が起動させたのだ。驚くのが当然だろう。この二人以外は。

彼等二人にとって、世間などどうでも良かった。ただ、己の目的の為に生きる二人にとっては。

「今回の連中は極東赤軍。唯のテロリストでした。成果はこれだけ」
地面に何かが落とされた。それは先程、三人のISから強奪したコアでたる。ISの心臓部分であり、その総数は世界に467個しかない。しかも世間では未だに、このコアのブラックボックスの解明もできていない為、数を増やしてのIS量産もできない。

このコアの開発者は、天才の一言に尽きるだろう。

「成る程。極東赤軍か。連中は革命家を気取るくせにやってる事は今の女尊男卑の過激思想。まあ、テロリストに変わらないがな」

「・・・で、悪いが、ネット上の俺が仕掛けた闇取引のトラップに引つかかった奴がいる。今夜12時。この埠頭に行ってくれ。そこでISのパーツの闇売買が行われている」

「そうか。時間になったら起こしてくれ」

そう言う男は、アイスクリーム車の車内で横になる。仮眠を取ろうと寝始めたのだ。すると寝る直前、協力者の言葉が聞こえてきた。

「今度こそ、俺たちの追っている連中かもしれねえ」

「ああ。そうだな・・・」

それだけ言うと男は目を閉じ、眠り始めた。

第一章 1学期編

第1話 復讐の狩人

夜の埠頭はギャングや裏世界の人間の取引場所にはもってこいの場所であった。今もこの場で、ある裏取引が行われようとしていた。「へっへっへ。今日のブツはかなりの上物に見せることができる。うまく売り捌けば、ガツポガツポ大儲け出来そうだけ」

「ボス。そろそろ取引相手の指定した時間です」

「ああ。わかっている。売り捌く気なんてねえ。金を頂いたらバラせ。この手法ならまだまだ稼げるぜ。グワツハツハ！」

如何にも悪人らしい考えである。やがて足音が廃倉庫に規則正しい足音が響いた。その足音は目の前の扉で止まる。

【コンコン】

「ああ。お待ちしていましたよ。お入りなさい」

【コンコン】

「ええ。入れ」

【コンコン】

「テメエ耳ついてんのか!?!とつとつと入れやクソ野郎!!」

【コンコン】

しかし相手は入ってこない。一向にコンコンと扉をノックしている。ついに痺れを切らしたらしく、部下の一人が扉に近づいた。

「畜生が!ボスが入れて言ってるやる!!」

【ドン!】

次の瞬間、扉が蹴破られた。前にいた部下の一人は扉の下敷きとなった。扉の向こうにいたのは取引相手ではない。黒装束を纏い、顔はフードで隠れて見えない。

「てっ、テメエ!何者だ!!」

「・・・」

部下の一人が銃を抜き出す寸前、部下の頭部に蹴りが入った。間違

いなく骨にヒビが入っただろう。壁に強く叩きつけられた後、項垂れる様に倒れ込む。

一通りの部下を片付けた後、ボスの前へと立ち塞がる。

「なっ、なんなんだよお前！」

「答えろ。こいつに見覚えがあるか」

首を握り締め、持ち上げる。苦しそうに足をジタバタさせるも、効果などない。呻くだけの男に苛立ち、更に力を入れる。ボスが苦しうに薄目を開け、目の前に突きつけられた紙の絵を見る。

十字架にドクロが架けられている。見た限り言えるのはただ一言。不気味だ。

「質問に答えろ！お前はこいつを知っているか!？」

「しっ、知らねえ！そんな絵、俺は知らねえ!!」

「本当だな？」

首を絞めている手に力が加わる。ミシミシと嫌な音が聞こえてくる。

「ほっ、本当だ！本当に俺は知らねえ!!」

「・・・チツ！ハズレか」

苛立たしげに男を、近くの廃材置き場へと放り投げた。すると例の商品の入ったケースを弄り始めた。後退りしながら、背後の扉から逃げようとする。

「動くな。事と次第ではお前を持つと締め上げるつもりだ。つまらん考えは自身の身を滅ぼすぞ」

ボスを睨みつける。完全に目の前の存在との差を見せつけられ、ボスと呼ばれた存在は小鹿の様に震えている。

「・・・ここにあるのは既存パーツやガラクタなどを誤魔化してるだけのジャンク品。どれもIS関連のパーツとしては2流以下。どうやら、本当にただのハズレの様だな」

すると例のケースをボスの方へとぶん投げた。

「最後に確認する。お前、ネクロノミコンを知っているか？」

「ねっ、ねくろのみこん？」

「・・・どうやら、本当にただの裏の武器商人か。ならもう貴様に用は

ない」

そう言うとまるで何事も無かったかのように、フードの男はその脚を出口へと向けて歩き出していた。

「てっ、テメエ一体何者なんだよ!!何が目的で、こんな・・・」

その言葉に足を止め、顔だけが振り返った。一瞬だけフードの隙間から見えたその目は、激しい怒りで燃えていた。右眼下部分から頬に流れる刺青の様な傷跡の黄色のマーカーも合わさり、とにかく不気味であった。

「・・・復讐。それが俺の目的だ」

それだけ言うと男はフードをより目深に被り、倉庫を後にしていった。

一夜が明けた。時間は朝の9時。もう学生達は学校へと行き、外を散歩く人間の大半は20から50代であった。

街の広場では、皆が活気付いている。昨日のテロ紛いの騒動が嘘のように。買い物袋をぶら下げる主婦。幼稚園の園児が集団で遊んでいる公園。そしてお魚啜えたどら猫を裸足で追いかける主婦。

しかしその全てが、この男とは無関係のように感じられた。適当な新聞雑誌を顔に載せて光を遮り、ベンチで横になって寝むり始める。

そんな安眠を妨げる邪魔者が襲来した。補導員だ。

「ちよつと君。こんな時間に何をしているんだ」

「・・・」

「ほら君、名前は？学校は？住所は？」

「・・・」

「聞いているのか！答えなさい！」

「うるさい、黙れ。俺はフリーだ。学校など通っていない」

「なっ！きつ！きつ！きつ！」

「すいません補導員さん。こいつ、俺の知り合いでして、今日は学校は休ませてセラピーとして外で寝かせてるんですよ。ちよつと口が悪くて、ほんとすみませんねえ」

知ってる声が聞こえた為、身体を起き上がらせる。そこには一人の男性がいた。20代後半ぐらいの男で、エプロンを着ている。

「君が保護者か。全く、どんな躰をしてるんだ。大人の躰がなっていないよ」

吐き捨てる様に呪詛の言葉を言い、補導員は去っていった。

「如月さん。今日はここでアイスクリーム売ってるんですか？」

「まあな。それよりユーゴ。結構派手に暴れたみたいだな。廃倉庫でギヤング同士の抗争。ネットの掲示板の噂で流れてるぞ、昨日の埠頭での出来事」

「まあ簡単に締め上げた程度ですよ。それも無駄骨でしたけど」

「ったくお前ってやつは。生身でそう言うのをあまり表だって行動するなって言ってるだろ？変なボロを溢したら、ネットで揉み消すのだった面倒なんだぞ」

「善処します。それで。そっちの様子はどうです？」

「中々だぜ。店の売り上げ的にも黒字だし。はい、これ差し入れ」

アイスクリームを目の前に差し出した。バニラと抹茶のダブル。多少溶けたそれは太陽の光を浴び、宝石の様に輝いている。しかし、今のユーゴが聞きたい事はこれではない。

「・・・そっちじゃない」

「ああ。情報の方か。今のところ変化なし。そして反応もなし。用はこれまでと変わらない。ほぼいつも通りだ」

「俺の方もだ。昨日の取引現場を襲撃したが、やってたのはただのI S パーツの横流し。ボスらしき人間にも聞いたが、俺たちの探している連中との関係性はない」

「今回のトラップも失敗か・・・奴等の資金源でも特定すりや近づけると思っただがな。とにかく、昨日は疲れたろう。ここでの売買はお終いだ。次の売り時には手伝ってもらおう。だから移動中だけでも車

の奥のソファアで一休みしてきな」

「ああ。そうさせてもらう」

車で移動しながら経営するお店、その中は狭いが簡単な寝床にはなっていた。多少ボロいソファアに横になり瞼を閉じる。ガタガタと揺れる車内。ぼーっとしていたユーゴの脳裏に色々な事が浮かんできた。

(いつもと同じか・・・あの事件からもう7年。如月さんと必死に手掛かりを追い求めてきた。だが、成果はまるで上がらない。時間だけが過ぎてゆく・・・)

近くの本を手取る。葉のように本の間に挟んでいたが、そこから一枚のトランプカードを取り出した。しわくちやのぼろぼろ。それほど彼が大切にしてきた一枚のジョーカー。

(君の切り札だ。切り札は常に自分の物になる。そう思っていれば、いずれは本当にそうなる。だから君自身が切り札になるんだ)

あの時、扉越しに声をかけてくれた人。そして扉の隙間から、これを送ってくれた人。顔こそ見えなかったが、一体何者だったのだろうか。

「あの時、これをくれたのは一体・・・」

【キキーツ!!】

うつらうつらし始めた頃、突然車の揺れが治った。少ししてソファアで横になっていた身体を激しく揺さぶられた。半分寝ぼけ眼を擦ると如月さんが血相変えていた。

そして次の言葉で、ユーゴの脳も一気に覚醒する。

「おい起きろ！例の反応が引つかかった！」

「なんですって！場所は?!」

「ポイントは割り出せてる。あと数分で、このポイントを通過する。そこを抑えろ」

「如月さん。出ます！」

急いで専用のスーツを着込み、ゴーグルとマスクを装着すると、車体から飛び出した。辺りは人気の無い森の中であった。そこで広めの場所へと出て目を閉じ、勾玉のペンダントを握る。

「……来い！WILD・JOKER」

するとの身体に機械が装着された。そのISは白のボディを基調としており、その腕に蒼い炎が焼きつく。

「出るぞー」

誰もいない森からその機体は、上空へと飛び立った。ある程度上空に達したところで、如月さんに通信を送る。

「どうですか、反応の方は……」

「そっち側に急接近している。そろそろ例のアンノウンと出くわすはずだ。3. 2. 1……」

次の瞬間、何かが通り過ぎるのがユーゴには理解できた。かなりの速度だ。急旋回をかけ、一気に機体を加速させる。少し経過し、ついにアンノウンの全貌が視認できた。

それはISであった。しかし操縦者たる乗り手の姿は見えない。あれでもISなのだろうか。

謎のISは此方の追跡に気がつく、追いつくかのように手を向けてきた。開かれた箇所からは、ビーム砲が飛んできた。

咄嗟の攻撃を、ビームシールドで何とか防ぐ。だがその一瞬の隙に例のISは姿を眩ませていた。

「如月さん！奴の反応は!?!」

「映像の解析はこちらでも行ってる。奴の消えた方向などから、奴の予測行動を導き出すに、あのアンノウンはIS学園に目指している」
「ならそこで奴を迎え撃つ！」

「本気か!?確かにIS学園ならゴリ押しで多少の融通は通せるかもしれん。だが、お前の秘密を外部の人間に知られるんだぞ！」

「覚悟の上です！これまでずっと探し求めていた手がかり。その欠片がやっと、手に入るかもしれないんです！ここで逃す訳には！」

「……ふつ。やっぱお前はそう言うと思っただぜ。地図のデータをモノクルに送り込んだ。こっちも手回しはしといてやる！」

目標地点へと到達した頃には、謎のISはビームを下のアリーナ部分へと目掛けて、打ち込んだ。ビームはアリーナの遮断シールドすら貫通し、謎のISは大地へと降り立った。

「逃がすか！」

追いかける形で、ユーゴもシールドの穴を通り抜けた。

その少し前、IS学園ではクラス対抗戦が開かれていた。そこでは1組代表の織斑一夏と、2組代表の凰鈴音の二人が戦っていた。そこに、先程のビーム兵器が降り注いできた。

「なっ！何!?!今の攻撃」

「試合中止！織斑！凰！直ぐに退避しろ！」

観客席の生徒達は戸惑い、そして二人は咄然としていた。突如として乱入した謎のIS。どう考えても友好的な存在ではない。

謎のISは、周囲の爆炎の中でもその姿を表している。表情こそ読み取れないが、完全に一夏達を睨みつけているだろう。一夏達のISにはロックオンされたと警告が出ていた。

「ロック。あいつに俺がロックされてるのか!?!」

次の瞬間、ビーム砲が放たれた。咄嗟にそれを避ける。

「ビーム兵器持ち！しかもセシリアのISより、出力が上かよ!!」

そのISは尚もビームを乱射してくる。今の一夏達では避けるのに必死だ。

「あれがISかよ・・・お前、何者だ！何が目的だ！」

一夏の問いかけにそのISは何も答えない。腕を鈴の方へと向けた。

「危ねえ！」

慌てて鈴を担ぎ、上空へと飛び立つ。すると抱えた状態でロツクオンされた。

「ちよつと一夏！降ろしなさいよ！バカ！」

「殴るな！来るぞ！」

「・・・邪魔」

するとユーゴが二人の間に割り込む形でビーム砲を、先程と同じく再びビームシールドで受け止める。

「どけ。あいつは俺の獲物だ。引っ込んでいろ」

「なっ！お前、何者だ！」

「ちよつとあんた！一体何者?!あのISもあんたが連れてきたの!」

「何とでも言え。とにかくあいつは俺が追っていた手掛かりになる。

だから俺が狩る。邪魔をするな」

「・・・つまり、あのISと戦うってことだな。なら俺も手を貸す」

「はあ!?!ちよつと一夏?!」

「あいつを無条件で信じるつもりはない。けど、あのISと戦うのが目的なら、同じ目的を持つものとして、共闘くらいは出来るんじゃないか?」

「必要ない。それでもどうしてもあいつと戦うのなら、俺の邪魔だけはするな」

「つたく!ならあんた達!無駄話は後!あいつ、もう立ち直ってる!」

その時、一夏と鈴の二人に司令室から指示が出された。

「織斑君!凰さん!二人は直ぐにアリーナから脱出してください!直ぐに先生達が、ISで制圧に向かいます!」

「いえ、みんなが避難するまでの時間を稼がなくちゃ。それに、もし俺達が逃げたら、あのISは間違いなく、残った1機のISを集中的に狙います」

「そのISも所属不明なんですよ!敵の可能性だつて!」

「・・・俺には、少なくともあれと戦おうとしている人が敵とは思えないんです。だからやらせてください!お願いします!」

「私も。一夏が逃げない以上、私も逃げる訳にはいかないからね!」

「ちよつと、織斑君!?!それに凰さんも!」

「本人達がやると言っているのだ、やらせてみたらどうだ？」

「織斑先生!？」

こうして司令室にいる織斑千早、山田真耶、イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。そして篠ノ乃箒の4人が見守る中で、3人は謎のISと対峙する事となった。

第2話 臨時の協力戦線

IS学園、アリーナ場。現在ここで一夏と鈴。そしてユーゴの三人が、謎のISと対峙していた。

「君。名前は？」

「・・・ユーゴ。白銀しろがねユーゴ」

「俺は一夏。織斑一夏だ。この場を乗り切る為に、こちらと協力してもらえないか？」

「言ったはずだ。奴は俺の獲物だ。邪魔さえしなければ、好きなようにしている」

「何、こっちは三人いるんだ。きつとうまくいく。ほら鈴も、せめて名前くらい教えてやれよ」

「・・・凰鈴音よ。とりあえずよろしく頼むわ。まず確認するけど、そのISに武器はあるの？」

その質問には答えず、黙って短剣を手に取り、突っ込んでいった。その一撃は、敵のISの腕部分で防がれた。それでも尚、ナイフを巧みに扱う事で、連撃を続けてゆく。

「あれは、コンバットナイフか？」

「これまで見た事がない武器ね。あれも第三世代の試作機と試作武器って事かしら」

「っていけねえ！俺達も参加しないと！」

「そうだったわね。観察してる場合じゃなくて、あの乱入したISを止めないと！」

三人の戦闘のスキルは結構なお手前である。だが、それでもまだ相手の方が上手である。

仮にも一夏と鈴の乗るISは第三世代。まだ試作機の域こそ出ないが、それでも第二世代よりは機体の数値的には遥かに高い。なのに相手は三人を手玉に取っている。

「くっ！そろそろエネルギーがヤバくなってきた」

一夏と鈴の二人は対抗戦をしていた直後にこの戦闘に参加。その

為エネルギーなども比べて減っている。このままではISが機能停止になる。

そして司令室では、アリーナ内に閉じ込められた生徒達の避難をさせようとしていた。だが、遮断シールドがレベル4に設定されており、しかも全てのドアにロックがかかっている。これもあの謎のISの仕業なのだろうか。

今は何も出来ず、ただこの戦闘を見守る事しか出来ない。

「先生！私にISの使用許可を！私のISなら！」

「そうしたいのは山々だが、どの道ここから出られなければ意味が……」

【カチツ！】

その時、突然司令室の扉が解除された。

「なんだ!?! 一体どうした!?!」

「これは！遮断シールドが、次々と解除されています。それもすごい速さで！内部からの操作を受け付けないこの状態で、何者かがこのIS学園にハッキングを仕掛けているんです！」

「ハッキングだと!?!」

すると箒が突然駆け出し、その場を後にした。

丁度その頃、外で戦っていた三人のうち、一夏がある疑問を呈した。

「なあ、ひよつとしてあのIS。人が乗ってないんじゃないか？」

「はあつ？何言ってるのよ。人が乗らなきゃISは動かない。当たり前でしょ。そんな事あり得るわけじゃない！」

「……いや、ありえない話ではない。俺はここに来る前にあいつと少し戦った。その際もあいつはこちらに何のコンタクトを取ろうとしなかった。普通、何かしらの文句でも付けるべき筈なのに。あいつからは人間の味がしない」

あのISと一早く戦闘しているユーゴも同じ結論に辿り着いたらしい。

「……過程の話だ。もし、もしあいつが無人機だとしたら、全力が出せる」

「何よ、全力って?」

「零落白夜。雪片式型の全力攻撃だ。威力が高すぎて危険だが、人が乗ってないなら問題はない」

但しこれには欠点がある。エネルギー消費が激しいのだ。これについては、どうしようもない。ISのバリアを無効化する攻撃もあるが、エネルギー残量ではあと一撃しか残されていない。

「ユーゴ。俺と一緒にあいつの注意を引いてくれないか？その間に鈴が衝撃砲のチャージ。合図したら、最大出力で放ってくれ」

「しようがない。じゃああり得ないと思うけど、あれが無人機と仮定して、その案でいきましようか！」

二人が前に一歩踏み出す。

「・・・邪魔だけはするなよ」

「言つたな。やってやろうじゃないか！」

白式& a m p ;ワイルド・ジョーカーと謎のISは盛大な殴り合いと斬り合いを繰り返している。あれではお互い、目の前の対象以外に注意を払うのは難しいだろう。その間に鈴のIS、甲龍は衝撃砲のチャージを続けている。

「よし、いいぞ。この調子で・・・」

「いちかああああ!!」

急な怒声に皆が驚く。その声の方を向くと、多少高い位置に、一人の少女がいた。篠ノ之箒だ。

「男なら、男ならそのくらいの障害を乗り越えずしてなんとする!!」
「箒!？」

その叱咤激励の怒声により、謎のISの注意がこちらではなく箒へと向けられた。遂に狙っていたチャンスが生まれたのだ。

「今だ鈴！俺を撃て！」

「はあ!?一夏あんた何言つて・・・」

「いいから撃つんだ！」

「ああもう！どうなっても知らないわよ!!」

一夏に言われるがままに鈴は龍咆を撃ち放つ。当然、その攻撃は射線上の一夏に当たり、一夏は苦悶の表情を浮かべた。鈴の方はやっぱりという表情を浮かべる。しかし、一夏の瞳には成功を確信する光が

浮かんでいる。

その瞬間、白夜の機体エネルギー値が振り切れた。ISの前身に、炎の様なオーラを纏う。雪片式型の刀身も、出力の上昇に伴い、強化された。

「俺は千冬姉を、箒を、鈴を・・・関わる人全てを、護る!!!」

渾身の一撃として振り下された太刀は、敵のISの腕を斬り落とした。だが腕は二本ある。もう片方の腕が、一夏と白式が吹き飛ばされる。レオンはなんとか回避したが、敵のISとかなりの距離ができてしまった。そして一夏は落下した時の衝撃で空いたクレーターの側面へと叩きつけられた。

「一夏ー!」

だが一夏の表情は先程の様な苦悶ではない。むしろ、勝利を確信した余裕であった。

「狙いは?」

「バッチリですわ」

その瞬間、敵のISの背後から煙が吹き上がった。見ると向かい側にはイギリスのIS代表候補生のセシリア・オルコットがいた。

「セシリア! 決めろ!」

「了解ですわ!」

ライフルから、エネルギー弾が放たれた。直撃を喰らった敵のISは、黒煙を噴き上げながらクレーター部分に倒れ伏した。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

「セシリアならやれると思ってたさ」

一夏に褒められて嬉しい様だ。

「よし。これで・・・」

「手を抜くな。奴はまだ動いているぞ」

ユーゴのその言葉にその場の皆が驚く。よく見ると身体の殆どが爆散しかけているのに、そのISはまだ動いていた。最後の足掻きとしてか、ビームの放射を行おうとするも、最早先程までの脅威は無くなっていた。

【maximum】

「こいつで終いだ」

その機械音声と共に短剣がエネルギーを纏った。そしてその短剣で、壊れかけのISを真一文字に切り裂いた。ガソリンの塊にマッチを投げ入れるに等しい行為により、そのISは大爆発を引き起こす。「なっ！ユーゴ！大丈夫か!？」

煙が引いてきた頃、ユーゴの無事な姿が確認できた。彼は切り裂かれたISのボディ残骸から、何かを取り出していた。

「これがそうか。この地球に存在する467のISのコア。そのどれにも属さない謎のコア。俺の持つワイルド・ジョーカーと同じ、

Four hundred Sixty Eight
F S — E タイプのコア」

「パリン！」

先程、ナイフで敵のISを掻つ切った際、謎のISは最後の抵抗として、ジョーカーに殴りかかった。その際の衝撃で、マスクとゴーグルが外れ、素顔が顔となった。

「壊れたか。また新たに造らなければ・・・さて。もう一つの問題が残されていたな」

一夏の白式と、ユーゴのワイルド・ジョーカーが対峙する。周囲にいるISもいつでも戦えるように警戒だけは怠らない。

「・・・とりあえず、あのISを止める手助けをしてくれて、ありがとう。でもユーゴ。お前は一体何者なんだ？」

「・・・ていうかあんた、男じゃない！なんで一夏じゃないのに、男がIS操縦出来てんの!？」

ここに来て彼女達も、彼の異常性によくやく気が付いたらしい。もう少し早く気づかなかったのかと突っ込んではいけない。

しかし、そんなざわめきもユーゴには何の効力もない。「言っただけだ。俺に関わるな。邪魔だどけ。どかないなら・・・」

その一言で場は完全に戦闘状態に移行する。短剣に手をかける者、刀を手にする者。そして引き金を引こうとする者。完全にどんぱち起こる直前で、それを静止する通信が送られてきた。

「全員そこまでだ。織斑、その人を談話室に連れてこい。そいつに客が来ている」

「千冬姉？」

「織斑先生だ。とにかく、その人を連れてこい」

「わかりました。君に談話室にお客が来てるって。今映像をそっちに送るから」

ISの電子モノクルに映像が送られてくる。そこには見知った顔ぶれがいた。

「随分、派手な宣伝を試みたいだな」

「如月さん！まさかお客って!？」

「ああ、俺の事だ。とりあえず早く来い。今後の事について話し合うぞ」

それだけ言うと、如月さんの通信は途絶えてしまった。

第3話 仮初の旅立ち

談話室。ここでは織斑千冬と山田真耶の二名と、対話している如月さん。そしてその隣でマスクとゴーグルの修理を行なっているユーゴがいた。

「いやあ本日はお騒がせしてしまい、誠に申し訳ありません。あつ、私、こう言う者です」

名刺の様な物を差し出され、それを受け取る

「独自IS研究開発社、社長の如月慎吾さん？失礼ですが、ISの開発関係の方ですか？」

「ええ。まあ正社員は私一人だけで、ユーゴはお手伝いさんという、とても規模の小さい会社です。ですがついに試作のISが完成したんですよ。で、そのテスト飛行をしていた際に先程戦った謎のISと遭遇。やむなく迎撃したって訳ですよ」

とりあえず何故IS学園に来たのか。その点について説明しているらしい。

「ですが、ISは知っての通り女性にしか動かせないはずです。唯一の例外として発見されたのが織斑一夏君の筈です」

「いやあ、その件については本当に驚きましたよ。おふぎけでデータを取って見たら仰天ビックリ！まさか男の彼にIS適性があるとはねえ。ユーゴに適性があるのは昔から知ってましたよ」

「ですが、私としては大々的に取り上げては返って彼に対しての心的ストレスが溜まると思い、敢えて黙ってましたよ。まあ今回の一件で貴女達に知られてしまいましたかねえ」

その言葉に千冬が多少眉を顰める。思い当たる節があるのだろうか。

「成る程。今回の一件に介入した理由、そしてテロなどとは無関係だと言う事か」

「そうですね。あの、失礼ですが少しユーゴと二人きりにさせて貰えませんか？今後の事について話し合わねばならないので」

「よし、いいだろう。その間に私達は今回の件に関する事態を理解しておこう。少しの間、席を外すぞ」

山田先生と織斑先生が部屋を後にする。すると如月さんは何かを取り出し、周囲を見渡した。どうやら盗聴されてないか気にしているらしい。

やがて指でオツケーサインを出す。盗聴の危険はないらしい。

「・・・一体なんの茶番ですか？小さい会社の社長って。如月さんはアイスクリームの移動販売が仕事でしょうが」

「あれ？知らないのか？活動拠点として実際にさっきの会社は存在するぞ。まあペーパーカンパニーに等しいがな。それより、例の物は取り出したか？」

「ああ。ここにがある」

例のコアを机の上に置くと、如月さんは特殊な光を当てはじめた。どうやら何か検査をしているらしい。やがて検査結果の様なものが出た。

「・・・間違いない。反応通りだ。このコアはこの世界に存在する467のISのコア。そのどれにも当たらないタイプのコアだ」

「なのに目の前にそのコアはある。って事は？」

「可能性は三つだな。一つ。この地球に存在する467のISのコアを作った張本人、篠ノ之束博士。彼女が新たにコアを作った。二つ。本来ブラックボックスであったコアの解析が何処かの国や企業で成功。新たなコアを束博士以外の人間が作った」

「そして三つ。二つ目と多少被るが、遂に奴等が動き出した」

「ネクロノミコン・・・」

二人の面持ちが重いものとなる。やがて先生達二人が戻ってきた。すると如月さんはそそくさと帰りの身支度を始めた。

「では、我々はここで。もし今回の一件においての修理費などが必要な場合は、名刺の裏に書いてある番号にお掛けください。さてユーゴ。帰るぞ」

如月さんはコアを両手に抱え、椅子から立ち上がった。

「待て。何故そのコアをお前達が持っていく事になる。それは置いて

いけ」

その言葉に如月さんが待つてましたと言わんばかりに、一瞬笑みを浮かべた。その顔はすぐに真顔へと戻された。

「何言ってるんです？このコアは、私の優秀な助手が、命をかけて、秘密を知られて、頑張つてその手で手に入れた戦利品です。まさか土地を言い訳に人様のものを横取りするおつもりですか？」

自分達に有利な事を強調しながら合っている。

「でっ、ですが！登録されているISのコアは、軍事的な利用を防ぐ為にアラスカ条約で明確な扱いが決められていて・・・」

「このコア。アラスカ条約に登録されている467個のコアに登録されてませんよね？既にこちらで確認も取れています。ならアラスカ条約もこのコアには適用されないはずでは？」

「うんうん！だつてそのコア。東さんが久しぶりに作ったコアだもん！」

「やっぱりそうか。じゃあアラスカ条約は効かな・・・え？」

当たり前前の様に会話に入つてきた存在に注目する。まるで初めから居たかの様に席に座つており、当たり前前のようにお茶を飲む存在。

「たっ、東！いつからそこに！」

「ひっさしぶりい！会いたかつたよちいちゃん！」

何の躊躇いもなく抱きついた。

「おいっ東。とりあえずいったん離れろ」

流石の織斑先生も、このスキンシップには困惑していた。なんとか束を強引に引つ剥がす。すると束が頬を膨らませ、不満を表にした。

「おい束。まさかとは思うがこのコアとISは」

「うんうん。この束さんが新たに作ったコアだよ！まあ暴走しちゃったけど、仕方ないねえ！それより君！暴走したISから見ただけですっごい腕だね！IS学園でその腕を磨いてみない？」

「興味ない」

束の方を一度も見ることなく、ユーゴは答えた。

「なんでなんで?!?そんな腕があるのになんで!?!」

「俺は俺のやり方でISの操作から整備調整までを覚えた。今更他人の教えや力を借りたり頼ったりするつもりはない」

「確かに、あのIS技術は生半可な付け焼き刃じゃない。熟練されたってのは見てて分かるよ！でもさ、独学ってのはあまり良くないよ！なんせ人間、一人じゃ何も出来ないって言うし！」

「……それをお前が言うか」

彼女一人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った IS 開発者の東博士。うん。いい意味と悪い意味の特ダブーメランが突き刺さってるね。

「知ってる？男のIS操縦者は今のところ二人。君といっくんの二人。ちーちゃんはいっくんを悪くい大人に利用されない為に、ここで保護してるんだよ！」

「あつ、それについてはご安心を。我が社が命に変えても彼を保護しているの。この話はもう結構です。では」

如月さんは彼女のペースに呑まれない内に話を切り上げる事とした。

「むー！石頭だね。こうなったら、東さんの切り札、最終決戦対頑固者書類兵器だ！」

【バン！】

似合わない音と共に机の上に置かれた書類。それは対象の人間を強制的にIS学園に入学させる契約書の様なものであった。もし逆らえば実刑判決は免れない、問答無用な極悪アイテム。

なおこれは、織斑一夏の強制入学にも使用されている。

「おい東！こんな書類をどうやって作った！」

「ふっふっふ。東さんに不可能はないんだよ。じゃあねちーちゃん！本当なら箒ちゃんにも会いたいけど、箒ちゃんを驚かせる為のプレゼントが造り終えるまで、会うのはがまんがまん。じゃーね！」

それだけ言うと東さんは風のように何処かへと消えていった。

「相変わらず凄く、个性的な人ですね。篠ノ之博士……」

「……」

「……」

その後、お互いに気まずい場面が続いていった。

「と、とにかくですね。私は彼を学園などには・・・」

「・・・いいよ。学園。通っても」

「へ？」

相変わらず視線は合わせず、ゴーグルとマスクの修理が完了し、装着した。

「ユーゴ。今、なんと言った・・・」

「だから、別に学園に通ってもいいよ」

「・・・ユーゴ!!!」

先程の気まずさから一変。今度は如月さんの絶叫が談話室に響き渡った。

帰り道、既に夕焼けが空を覆っていた。車内では運転席に如月さん。助手席にユーゴが座っていた。あの後例のISのコアは、如月さん達からIS学園に、情報の提供の元に、コアを貸与する事となった。その代わりとして、白金ユーゴの学園の入学を許可する。え？これって裏口入学？ちよつと知らない言葉ですねえ。
「にしてもユーゴ。まさかお前から学校に通いたいとはな。驚いたぜ」

「すみません。やはり迷惑でしたか？」

「まあな。だがユーゴが動きにくくなる反面、IS学園に籍を入れるのは、例の事件を探る上でかなりのアドバンテージになる。あそこのセキュリティは強力だが、俺に突破できないわけではない。そこに侵入しやすくなる。そこからあらゆる方面を調べてみる」

「俺もそう思ってたであえてあの話に乗ることにした。どうせあそこで断つても、あいつらが素性を調べようとするなりで周りをウロチョロされたらたまらん。なら敢えて、こちらから出向く事で、奴等の目を如月さんに向けないようにする」

やがて交差点に差し掛かる。本来なら直進するが、この時、ユーゴが突然叫んだ。

「あのっ！右に曲がって、そして車止めてください！」

「ユーゴ？」

言われた通りに車を操縦する。すると車は病院の目の前で止まった。

「・・・先に戻ってください。俺はちよつと、寄りたい所があるんで」
「・・・分かった。ある程度時間が経ったら迎えに来る。夕飯はコンビニおにぎりだ」

その場でユーゴを下車させ、また迎えに来る事を伝えた後に車を再発進させた。

数分後、ユーゴは病院のエレベーターに乗っていた。ここに通つて数年が経過している。一階の花屋さんには、顔や名前まで覚えられ常連さん扱いである。

いつも買っているのと同じ花束を買い取り、そして目的の階へと到着する。まだ廊下には色々な患者さんがいたが、自分の様な面会の人はいない。やはり夕方に面会は、時間的に遅いみたいだ。

503号室。集中治療室のようなそこでは、一人の少女が眠っていた。年はユーゴより少し上くらいだろうか。その身体には点滴や生命維持装置など、嚴重とも言える程重症であった。

何より頬には、ユーゴと同じようにマーカーの跡が刻印されていた。ユーゴはベットの隣の椅子に腰掛け、一人語り出す。

「なあ奏かなで。俺さ、学校に通う事になったんだ。だからここに、あまり来れなくなるかもしれないんだ・・・お前はどうかんだ？夢の世界には学校があるのか？そこで友達いっぱいできたのか？とにかく、絶対に治療法を見つける」

「それにきつと、復讐してみせる。忘れもしない。お前やオレを、あん

な目に合わせたあいづらに……必ず」

「……だからお願いだ。早く……早く目を覚ましてよ」

「白銀君。今日もお見舞いですか？」

一人の看護婦が病室へとやってきた。もう何年もここに通っている為、名前を覚えられた様だ。

「ええ。それより彼女の容体はどうです？何かワクチンなり薬なり、解決の糸口は見つかりましたか？」

「ごめんなさい。成分の分析は一向に進まないわ。治療法も……」

「そうですか」

「……さっきの話、聞いてたわ。学園に通うんですってね……貴方の人生は貴方の物。だから私が口出しする事じゃないかもしれないけど、これだけは言わせて。復讐に囚われて、前に進めなくなる事を、彼女はきつと望んでない。前を向いて歩くべきよ」

「……だからです。俺が前に進む為にも、過去に決着をつけるんです。そして必ず助けるんです。だって……友達だから。俺の、たった一人の……」

「白銀君……」

復讐者としての仮面は今はずれていた。花瓶の花と水を取り替えると、その病室を後にした。出る直前、彼は右頬の痣の様な刻印に触れた。鉄の様に冷たく、温もりなど微塵もない。自分の様に……病院を出ると、如月さんの迎えがきていた。時間が経つのを忘れていたのか、空にはもう月が顔を出していた。

夜道をひたすらに走り続ける車。その車内では音楽だけが流れており、誰も口を開こうとしなかった。しかし、ついに如月さんが口を開く。

「ありがとな。妹の見舞いをしてやってくれて」

その言葉になんの反応も見せず、フードを目深に被り、ユーゴは眠りについた。右頬の辺りにあるマークが、妙に痛々しく見えた。

ちょうどその頃、IS学園の一室では、ある事を調べている山田先生と織斑先生がいた。

「やはりそうです。今はデータが少ないですが、白金ユーゴのISのコアも、アラスカ条約に登録されている467個の登録データには無い、未知のコアです」

「あの謎のIS、束によるとゴーレムと同じ、コア情報の無い完全なオリジナルと言うことか。単純な考えでは束がコアを作つてやったが思い浮かぶが、あの時の様子からしてそれは無い。となると、あのコアは何処で造られたコアなんだ・・・」

「それと二人についてなんですが、インターネットなどで調べても手がかりが殆ど見つかりません。如月慎吾については多少ですが検索がヒットしました。機械工学や電子工学などで多少名が知れ渡り、将来を有望視されていましたが、7年前に突然通っていた大学を中退。その後の足取りは不明です」

「白銀ユーゴ。こちらについては、インターネットを調べても何も出てきません」

「そうか・・・」
(それにしても、一つだけ気になる事がある。束のやつがあいつの頬を妙にチラチラ見ていた事だ。あの傷跡の様な物に何かあるのか・・・)

それから時間は流れた。モノレール乗り場にて、IS学園の制服を着込んだユーゴは如月さんと会話をしている。尚、IS学園の制服は、個人カスタムが許されており、ユーゴはフードを自前で制服に取り付けた。

「じゃあ、暫く対面ではお別れだな」

「こちらでも定期的に連絡などは入れるつもりだ。だからお前はお前の人生を堪能してくれ」

モノレールの扉が閉まる直前であった。

「ユーゴーこれ、お守りとして持っていけ」

投げ渡された一枚のカード。しわくちやな程にぼろぼろなトランプのジョーカー。これまでの彼がお守りとして大切にしていたカードだ。

「・・・ふっ。お守りか」

カードを大切に制服の裏ポケットへと仕舞い込む。モノレールはもう駅を出ていた。下を覗くと如月さんの車が見える。今正に乗り込んだ。

「鬼が出るが蛇が出るか。何であれ、これで俺たちの中で停滞していた時は動き出す。ゆっくりとだが、確実に・・・」

それだけ言うと如月さんは車を発進させた。

「ねえ君。ひよつとしてISS学園の転校生？」

モノレールに乗って窓から外を眺めていると、不意に声をかけられた。声の方を向くと、目の前に自分と同じ制服の人物がいた。

「・・・ああ。そうだ」

「僕もだよ。僕はシャルル・デユノア。よろしくね」

「・・・白銀ユーゴだ。よろしく」

第4話 ボーイ・ミーツ・ダブルボーイ

IS学園。アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約がある。

まあ平たく言えば国立の教育機関の事だ。(違うような気がする) その1年1組。現在この学年はある話題で盛り上がっていたが、その話題について触れるのは次回辺りにしよう。

このクラスに在籍している者の中に、あの織斑一夏がある。他にも篠ノ乃箒。セシリア・オルコットもこのクラスに在籍している。なお、凰鈴音は2組に在籍中だ。

織斑千冬はこのこの担任。山田真弥先生が副担任を務めている。

「はい。皆さん。今日は、皆さんに嬉しいお知らせがあります。なんとこのクラスに転校生が二人、やってきました。それではどうぞ」扉が開かれた。そこから現れた人物に、皆が啞然とした。

「シャルル・デュノアです。よろしくお願ひします」

「・・・男？」

ようやく発した第一声がこれである。目の前の人物は美男子。この言葉はこの人物の為に生まれたと言っても過言では無いほどに当てはまっている。

「ええ。こちらに僕と同じこちらに僕と同じ境遇の方々が居ると聞いて、本国より転入を・・・」

「「「キヤー！！！」」」

「大丈夫ですか!?何かありましたか!?」

「不審者ですか!?それとも痴漢ですか!?」

その歓喜の声は廊下にまで響いてきた。喜びが限界突破する。これに何事かと廊下に顔を出す2組以下の面々。クラス担任など慌てて来てしまい、現在山田先生が必死に謝っている。

「!?」

「この騒動で一番驚いているのは、あるシャルロット本人であった。

「男子！本物の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「騒ぐな！静かにしろ！先生方、何もありません。教室にお戻りください……っ。次はお前の番だ。早く入ってこい」

再び扉が開かれる。その顔に一夏、箒、そしてセシリアが真っ先に反応した。

「「ああ！お前はあの時の！」」

「白銀ユーゴだ。既に見知った顔触れも数人いるが、よろしく頼む」

「「キヤーーー!!!」」

「大丈夫ですか!?何かありましたか!?」

「不審者ですか!?それとも暴漢ですか!?」

再びクラスメイト達の興奮のボルテージが限界突破された。今度は何事かと各クラスの担任が駆け付けてきた。現在山田先生が超必死に謝っている。

「三人目の男！こっちも結構美形！」

「新たな男子属性！ツンツン系!!」

「守りたいタイプ!!」

幾ら何でもオーバーリアクション過ぎる。シャルロットと同じ様に、ユーゴも心の中で結構動揺していた。

「騒ぐなど言っただはずだ!!」

その一言で再び教室は静かになった。ユーゴにとって、とりあえず担任である彼女の強さと言うものが窺えた。

「二夏。二人の面倒を見てやれ。同じ男子同士だろ。今日の一限は2組との合同演出だ。各人は着替えて、第二グラウンドに集合だ！遅れるな！」

その後、道中でそれなりの厄介があったが、それは割愛で。三人はロッカールームへと辿り着いた。

「二人とも。これから宜しくな。俺の事は一夏でいい」

「よろしく一夏。僕はシャルルでいいよ」

「よろしくなシャルル。じゃあ白銀はなんて・・・」

「好きな様に呼んでくれ」

それだけ言うと、ユーゴは黙ってロッカーを開け、荷物などを漁り始めた。

(無愛想な奴だな)

「つてやべ！時間がねえ。二人とも早く着替えちまおうぜ」

「うわっ！」

すると突然シャルルが目を押さえ、背を向けた。

「何やってんだ？早く着替えないと遅れるぞ。特に、うちの担任は時間の遅れに煩いから」

「うん。直ぐに着替えるよ・・・でもちよつと、向こう向いてて」

「?・・・まあ、別に着替えをジロジロ覗くつもりはないからいいけど。早くした方が・・・」

ほんの少し目を離しただけなのに、振り返ると既に二人とも既にISSスーツに着替えていた。この間、僅か数秒である。

「二人とも着替えるの早いな。なんかコツとかあるのか?」

「いや、別に・・・ハハハツハハハハ」

「そうだ。コツじゃなくて慣れの問題だろ」

「慣れか。そうだよな。俺も早いとこ慣れないとな。これ着るときに裸になるから、ちよつと引つかかっちゃまって。その感覚苦手なんだけど、それに慣れないとな」

「ひっ！引っ掛かる!？」

シャルルが何故か赤面している。何を想像しているんだこの人は。

「二人とも、そのスーツ着やすそうだな。何処の製品なんだ?」

「俺のISSスーツは自家製だ」

「手作りしたのか！凄いな。じゃあシャルルも?」

「ううん。僕のはデュノア社が作ったんだよ。まあ、オリジナルだけどね」

「デュノア?確か、お前の苗字もデュノアだよな?」

「父が社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいISS関係の企業

だと思う」

「デュノア社。フランスに本社を置く、量産型ISシエアが世界第三位の大企業。主製品のラファール・リヴァイヴはフランスのデュノア社製の第二世代型ISで、扱い易さと豊富な追加装備がウリの機体として、IS初心者向けとして有名だ」

「これまであまり喋らなかつたユーゴが、珍しく多く喋っている。

「・・・色々と詳しいんだな。ユーゴはそういうのとか調べてるのか?」
「まあ、ちよつと仕事で色々なISのデータに触れる機会があつて、その時に知つた程度の情報だ」

「でも社長の息子か・・・どうりでな」

「どうりでつて?」

「なんか気品があるつて言うか、良いところ育ちそうじゃん。納得した」
その顔にシャルルは何処か、哀しげな複雑な表情をしていた。その事に二人は気づいてはいない。

第二アリーナでは、1組と2組との合同実習が行われていた。

「本日からIS実習を行う。まずは戦闘を実践してもらおう。凰!オルコット!そして白銀!三人は前に出ろ」

呼ばれた三人が前へとでる。そして三人が顔を見合わせると、凰が驚いた様に叫んだ。

「あー!あんた!この前の!」

「それ。今朝の集まりの時にも言われた」

「全く、なんで。こういうのは見せ物みたいで嫌ですわ」

「ふん。それは同じよ」

セシリアと凰の二人は何かと不服な愚痴を溢すが、織斑先生が何か二人に耳打ちをした途端、二人のやる気が全開になった。

「やはりここは、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「実力の違いを見せる良い機会よね!専用機持ちの」

どんな魔法の言葉をかけたのだろう。一方の白銀は態度の急変し

た二人を、冷ややかな目で見ていた。

「騒ぐな。お前達三人の相手は上にいるぞ」

織斑先生が指を差した。その指さした方を皆が見た。快晴とも取れる青空、その遙か上空から何か降下、いや落下してきた。

「どいてくださいーいー!」

女子達が大慌てで逃げる中、運悪くその墜落場所にいた存在がいた。織斑一夏だ。

「うわっ!」

「一夏!」

「……!?!」

砂埃が収まった頃、一夏が目の当たりにしたのは山田先生の顔であった。それもかなり距離の近い。慌てて手を見ると、彼女の乳の部分を触っていた。

「だっ、だめです織斑君。困ります。生徒と先生の間で、こんな……でも、このままいけば織斑先生が義理のお姉さんということで、それはそれでとても魅力的な……」

この人は心までどっぷりと自分の世界に浸っている。慌てて事態を理解した一夏が飛び上がるも、その直後、横からビームが飛んできて、目先を通り抜けた。その主はセシリアだ。

「ウフフフ。ザンネンデス。ハズシテシマイマシタワ」

セシリアの顔が笑っているが、心は完全に怒っている。言葉も片仮名だし、全身から殺意が溢れている。

「一夏アアアア!!」

鈴に至っては完全に殺る気スイッチが入っている。見て一瞬で気づくレベルだ。青龍刀の双天牙月を持ち出し、一夏目掛けてぶん投げた。

「うわああああっ!!」

【バンッ!バンッ!】

目の前まで飛んできた青龍刀の軌道を逸らす弾丸が放たれた。山田先生だ。しかも、先程までのはほんと墜落した者とは思えない目つきで。

「織斑君。怪我はないですか？」

「は・・・はい。ありがとうございます」

「山田先生は元代表候補生だ。今の射撃など造作もない」

「やめてください。候補生止まりでしたし」

とはいえ、あの射撃は並大抵の人間が齧った程度で取得できる代物ではない。努力の積み重ね。それが今の一打まで成長したと言えるだろう。

「さて小娘共。そして青二才。お前達三人の相手は山田先生だ」

「ええっ!? 本気なの!？」

「よろしくって? いくら三人共専用機持ちとはいえ、二人の代表候補生を同時に相手するなんて」

「安心しろ。今のお前達なら一枚のシールドも突破できずにすぐ負ける。白金もとつとと自分のISを展開しろ」

その言葉に二人が不服そうな顔をする。国家代表候補生。仮にも今後、IS乗りとして国家の誇りを背負う存在になるかもしれない立場である以上、そこに誇りやプライドは存在するのだ。

尚、ユーゴはそういうのには一切の無関心無反応であった。

「来い。ワイルド・ジョーカー」

ユーゴの呼びかけで1秒もたたずに、ISが装着された。そのISに生徒達が騒めきだす。

「ねえあれ? あのIS!?! 蒼炎の狩人なんじゃ!？」

「嘘でしょ!？」

「違う。それは他人の空似だ」

織斑先生がキツパリと断言した。

「えっ? でも」

「そいつは確か、ゴーグルとマスクを付けていたはずだ。俺はそんなもの付けてないぞ」

「確かに。じゃあ空似か。空似なら良くあるし、仕方ないね」

ユーゴが付け足す言葉に彼女達は随分とあっさり納得されたようだ。無論、織斑千冬と山田真耶の二名は、ユーゴの正体を知っているが、個人に関わる為、黙っている。

(ワイルドカード。万能の札を意味する言葉。そしてジョーカーは切り札。直訳すれば、万能な切り札か)

そんな中、ジョーカーを一度見ている一夏達は、ある疑問を感じ取った。背中に羽織っている黒マントだ。

(あれ？確か初めてみた時、あんな黒マントついてなかった様な気がするけど)

「では・・・始め!」

4人は上空へと飛び立った。

「手加減はしませんわよ」

「さっきのは本気じゃなかったしね」

「・・・」

「い、行きます」

言葉こそいつもの山田先生と同じだが、その目つきと表情は全くの別物である。次の瞬間には、セシリアと鈴の先制攻撃を難なくかわした。

「山田先生、凄い機動だな・・・」

ギャラリーからも感嘆や賞賛の声が漏れる。セシリアのIS、ブルーティアズのビット攻撃すら、難なくかわしている。彼女を見てきた人からすれば、普段と今のギャップに驚いているのだろう。

「デュノア、山田先生が使っているISの説明をしてみせろ」

「はい。山田先生のISは、デュノア社製、ラファール・リヴァイヴです。第二世代開発時の機体ですが、そのスペックは初期第三世代にも劣らないものです。現在配備されている量産ISの中では、最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、装備によって、格闘、射撃、防御の切り替えが可能です」

シャルルの説明が終ると同時に、上空で爆発。二人が悲鳴と共に墜ちてきた。どうやら二人は終わったようだ。

「アンタねえ!なに面白い様に回避先詠まれてるのよ!」

「鈴さんこそ!無駄にバカスカと撃ちすぎですわ!」

こうしてあつという間に二人が撃墜された。二人とも即席とはいえ、共闘に全く慣れていないのだ。

(あの教員の動き。癖という癖がないな。教員とか関係なく、ISの腕前はかなりのものか)

「さあ、後は白銀君だけです。遠慮せず、何処からでもどうぞ」
「では、遠慮なく」

二人が戦っている際は静観を決め込んでいたユーゴがついに動き出す。

次の瞬間、山田先生は急接近して来るジョーカーを銃弾で撃ち落とそうとした。しかしその弾を、黒マントで受ける事で機体への直撃を防いでいた。

「そのマント！実弾を防げるんですか!？」

あまりの予想外の性能に山田先生の反応も少し遅れる。距離があると僅かとなった所で、マントの下からナイフが顔を覗かせた。

その掻っ切った一撃で、敵ISのシールドが多少削られる。だが次の瞬間には、近距離からの鉛玉の雨の直撃を浴び、ジョーカーのシールドエネルギーが一気に削られた。

こうして山田先生は三人を相手に、ほぼ圧勝していた。

「ナイフの一撃は、シールドを少し削っただけか」

「さて白銀。その装備などについて解説しろ。防具と武器についてだ」

「この機体の兵装は三つ。一つ目は熱衝撃吸収マント。衝撃や熱を吸収する素材でコーティングされている為、実弾やビーム兵装に対して一定量まで無力化できる。とはいえ、あくまで気持ち程度の無効力の為、過信するのは得策ではない。利点として、製造過程で既にコーティングされている為、IS本体のエネルギーを使う必要がない事だ」

「次に二つ目。これはマントが来る前に使っていた兵装で、ビームシールドだ。これはISのメインエネルギーとは別の箇所からエネルギーを得ている。シールドバリアがあるがあれはISのエネルギー消費に繋がる為、これを出来るだけ使って攻撃などを防いでいる」

「そして三つ目の兵装。それがこれだ」

ナイフを取り出し、一回転させた。その手捌きは扱いに慣れた人間の物である。

「使用する武器はそのナイフだけか？」

「ファストナイフ。見ての通りミリタリーナイフだ。普段からISの腰の箇所にも納めてる為、パッケージは必要ない。基本的にはこのナイフで斬りかかるのが俺の戦い方だが、強いダメージを与える場合にはISの一部エネルギーを纏わせる。武器としては今の所、エネルギーを纏わせる際を除いて、ISのエネルギーを使うことはない」

「なるほど。このISは織斑の白式の問題点たるエネルギーの消費。それを抑えるに抑えた機体らしいな」

「そうなるな」

【バシッ！】

ISを解除した直後、ユーゴに出席簿による重い一撃が振り下ろされた。それに何のリアクションも起こさない。

「痛いぞ」

「少しは敬語を使え。で、その装備はやはり」

「これらの装備のほとんどは独自IS研究開発社から、性能テストを名目として与えられた」

その会社の名前を聞いた時、周囲の人間が騒めきだした。

「独自IS研究開発社？」

「聞いたことないな。下町にある様な小さな会社なのかしら？」

「とにかく、これで教員の實力の程は理解してもらえただろう。これからは敬意を持って接するように。では次にグループに分かれてもらう。リーダーは専用機持ちだ。では分かれろ！」

第5話 実習開始

「はい！チョココメントとストロベリーのダブルでお待ちのお客様！」
その後、ユーゴと分かれた如月さんは今日も街の広場の一角でアイスを売っていた。今日の売り上げも上々。ユーゴが共に行動できない為にペースが僅かながらに落ちたものの、上手く切り盛りして経営をしていた。

お客は商品を受け取ると、満足そうにその場を去っていった。

「またのご来店、お待ちしておりますよー！」

一通りの客波が収まり、次の販売場所に移動するまでの時間もある為、多少なりとも寛ぎ始める。

【ピピーツー】

その電子音が横になっていた身体を起き上がらせる。突然店を閉め、車外から開けられないように内側から鍵をかける。今の音は、パソコンの深層ウェブの裏サイトに、IS系の事に関する書き込みが行われたのだ。

その殆どが表沙汰には公表出来ない内容だ。そう言う情報売り捌いて生計を立てる者もいる。そんな者達の為のサイトだ。無論、この様なサイトへの監視の目は強くある為、書き込まれた内容も、その殆どが一時間もたたずに削除されてしまう事が殆どだ。

彼のPCには、インターネットの裏サイトにISに関係する書き込みが行われると、自動で反応するソフトが導入されている。無論手作りだ。他にも、如月さんのPCは自家製のウイルスやウイルスバスターなどが備えられており、インターネットでは怖いもの無しだ。

「今回は裏サイトへの垂れ込みか。どれどれ・・・ISの研究所が謎の襲撃により壊滅」

これだけ聞くと、テロにでも巻き込まれたと思うのが、それなら普通に表サイトなりニュースなりで書き込まれるはずだ。こんな裏サイトに書き込まれる訳がない。その根拠付けの様な内容も、この後に続いていた。

「今回壊滅した研究所は、表向きには問題ないが、その裏ではアラスカ条約で禁止されている、危険なシステムを研究していた疑惑が、常々持たれていた・・・か」

（アラスカ条約で禁止された危険なシステムか）

「・・・くそっ！これもハズレか」

その後もPCから裏のインターネット内の情報をかき集めるも、自分達の求める様な大した情報はない。これ以上こうしていても意味がないと判断し、そのデータを専用のフォルダなどに保存し、PCの電源を落とした。

こうしてこの場での販売を終了し、次の販売場所へと車を走らせる。

（ユーゴの奴。初日に問題起こしてないだろうな・・・）

時を同じく、ユーゴ達はというと。班を分ける作業で手間取っていた。

とりあえず専用機持ちはユーゴを含めて5人。これに織斑先生も加わって6人だ。だがここで問題が発生した。希望の班が偏ってしまうのだ。なんて言うか、案の定男三人、一夏とシャルルとユーゴの三人に集中した。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「さっきの模擬戦。よかったと思うよ」

「・・・まったく。満足に班分けも出来んのか。出席番号順に並べ!!それで班を分けるぞー！」

このままではおそらく永遠に決まらないだろう。話し合いに埒があかない為、千冬さんが取り仕切る最も公平な出席番号というやり方を選んだ。こうして、6つの班に分けられた。

「勝手にあちこち触っちゃ駄目よ。怪我しても知らないからね？」

「まずは、順番に装着してみてください」

「いいか小娘ども。遊びじゃない事を留意しておけ」

その後も実習は進み、鈴とセシリア。千冬先生の三グループは順調の様だ。一方、残りの三グループはどうかというところ・・・

「それじゃあ、出席番号から順に初めて行くか。まず一番は・・・」

「はいはいはい！出席番号一番、相川清香。ハンドボール部、趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ。よろしくお願いします！」

そう言つて、右手を一夏に差し出した。

「ああ！ズルい！」

「私も！」

「第一印象から決めていました！」

後続く様に、三人から右手を差し出されている。

「お願いします！」

「はい！よろしくお願いします！」

「・・・え？はい？」

「ご指導、よろしくお願いします！」

「・・・何これ？」

シャルルやユーゴの班も、一夏と同じ様な状態になっていた。

(俺たち三人。これから大変だな・・・)

こうしている間に、一夏の班にISを届け終えた山田先生から、ユーゴとシャルルの元にもISが届けられた。

「二人とも、これが訓練用のISですよ」

「これは打鉄うちがねか。純日本産の量産型IS。世界で2位の量産機。性能が安定しており使いやすく、主に装甲強度重視型。ここではこれが訓練機なのか」

「白銀君。ISについて詳しいんですね」

「えっ、ええ。まあ。じゃあ早速一人目から・・・」

「あの、山田先生。これ、どうやって乗り込ませるんですか？」

「あっ」

実は山田先生は訓練用のISを、既に展開した状態で運んできてしまった。その為、本来行うべき展開が出来ない状態になっているの

だ。

「すいません。これは初心者がよくやるミスなんです。で、こう言う時には出すね・・・」

「二「キヤパー!!」二」

不意に聞こえた歓声。今日聞いた中でもダントツに一番だ。もし近くで聞いたら鼓膜が破けてたかもしれない。山田先生含め、皆が驚いてその方を見ると、一夏が箒をお姫様抱っこしていた。白式を展開して、箒を打鉄へと運んでいる。

「あの様に、リーダーの白銀君やデュノア君がISを展開して、乗せてあげてください。二人とも、IS学園での授業は初めてで、その上でリーダーで責任は大変でしょうけど、頑張ってください!」

あつさり言い放ったその言葉と、班の女子達の視線が一気に強くなる。正直痛い。獲物を狙う猛禽類でも、ここまで強い視線は送ってこないだろう。

「じ、じゃあ一人ずつね。これと同じ様なミスは繰り返さないようにしないと」

「・・・はあつ。やればいいんだろ」

尚、その後も何故かこれと同じミスが連発した。玉突き事故かな？結局二人とも最後は視線に根気負けし、基本的に彼女達をお姫様抱っこで担いで行くことになった。これは一夏の班も同じだが。

こうして、午前中の授業は終了した。

「授業って結構疲れるもんだな」

「そうだね。あつ、着替え終えたからもういいよ」

更衣室で着替えているユーゴとシャルル。シャルルの要望でいいと言うまで背後を振り返らないでと頼まれたので、互いに背中語り合っている。今日入ってきたばかりの彼等にとって、周囲からの視線など、まだ一夏のように慣れていない事ばかりである。そんな中、シャワーを浴びていた一夏が戻ってきた。

「お疲れさんシャルル。それにユーゴも。二人とも凄いいんだな。国家代表候補生に試験機のテストパイロット。やっぱそれなりにISに触れて来たんだなあ。なあ二人とも。よかった昼、一緒に食べないか

「？箒に誘われてさ。セシリアや鈴も呼んでるんだ」

「いいの？」

「いいのか？」

「ああ。二人ともまだIS学園に慣れてないだろう？それに、飯はみんな食えば美味しいからな」

「ここで話は先程、一夏が箒をお姫様抱っこして打鉄に乗せた時に遡る。」

「・・・おい一夏。昼に、何か用事はあるか？」

「？急にどうしたんだ、箒？」

「その・・・だな。今日の昼、何か予定が有ったりするのか？」

「いやあ、特には」

「そうか！では偶には一緒に食事を取ろう！うむ！それが良い」

「ああ、別に良いぜ」

「この時の箒の表情は、この世の全てに打ち勝った、そんな嬉しさの笑みを浮かべていた。もう何も怖くない。」

「そして多分、いや間違はなく箒がわざわざ誘った理由を、一夏は理解していないだろう。」

「昼休みにて。」

「一夏、これはどう言うことだ」

「ほら言わんこっちゃやない。一夏含め、屋上に集まった6人。その内の箒達が不服そうな顔をしている。先程言った通り、この場の現状が、彼女の中で思っていた状況と違う為だろう。」

「理想では、一夏と二人で楽しく食事を。だが現実では鈴にセシリア。そしてシャルルにユーゴがいる訳だ。」

「だって、飯は大勢で食べた方が美味しいだろう？それにシャルルもユーゴも、この学園に入ったばかりで、右も左も分からないんだし」

「それはそうだが・・・」

「この時、女子三人の間で見えない火花がバチバチ散っている。一応補足だが、一夏は二人を思って、この様な形にした事は留意してほし

い。

第6話 疑惑と出会い

屋上で昼食を食べているユーゴ達。すると一夏が鈴の弁当に興味を示した。

「おお！酢豚だ！」

「そうよ。今朝作ったのよ。以前食べたと言ってたでしょ？」

「コホン。一夏さん。わたくしも今朝は偶々、偶然、早く目が覚めましたので、こういうものを用意してみましたの」

そう言いながら、持ってきたバスケットの中をこちらに見せた。覗き込むとそこには色々な種類のサンドイッチが綺麗に揃えられた状態で、詰められていた。

「一夏さん。よかつたらどうぞ。お二人もご遠慮なくどうぞ」

「ありがとう。じゃあおひとつ頂くよ」

「そうか。ありがとうな」

そう言い男達三人がサンドイッチを手に取り、口の中に放り込む。

「いただきます・・・!？」

「!？」

口に入れた直後、一夏とシャルルの顔が青ざめる。冷や汗の様なものがかかるのが自分で感じ取れる。こんな恐ろしいサンドイッチがこの世に存在するだなんて、ある意味すごい。本能がこの存在の危険性を訴えてきた。

温めたド○ターペッパーの方がまだ美味しい。

「どうです？美味しいでしょう」

満面の笑みで聞いてくるセシリア。間違いなく自分の腕に気づいてないタイプ。ああ駄目だ。ここで不味いと正直に答えてはいけない。

「あつ、ああ。そ、そうだな・・・シャルル？お前はどうか!？」

「ええっ!？そうだね。すごく・・・その・・・」

「美味しいと思うよ」

「!!?ユ、ユーゴ!？」

しかしユーゴだけはセシリアのサンドイッチを顔色一つ変えずに食べていた。しかも特に苦しまず素の状態で美味い。彼の味覚はどうなってるんだ？

その後も食事なのに色々あった。一夏が箒に「はい、あーん」をしたり、セシリアと鈴に「はい、あーん」をされたりなど、様々だ。ユーゴの内心曰く、「自分の食べる食事くらい自分の手で取れ」らしい。こいつ乙女心つてのが分かってねえな。

「ところで質問いいか？三人とも一夏と結構仲が良さそうだが、幼馴染か何かか？」

やがて食事が一段落した為、ユーゴが聞きたい事を聞き始めた。

「なんだ、その様な事か。私は当然だ。何しろ私は、一夏のファースト幼馴染だからな」

「何がファースト幼馴染よ。一夏との幼馴染歴は私とほぼ僅差じゃない」

「なんだと!？」

「何よ」

箒と鈴の間で、再び火花が散り出した。

「二人には俺から説明するよ。まず俺が一番初めに会ったのが箒だ。箒とは小学校4年生の時に、箒が引越すまで幼馴染だったんだ」

「そして箒が引越して俺が5年生の時に、鈴と出会ったんだ。鈴とは中学2年生まで一緒だったな」

「そうそう。私達は一夏と幼馴染なのだ」

「そうよ。アタシと一夏は、切っても切れない関係なのよ」

二人が得意げな笑みを浮かべている。幼馴染とはいいものだ。

「あら。お二人とも幼馴染と言いますが、実質はここで再開したのでしょう？でしたら、その关系的なものはリセット。つまり私と同じ期間ということですね？」

いや、その考えはおかしい。

「ははっ。確かにセシリアとはIS学園で、つまりほんの数ヶ月前に初めて出会ったんだ。正直、出会った当初は、こうして一緒に食事を

するなんて思わなかったよ」

「うむ。そうだな。あの時の一夏からも、こうなる事は私でも想像出来なかったぞ」

箒によると、最初セシリアは一夏に噛み付いたらしい。いや、無論物理的にはない。どうやらクラス代表を決める際、一夏が推薦されたが、セシリアがそれを不服としたらしい。その際の口論がどんどんヒートアップし、最終的にISを使って決着を付けようと決めたらしい。

結果は一夏のISの白式のエネルギー切れによるセシリアの勝利。だがなんと、セシリアはクラス代表を辞退。スライド式で一夏がクラス代表となったわけだ。

そしてそれからである。セシリアが一夏にフレンドリーに接するようになったのは。

「あの時の私は愚かでした。でも、一夏さんと出会って戦った事で、その過ちに気づけたのです」

「じゃあ、僕からも一つ質問していいかな？」

一通りの話が終わり、次はシャルルが口を開いた。

「何？なんでも聞きなさい」

鈴は二人が来るまでは、俗に言う新入り状態であった。クラスこそ違えど、IS学園で自分の後輩？的ポジションが来た事が嬉しいらしい。三人がお茶を飲み始める。

「今月行われる学年別トーナメント。その大会で優勝したら一夏と付き合えるって、どういう事？」

【ブーッ!!】

女子達三人が盛大に飲んでいたお茶を吹いた。あまりに予想外の一撃に男達三人が驚く。

「ああ。そう言えば箒に言われたな。優勝したら付き合ってくれて」

「なっ！何をこんな所で言っている!!」

「別にいいだろ。クラスみんなが知ってるみたいだし。別に優勝しなくても、言ってくれば付き合うつもりだぜ」

「・・・つまり、お前は誰でも良いという事か？」

「フツ！ウフフフフフツ!?イチカサーン!？」

「一夏ア!!アンタは!アンタって男は!!!」

「えっ!なっ、何を三人とも怒ってんだよ!」

絶対この人、付き合つての意味を間違つて捉えてる。二人がその確信を得た。だがこれは一夏の問題だ。二人は口出しする事をやめた。丁度その時、チャイムが鳴った為、幸か不幸かこの話が今後これ以上発展することなく、一旦打ち切られた。

その後、授業も終了し一夏達は寮の自室へと戻っていた。

IS学園に通う生徒は、基本的に全員寮に住む事になっている。尚、これまで一夏は箒と部屋を共にしていたが、昨日部屋の調整がついた為に、部屋移動。本来二人部屋だが、一夏達は特例として、シャルルとユーゴの三人部屋となっている。

ユーゴは寝袋を持参している為に、二つのベットは一夏とシャルルの物だ。

「ふう。男同士ってのはいいもんだな」

「このお茶、紅茶とは随分違うんだね。不思議な感じだ。でもとても美味しい!」

現在この部屋には一夏とシャルルがいる。ユーゴは戻るなり何処かぶらぶらしに行つたらしい。一夏の淹れた緑茶を二人で飲んでいく。

「ところで一夏。一夏は放課後、ISの特訓をしてるんだよね?」

「ああ。俺は他のみんなよりIS関係が遅れてるからな。ISに触れたのも、高校生になってからだ」

「僕も加わっていいかな?専用機持ち出し、何かしらの手伝いは出来ると思うんだ」

「ああ。ぜひ頼む!そうだ!ユーゴも誘ってみるか!」

【プルルルル。プルルルル】

「あつ、ごめん。ちよつと電話が来ちゃって。失礼するね」

バックの中に入っていた携帯電話を片手に、シャルルは部屋を後にした。

その数分程前。屋上にて。そこではユーゴが電話で外部の人間と話をしていた。

「如月さん。聞こえますか？」

「ああ聞こえるゼユーゴ。どうだ？学校を通ってみての感想は」

「話には聞いていましたが、個性的な面子が多すぎます」

「まあそうだろ。お前が入るでは織斑一夏って男以外、ほぼ女子だった訳なんだし。男のお前が物珍しいんだろ」

「男と言えば、俺と一夏の他ににもう一人男が居たな。確かシャルル・デュノアとか言ったな」

「シャルル・デュノア？デュノアってあのISのフランス大手企業のデュノアか？」

「ああ。彼はその社長の息子らしい」

「デュノア社の社長の息子？・・・ちよつとそのまま待ってる。調べたいことが出来た。今からデュノア社のコンピュータにハッキングを仕掛ける」

電話の奥から心地良いほどのキーボードを叩く音が聞こえて来る。パチパチ叩くその音は、余裕のハッキング状態を窺わせる。彼にかかれれば、インターネットなど手足だけでなく、脳の様なものである。

「待たせたな。結論から言おう。そいつの存在はありえない。デュノア社の社長の御息を片っ端から調べたが、妾の子含めて、シャルル・デュノアなんて人間は存在しない」

「存在しない!?でも、こうしてシャルル・デュノアと言う人物がこの学園に転入してきたぞ。デュノア社の社長の息子も、あいつが自分で言っていた」

「だが存在しないんだ。仮にそいつ個人のデータを消したとしたら、そんな存在をIS学園に送り込む事が不自然だ。フランスの代表候補生なら、フランス政府が送り出したに等しい。この事に気づかない訳がない」

すると如月さんの表情が再び変化した。何かに気づいたらしい。

「……待て！今その学園から、特殊な電波が放出されている。これは……電話に見せかけた暗号による秘密の回線だな。ってこれ！送信されている場所はデュノア社じゃないか!!」

「何!?!本当か!?!」

「ああ。ハッキング中に電波受信してんだ。間違うはずがない。くそっ！複雑にネットを経由している。これじゃ盗聴は出来ないか」

しかしこれで、二人の中でシャルルに対する疑惑が深まる。存在しないはずの存在。デュノア社に発信された不自然な電波。二人の中である結論が出た。

「おそらくだがそのシャルルって奴は、俺たちと同じで、普通の学生って線ではない。間違いなく腹の中に色んなものを溜め込んでるだろうな」

「どうする？ここは自白剤を使って、裏について締め上げるか？」

「いや。学園にいる以上、下手な手出しは此方に不利益だ。それにまだ明らかかな確定していない。あくまで今分かったのは、シャルル・デュノアなる本来存在しない存在。それがIS学園にいると言う事だ」

「理想としては、奴が直接的な行動を起こしたその瞬間、拘束し情報を引き摺り出す事だ」

「気をつける。奴がネクロノミコンだとしたら、既にお前の事は組織に知らされているかも知れないぞ」

「……上等だ」

「ふっ。その言葉が聞けてこっちは安心したぜ。また何か分かったら連絡する。それとユーゴ。これはあまり関係ないんだが、今日裏サイトのニュースに、ISの研究所が襲われるって内容のニュースが書き込まれた」

「裏サイトに書き込まれるくらいだ。どうせ裏で黒い事を色々やって、何処かから恨み買って私刑に処されたんじゃないか？」

「ああ。俺も半分以上はそう思っているが、果たして本当にそうなのか、疑ってる面もある。こちらでも色々探ってみる。これだけだ。じゃあなユーゴ。体調に気をつけろよ」

その言葉と共に、電話は切られた。その後暫く、ユーゴは黙って暗くなった画面を見続けていた。複雑な表情で。

(存在しない存在か・・・)

少し考えた後、ユーゴは屋上を後にした。

そして次の日、SHRにて山田先生が教壇に立っていた。その隣には、一人の少女が立っていた。

「えー・・・本日も嬉しいお知らせがあります。またこのクラスに、お友達が増えました。ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

教壇の隣に立っている少女は、何処か軍人らしい雰囲気醸し出していた。猛者のオーラが滲み出ている。何より目を引くのが、左眼の眼帯だ。

「また？これで2日連続よね」

「ちよつと変じゃない？」

「みつ、皆さん。静かにしてください」

流星にこの流れ自体に違和感を覚えたのか、クラス内が多少ざわついていた。山田先生が嗜めるも、彼女自身も変だと思っているのか、口調に表れている。

「ラウラ。自己紹介をしろ」

「はい。教官」

(教官?)

ユーゴ達には何が何だか分からない。だが、一夏にはその言葉に心当たりがあるのか、考え事をしている顔をしていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・以上ですか？」

「以上だ。さて。貴様が織斑一夏か・・・!!」

するとラウラと一夏の方に目をやった瞬間、後ろの席のにユーゴと目が合った。するとラウラが突然、一夏ではなくユーゴを睨み始め

た。いや、ユーゴの頬にあるマーカを睨んでいるのが、正しい言い方だ。

「・・・おい貴様。その頬。まさかアス」

【シャツ!!!】

言い終わる前にラウラの頬を何かが掠った。それはナイフであり、ホワイトボードに深く突き刺さっていた。外した。いや、ユーゴがワザと外したと言うべきか。ラウラの頬からは多少の血が滴り落ちた。「二度と俺の前でそれを口にしようとするな・・・今のうちに皆んなに言っておく。この頬にあるマーカ。これは俺の住んでいた土地の仕来りの様なものだ。これについて触れるのを俺は良しとしない。もし触れるなら、俺のいない箇所であって触れてくれ。以上だ」

それだけ言うとユーゴはナイフを回収し、フードを被って席に座り直した。

「・・・よかろう。では私もこの場で言っておこう。織斑一夏。私は貴様を認めない。あの人の弟であるなど、認めるものか!!」

「・・・えっ? なつ、なんでだよ」

一夏のその質問に答えずにラウラは自分の席へとついた。クラスの皆様は、ナイフの件から啞然としていた。

「で、では・・・今日も授業の始まりです!」

気まずい中で、山田先生が何とかして場を持ち直した。それに釣られる形で、皆も場を戻そうとした。

(先生である彼女も大変だな)

第7話 シャルルの秘密

「こうズバーツとやってから、ガキン、ドカン！と言う感じだ！」
「何となく分かるでしょ!? 感覚よ感覚！はあ!? 何でわからないのよ！」

「防御の時は、右半身を斜め上の前方へ5。回避の時は後方へ20。ですわ！」

「わかったか！」

「わかりましたか!？」

「わかった!？」

「・・・いや、マジで全然分からん」

「ああ。それはあまり効果的な説明じゃないぞ」

現在一夏は箒、セシリア、鈴の3名からISについての指導を受けていた。しかし一夏には理解できずさっぱりだ。とはいえ三人の教え方も、擬音多すぎ。フィードリングに頼りすぎ。細かく指示すぎ。と悪い点があるのだが。

その横では、ユーゴがナイフを使って投擲の技を編み出そうとしているが、こちらも上手くいかない。こちらについては一言。ナイフは投げるものじゃない。

「ねえ一夏。ちよつと模擬戦に付き合っただけだ。白式と戦ってみたいんだ」

三人に詰め寄せられた一夏に、助け舟の様に与えられた模擬戦の申し込み。相手はシャルルである。

一夏とシャルルが対峙する。注目の対戦カードにギャラリィ達も集まってきた。

「デュノア君の専用機！あれってラファール・リバイブだよね!？」
「ねえ白金君。あれってどんなISなのか分かるの!？」

クラスでのユーゴの評価はISマニア。その様な感じで纏まったらしい。最もユーゴ自身、自分から進んでしゃしゃり出てくる事が無い為、その様なイメージは薄いのだが。

「流石に専用機とかの情報はそんなに流れてはこない。だが多少は知っている。ラフエール・リバイブ・カスタムII。特徴は大容量の拡張領域バススロットと高速切替ラビッド・スイッチによる武器の切り替え機構」
「これにより距離に関係なく戦闘を行えるのが強みだな。ただし武器の切り替えや残量エネルギー管理など、かなり要領がよくないと使いこなせない」
「じゃあデユノア君。結構な腕前なんだね。あつ、もう模擬戦終わった」

模擬戦は一夏の敗北で終了した。今は先程の模擬戦でなにがいけなかったのかを検討中らしく、先程の筈達より分かりやすい説明をしていた。

「一夏が勝てないのは、単純に射撃武装の特性を把握していないからだよ」

「そうなのか。一応理解してるつもりだったんだけどな」

「この白式イコイライザって後付武装が無いんだよね？」

「ああ、拡張領域バススロットが空いてないらしい」

「多分だけど、それって単一仕様能力ワンオフアビリティの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ？」

「ISが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力。白式の場合は、零落白夜がそれかな？」

「はあ。お前の説明って分かりやすいな！」

「楽しそうにシャルルと話す一夏。その様子を隠れて見る三人の少女がここにいます。」

「ふん！私のアドバイスは聞かないくせに」

「あんなに分かりやすく教えてあげたのに！」

「私の理論最善とした説明に何の不満が・・・」

「言わずもがなである。」

するとシャルルが銃のセーフティを解除し、一夏に手渡した。本来ISは他人の武器を使う事は出来ない。だが持ち主がセーフティを解除すれば話は別なのだ。

「じゃあ、試しに射撃の訓練をしてみようか」

訓練用の的が宙に展開される。シャルルからアサルトライフルを渡された。重い。真つ先に一夏が感じた感想だ。雪片式型より重い。きつと初めて銃を撃つたら、速いと感想が出るのだろう。

白式には銃などの射撃系の武器がない。その為一夏自身も、何かを狙うと言った経験が疎い。よってシャルルからの手ほどきを受ける事になった。

「構えは、こういった感じか？」

「ちよつと違うね。脇を閉めて。後左腕はこう。片目でスコープを覗いて、狙いが定まったら撃つ！」

ライフルから弾丸が放たれ、的の真ん中から左腕を撃ち抜いた。

「そうそう！上手だよ一夏！」

「やっぱ弾丸って速いんだな」

「ねえ、あの二人。ちよつと仲良すぎない？」

すると訓練場の一部がざわめき出した。指さす方を見るとそこには、一つの黒いISが存在していた。

(確かあれは・・・シユヴァルツエア・レーゲンか？ドイツが開発している筈の第三世代型のIS。まだ本国でトリアル段階と聞いているが)

そのISの操縦者に皆が注目する。特徴として覚えやすい左眼の眼帯。一組の面々はもう知っている顔だ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「何！あいつなの!?!今朝、一夏に難癖つけたっていうドイツからの転校生は！」

「織斑一夏」

「・・・なんだよ」

「貴様も専用機持ちらしいな。だったら話が早い。私と戦え」

「嫌だね。戦う理由がねえよ」

「お前になくても、私にはある」

「別に今じゃなくていいだろ。もうすぐクラスリーグマッチなんだから、その時でも」

「・・・ならば」

シユヴァルツェア・レーガンに備えられたレールカノンから、砲弾が放たれた。突然の事に一夏の反応は遅れる。咄嗟にシャルルがISのシールドを展開させ、それを受け止めて、弾道を逸らす。

「いきなり戦いを仕掛けるなんて、ドイツの人って随分と沸点が低いんだね！」

「フランスの第二世代如きで、私の前に立つとは」

「未だに量産の目処が立たない、ドイツの第三世代型よりは動けるからね」

「・・・まあいい。貴様のその腕前ならいつでも潰せる。それより今の私の狙いは別だ。白金ユーゴと言ったな。貴様、私と戦え」

「何故だ？」

「今朝の一件もあるが、私自身が貴様を倒さねば、気が済まないのだ。その頬にある・・・」

【maximum】

次の瞬間、ユーゴはナイフに蒼炎を纏わせると、一気にラウラへと襲いかかった。ラウラもプラズマ手刀でその一撃を受け止める。表情にこそ現れていないが、互いにメンチを切り合っている。

「その攻撃反応。やはり貴様。ただの試験機のテストパイロットでは無いな」

「その人の心にズカズカと入り込む行い。直さないと怪我じゃ済まなくなるぞ」

「その生徒達！いい加減にしないか！」

すると先生の注意がとんだ。流石にこれ以上の騒動は不味いと判断したのか、お互いが武器を収めて離れる。

「・・・ふん。今回は引いてやる。最後に、織斑一夏。これだけは言っておく。私は絶対認めない。お前が、あの人の弟などと、絶対に」

それだけ言うとラウラはISを解除し、黙ってその場を去っていった。ユーゴもジョーカーをISを解除すると、黙って天を見上げた。

「ちよつと一夏！」

「一体どういう事だ!？」

「あの方と貴女の間には、一体何があったのです!？」

箒達の質問に、一夏は何も答える事が出来ない。本当に一夏自身に心当たりがないのだ。ユーゴは何かしら知ってそうだが、今朝の一件がある以上、彼の地雷原を踏み抜く訳にもいかない。

その後、実習も終わりロッカールームでは一夏とシャルルの二人がいた。ユーゴはシャワーも早々に終わらせ、黙って部屋へと戻って行った。

「シャルル。さっきはありがとうな」

「別に気にしないでいいよ。じゃあ僕は、先に部屋に戻ってるね」

「あれ?ここでシャワー浴びてかないのか?シャワー室は空いてるだろ?」

「まつ、まあね。僕はシャワーとかを浴びる際にはボディソープを使うとか、そういうところに拘るから。一夏はゆっくりシャワーを浴びてなよ。その方がいいって!はっ、ハハハハハハ」

そういうとシャルルは逃げるようにロッカールームを後にした。

「・・・変なの」

その後、ちよつと長くシャワー浴び一人で寮への帰路に着く一夏。そんな彼は現在、ある場所で足を止めていた。

「答えて下さい教官!何故、こんな所で!」

「何度も言わせるな、私には私の役目が有る。それだけだ」

(この声は確か、ボーデヴィツヒ?それに千冬姉も?)

一夏が反射的に近くの木陰に隠れる。顔を少しだけ覗かせると、ここから少し離れた場所で、織斑先生とラウラが口論していた。

「こんな極東の地で、何の役目が有ると言うのですか!お願いです教官。我がドイツに戻り、再びご指導を!ここではあなたの能力は半分も活かされません!」

「ほう?」

「大体!この学園の生徒は教官が教えるに値しません!危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。その様な者共に教官が時間を割かれるなど・・・」

「そこまでにしておけよ、小娘」

織斑先生が静かに、だが有無を言わせない程に強く言った。

「ッ!？」

「少し見ない間に、随分と偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間
気取りとは、恐れ入る」

「わ、私は・・・!」

「寮に戻れ、私は忙しい」

「・・・せめて、一っだけ教えてください。教官は気づいているのです
か?白銀ユーゴの頬にあ・・・」

「やめろ」

先程と同じように、全て言い終わる前に織斑先生が話を止めさせた。

「本人は自分のいない所でなら好きに言えと言っていたが、私は他人
の陰口など聞きたくはない」

その言葉を聞いた後、ラウラは走り去ってしまった。一夏はそのや
りとりを全て、木の裏側で聞いていた。

「・・・その男子!盗み聞きか?異常性癖は人として感心出来る行い
ではないぞ?」

「なっ、何でそうなるんだよ、千冬姉え」

「学校では、織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

このやりとりも二人の中では最早定番となっていた。

「下らん事をしている暇が有ったら実施訓練でもしている。このまま
では月末のトーナメントで、初戦敗退だぞ?」

「分かってるよ!」

「そうか。なら良い」

そのまま立ち去ろうとする織斑先生。それを一夏の言葉で静止さ
せた。

「待ってくれ!さっきのラウラって奴が言ってた事・・・千冬姉の弟と
は認めない・・・あれってやっぱ、俺のせいで千冬姉が、二度目の優
勝を逃した・・・」

「終わった事だ。お前が気に病む必要は無い。ではな」

一夏の方を見る事なく、織斑先生は立ち去っていった。その場に一夏だけが残される。

(・・・俺が中学生だった頃、つまり今から3年前。俺は突然誘拐された。気がついたら何処かよくわからない倉庫の中で、拘束された状態で監禁されていた)

(そんな俺を助けに来てくれたのが、千冬姉だった。その日千冬姉は、モンド・グロツソの決勝戦が控えていたが、それを放棄して俺を助けに来てくれた)

(当時、誰もが二連覇を信じていただけに、千冬姉が試合を欠場して不戦敗となった事は大きな衝撃だった)

(そしてその時、俺の監禁場所についての情報を教えてくれたのが、ドイツ軍だった。その時の借りを返す為に、千冬姉は一年程、ドイツ軍で教官をしていた)

(結局、あの誘拐事件が何の目的で起きたのか、それは未だに不明だ。いや、この誘拐事件の報道事態が、表では事件の数日後から突然、一切取り上げられる事すらなかった為に、この事を知るものすら、あまりいない)

当時、この事件で最も疑われた存在がいた。千冬姉の対戦相手のアリーシャ・ジョセスターフ。根も葉もないただの憶測としての悪評。この誘拐は彼女が勝つ為に行った番外戦術と噂されたが、彼女は千冬との決着はついていないとして、ブリュンヒルデの受賞を辞退。

その姿勢に心打たれたマスコミ達が、取り扱うのをやめたとも言われているが、結局のところ、真相は闇の中である。

(私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと、認めるものか!)

今朝ラウラが放った言葉が脳内で繰り返される。自分のせいで千冬姉の栄光に泥が塗られた。そんな思いが、一夏に襲いかかる。気にするなどはいったが、そんな事は一夏には簡単には出来ない。

(・・・情けない弟だよな。いつまでも千冬姉に守られてちゃ、駄目だ!)

多少暗い面持ちになりながらも、一夏は寮の自室を目指し再び歩き

始めた。

そして一夏が千早と話しているそんな中、シャルルは部屋へと戻り、シャワーを浴びていた。最も、ボディソープが無かった為、汗を流す程度ですましている。

シャワーを浴び終えたシャルル。その部屋の中には床に一つの塊が転がっていた。こんな時間なのに、既に寝袋で寝ているユーゴだ。「ねえユーゴ。まだ起きてる？良かったら夕食、一緒に食べない？」

「・・・」

「寝てるのかな？おーいユーゴ？ユーゴ？」

「・・・スーッ」

何度呼び掛けても何の反応も示さず、眼を閉じている。耳を澄ましてみると、微かだが寝息のような物も聞こえてくる。

するとシャルルが複雑な表情を浮かべる。

(・・・デユノア社の役員からの突然の命令。ワイルド・ジョーカーの待機形態データを読み取り、転送しろ・・・か)

昨日突然デユノア社の役員達から電話で直接送られてきた謎の命令。ある事情のせいで、シャルルには実行するしかなかった。

「・・・ごめんねユーゴ。君のIS、ほんの少し借りるよ」

シャルルはその手を慎重に、首元へと近づけていった。首にかかけられている紐を切つて、ISの待機形態の状態を持ち出し、そのデータをデユノア社に送信する。それが自分の役目だと言いかせて。

(慎重に、慎重に・・・)

「・・・」

【ガシッ！】

すると突然、シャルルは手首を強く握られた。その事に驚いたり反応したりする間も無く、シャルルは床へと叩きつけられた。

「痛っ！」

首筋に冷たい感覚がある。身体も重い。見るとユーゴが上にまたがっており、手にはナイフが握られていた。果物ナイフの様な生易しい代物ではない。今朝使われた、殺傷力に優れたミリタリーナイフ。それは躊躇いなくシャルルの首へと当てられていた。

「答えろ。お前は一体何者だ」

「なっ、何を言ってるのユーゴ。僕は」

「シャルル・デユノア。俺の仲間が調べた結果、そんな人間はデユノア社社長の御子息にはいない。さあ答えろ。お前は何者だ」

「ゆっ、ユーゴ・・・」

その眼は酷く冷たい眼をしていた。今の彼には、冷たいながらも彼なりの穏やかさも温情もない。あるのは目の前の存在に対しての不信感と懐疑心。そしてその奥で激しく燃え上がる怒りだけだ。

まさに今朝、ラウラが彼の頬について触れた際と同じ状態だ。

「違うんだユーゴ。話を聞いて・・・」

「答えろ！お前は、ネクロノミコンなのか！」

ナイフを握る手の力が多少強まる。それにより、首筋にも多少強く押されている。

【ガチャ】

その時、扉が開かれた。

「いやあ、すっかり忘れてたよ。なあシャルル。シャワー室のボディソープ切れてただろ？変えのボディソープは棚の中に・・・って、おっ、おいユーゴ！お前何してんだ!!」

一夏が見た光景。それは明らかに喧嘩の度を余裕で超えていた。

「不用意に近づくな一夏！こいつは！」

「うわっ！」

次の瞬間、飛びかかってきた一夏によってユーゴは体制を崩し、ナイフは床へと突き刺さった。そして一夏も飛びかかった際の反動で、二人はシャルルの上に倒れ込む形となってしまった。

「迂闊すぎるぞ一夏！丸腰で飛びかかるなど！相手はテロリストかもしれない・・・？」

「どつちがテロリストだ！ルームのメイドの首筋にナイフ当てる様

な・・・なんだ？この柔らかい感触は？」

【むにゅ】【むにゅ】

二人の感じたマシユマロの様な柔らかい感触。それは本来、男が持つべきものではない。一夏が恐る恐るその手の先を見た。答えは知れているのに。シャルルの胸部には、二つの山が出来ていた。

「なっ！シャルル！おっおっぱ！？え？え？え？え？」

「・・・・・・・・お前、まさか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

シャルルが赤面している。今日一番に気まずい場面だろう。

「とにかく、二人とも一旦落ち着け。そして俺も落ち着け。二人が喧嘩してた理由は聞かし、ちゃんと仲裁する。あっそうだ！緑茶でも淹れるよ!!」

第8話 明かされる事実

「・・・」
「・・・」

気まずい。一夏とシャルルはこう思っている。ユーゴはタブレットを取り出したかと思うと部屋を出ていったつきり戻ってこない。ただ、時計の針が刻む音だけが聞こえている。

先程一夏が緑茶を淹れた際、多少のトラブルがあつた事も重なり、何とも言えない雰囲気となつてしまった。

【ガチャリ】

ユーゴが黙つて部屋へと戻つてきた。空いてる椅子に腰を下ろし、タブレットを操作している。とにかく、この部屋の三人が戻つてきた事でようやく話が進む時が来た。

「まず、シャルル。何で男のフリなんかしてたんだ」

「・・・実家からそうしろつて命令されてね」

「実家？実家って言うと、デュノア社か。でも何で？」

「・・・二人とも、僕はね、本妻の子じゃないんだ。父とは、ずっと別々に暮らしてたんだけど、二年前にお母さんが亡くなつて、引き取られたんだ。デュノアの家の人が迎えに来てね」

「それで、色々検査を受ける過程でIS適性が高い事が分かつて、非公式ではあつたけど、テストパイロットをやることになつてね」

「でも、父に会つたのはたったの二回だけ。話をした時間は、一時間も満たないかな」

「それとお前が男のフリするのに、何の関係が・・・」

「そこから先は俺が答えよう」

先程まで黙つてタブレットを操作していたユーゴがこちらにiPadを向けた。そこには一人の男がいた。どうやらオンラインでの通信のようだ。

「誰だこの人？」

「俺は如月慎吾。ユーゴのアドバイザー兼スポンサーでも思つてく

れ。ユーゴに頼まれて、ついさつきまでデユノア社の事情について調べてた。まずデユノア社は確かにI Sの量産シェアが世界3位の大手企業だ。その事実は正しい」

「だが、会社の実態は経営危機。何せ造られるI Sはラファール・リヴァイヴ。未だに第二世代型。よく言えば一定の数値を安定して出す堅実なI S。だが悪い言い方をすれば進化の止まった型落ち同然だ」

「今やどの国もI Sは第三世代型への開発に着手、量産化の目処を目標としている。なのに、デユノア社はその第三世代の試験機にすら、成功に着手出来ないのが現状だ」

「その通りです如月さん。凄い情報収集力なんですな」

「まあ、あまり褒められた事ではないがな。さて、部外者はここで引き下がろう。調べ物があるのでね」

画面をミュートにすると、直ぐに如月さんは再びコンピュータを動かして何かしらの作業を始めた。シャルルも再び話し始める。

「で、僕はね、男としてI S学園に入学する様に父に言われたんだ。理由は二つ。一つ目は注目を浴びて、デユノア社の広告塔になる事。そしてもう一つは、日本に出現した特異ケースと接触しやすい。上手くいけばその仕様機体と、本人のデータが取れるかも」

一夏の肩が多少動いた。その答えは言わなくても分かるだろう。

「二夏と一夏のI Sデータを盗んでこいって、あの人に言われたんだ。それが昨日突然、緊急の命令が追加された。ユーゴの扱うI Sのデータを盗んでこい。そう言われてね」

「・・・はあ。本当の事を話したら楽になったよ。二人とも、聞いてくれてありがとう。そして一夏、君を騙しててごめん。それにユーゴ。君のI Sは実際に盗み出そうとした。本当に、ごめん」

乾いた笑顔の後に、シャルルが深々と頭を下げる。

「それで良いのか・・・?」

そう言ったのは一夏であった。

「それでいいのか!!良いはず無いだろう!」

そう言う一夏は、シャルルの肩を優しく掴んだ。

「一夏？」

「親が居なけりや子は産まれない。そりやそうだろうよ。でも！だからって、そんな馬鹿な事が!!」

「一夏・・・」

「俺と千冬姉も、両親に捨てられたから・・・別に俺の事はいい。今更会いたいなんて思わない。でもお前は！これからどうするんだ!？」

「どうって、全部バレちゃったもんね。きつと直ぐに本国に呼び戻される。その後の事はわからない。良くて、牢獄行きかな？最悪の場合、死刑」

「だったら！だったらここに居ろ!!」

「へっ?」

「俺達が黙ってれば、それで済む！ここに居るんだ！それなら仮にバレたとしても、お前の親父や会社。それに本国には手出しが出来ないはずだ!」

そう言うで一夏は生徒手帳を取り出し、ある1ページ内容を朗読し始めた。

「IS学園特記事項。本学園における生徒は、その在学中において、ありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。つまりこの学園に居れば、少なくとも三年間は大丈夫って事だ。その間に何か方法を考えれば良い」

「・・・凄いな、特記事項なんて55個もある。みんな目で流してる程度だと思うよ」

「知らなかったのか?こう見えて、俺は結構勤勉なんだぜ。ユーゴ。お前だって、この一件を黙ってるつもりだろ?」

「・・・ああ。そうだな。男であろうが女であろうが、俺にとっては関係ない。これまで通りに隠すなら、俺もこれまで通りの接し方をするだけだ」

「・・・そう。一夏。それにユーゴ。庇ってくれて、ありがとう」

ベットから浮かせ立ち上がると、二人に向かって深々と頭を下げた。

「おう。ってシャルル!胸、見えそうだから!」

一夏が慌てて視線を逸らす。そしてシャルルが慌てて隠す。ユーゴはというと、タブレットのメッセージアプリで誰かとやり取りをしている為、気になってすらないらしい。

「・・・そんなに気になる？」

「当たり前だろ！」

「・・・もしかして見たいの？一夏のエッチ」

「なんでそうなる!？」

「なあシャルル。少し聞きたい事が・・・」

【コンコン】

「一夏さん。いらっしやいますか？夕食をまだ摂られていないようですが、お身体でも悪いのですか？」

「せつ、セシリア!？」

不意にノックされたドア。この状況、特にシャルルの実態を他者に見られる事だけは不味い。その思いは三人とも一緒であった。咄嗟にシャルルが病気のふりをして、そして一夏とユーゴで看病のふりをする事とした。

「あら、一夏さん。どうされたのですか？」

「シャルルが体調悪くてさ。ユーゴと看病してたんだよ

「まあ。それは大変ですね。ユーゴさん。それにシャルルさん。一夏さんを少しお借りしてよろしいでしょうか？」

「別に。好きにすれば？」

「ごほっ。ごほっ。ど、どうぞ」

「一夏さん。実は私も偶然、夕食がまだなんですの。ご一緒しませんこと？」

一夏はセシリアに連れられる形で部屋を出て行った。足音もどんな遠ざかって行く。

「・・・もういいかな？」

「そうだな」

セシリアが一夏を連れ出し、部屋の中にはシャルルとユーゴだけが残された。先程掴み合いの様な喧嘩をしており、そして仲介役が居なくなつた為に、二人の空気は重すぎる。

「ユーゴ。あの・・・」

「気にするな。結果的にジョーカーを奪い取れなかった以上、俺には無害で、何の関係もない」

するとナイフを取り出した後、何処からかリングを取り出すとその皮を剥き始めた。

「・・・さつきは悪かったな。いきなりナイフを使うのは流石に失礼だった。ああ言う場合は首締めなり溝ウチなりで弱らせてから、ナイフを突きつけ、話を聞くべきだったな」

「ええっ!? そんな事しようとしたの!?!」

「ああ。それと注文予定だった自白剤だが、仲間が全てキャンセルした。お前自身の裏事情が分かった以上、俺に取っては無害だ」

「・・・君。一体何者なの? さつき跨った時に、ネクロノミコンって言うてたけど」

リングの皮を剥く手がピタリと止まる。瞬間的に聞いてはいけな何かを聞いてしまった感がシャルルには感じられたが、既に後の祭りだ。

「ごっ、ごめん! 何か言いたくなかったり、思い出したくなかったりするものだった!?!」

「ネクロノミコン。俺が追っている組織さ」

「えっ?」

「お前には知る権利がある。勘違いとはいえ、お前に襲いかかったのは事実だ。だが、教えるのはここまでだ。ネクロノミコンという組織。俺はそれを追っている・・・今度はこちらから一つ、質問に答えろ。お前に俺のISを奪い取るように追加で指示を出した奴、そいつは何者だ?」

「それが、一方的な話だったんだ。渡された専用の通信機を使ってきて、それでいて突然命令として追加された。機械音声を使ってたから、男か女かも分からない」

「如月さん。これじゃあ」

「ああ。絞れた様で絞れてない。会社員から役員。株主まで片っ端から調べ上げれば、何かしらのボロら出るかもしれないが、途中で気付か

れて、データを抹消されたら一気に水泡だ」

「あつ、でも！」

突然シャルルが立ち上がった。

「最後に名前だけは名乗ってた。確か、代表取締役員のマリーネ・シル
フアスつて人だよ」

「如月さん！聞きましたか！」

「ああ！もう検索中状態だ」

すると部屋に一夏が戻ってきた。その手には二人分の食事のプレートを持っており、机の上へと並べた。

「とりあえず二人とも、食事貰ってきたぜ。食べるよ」

「俺は騒動前にもう食べた・・・一夏。それにシャルル。これは警告だ。
俺にはあまり関わるな。つまらない飛び火に、お前達が巻き込まれな
い為にもな・・・」

それだけ言うとユーゴは再び寝袋に潜り込んだ。二人の食事の皿
にリングを乗せて。寝袋からは寝息のような音が聞こえてきたが、そ
れが果たして演技なのか、本当なのかは分からない。二人とも顔を見
合わせたが、シャルルのお腹が鳴った事で、深くは考えない様にした。
「箸、苦手なのか？」

「練習はしてるんだけどね。中々上達しなくて」

「悪かった。フォークとか貰ってくるよ」

「いいよそんな！一夏に悪いよ」

「なあ。シャルルはもう少し、他人に甘える事を覚えた方がいいぞ。
そんなに遠慮ばかりしたら、損するぜ。試しにまずは俺に頼る事から
始めてみたらどうだ？」

「・・・じゃあさ。一夏が食べさせて。僕も一夏に食べさせるから」

「えっ？ええっ!?!・・・よし！男に二言は無い！」

（賑やかだな・・・俺にも、この二人みたいに笑える生活を、人生を送
れたかもしれないな。7年前のあの事件がなければ・・・）

そう思いながら、シャルルの「あーん」の言葉を最後に、ユーゴの
意識は薄れていった。

その頃、こちらはアイスクリームの販売店の車内にいる如月さん。彼の表情は憤りに溢れていた。

「くそっ！デユノア社のデータバンクから、不自然にデータが消されてやがる！恐らく、外部から特定のワードを検索した際に発動する、消去用コンピュータウイルスが仕組まれていたのか」

マリーネ・シルファスという人物、そのデータなどの痕跡は何一つ残されていなかった。デユノア社の役員達などに直接問いただせば何かしらの手がかかりは掴めるかもしれないが、こんな念入りな準備をしている奴が相手じゃ、その情報も信じられないだろう。

しかし、今回の一件で如月さんには、ある確信が芽生えていた。

（間違いない。デユノア社とは無関係な場所で奴等が動き出している。こっちの素性を知っている連中。ネクロノミコンが・・・）

（それにしても、一つだけ気になるな。今回のデユノアの一件は、間違いなくデユノア社とフランス政府が絡んでいる。だがそうだとしたら、仮にも女であるシャルロットを男と誤魔化してIS学園に入学させられるか？いくらデユノア社の持つコネをフル稼働させたとして、フランス政府の後ろ盾を得るなんて、普通出来るか？）

「この一件、より詳しく調べる必要があるな」

如月さんは珈琲を一杯飲み終わると、再びPCの画面との睨み合いがはじまった。

その夜の事。IS学園アリーナの屋上にはラウラがいた。

「教官、あなたの完全無比な強さこそ、私の目標であり、存在理由・・・」

左目の眼帯を取り外す。右眼の赤色とは違い、そこから金色の瞳、ヴォーダン・オージエ越界の瞳で夜空を見上げる。

「織斑一夏。教官に汚点を与えた存在。そして白金ユーゴ。私にあの屈辱を思い出させた存在。どんな手を使っても、排除する」

すると彼女が携帯している通信機から、通信が入ってきた。

「私だ・・・何？シユヴァルツエア・レーゲンに改造を行うだと？ふむ・・・成る程。チューンアップ出来る箇所が見つかったのか。で、その手の専門メカニックが訪れるのだな。了解した。で、その者の名は？」

「・・・成る程。マリーネ・シルファスと言うのだな。了解した。ではこれで」

第9話 蒼炎の狩人と黒き兎

シャルルが女性だと分かった後も、俺と一夏の三人部屋は続いた。隠し通していた為に絵面こそかなり危ないが、周りに知られてないが故に、これまでと変わらない生活を送る事には、然程の苦痛はなかった。

この出来事の後から、ユーゴ自身も彼なりにではあるが、多少丸くなっていた。

ある日の放課後。誰もいないアリーナを使い、特訓をしにある人物が現れた。鈴だ。

「あら？早いよね」

「てつきり、私が一番乗りだと思っていましたのに」

そこにセシリアもやってきた。両者共にISスーツを着込んでおり、今度のトーナメントの優勝を目指し、特訓に来ているらしい。

「アタシはこれから学園別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど?」

「私も全く同じですわ」

二人が静かに睨み合う。磁石の様に、似た者同士は反発し合うと言う事だろうか?

「この際、どっちが上かハッキリさせておくのも良いわね」

「よろしくってよ?どちらがより強く、優雅であるか、この場で決着を着けて差し上げますわ」

「勿論、アタシが上なのは分かりきってる事だけど」

「ふふつ、弱い犬程よく吠えると言うけど、本当ですわね」

「どういう意味よ?」

「自分が上だって、態々大きく見せようとしている所なんか、典型的ですわよ」

「言ってくれたわね!その言葉、そっくりそのまま返してあげる!」

売り言葉と買い言葉の応酬は、その言葉を皮切りに、激突へと変わった。両者共にISを展開し、ぶつかり合う瞬間、何者かの砲撃に

よって妨害された。

「っ!？」

「なんですか!？」

妨害した張本人は、ラウラだ。彼女もISを装着しており、二人を見下ろしている。

「ドイツ第三世代、シユヴァルツエア・レーゲン!」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!」

「どういうつもり!?!いきなりぶつ放すなんて、良い度胸してるじゃない!」

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。ふっ、データで見た時の方が、まだ強そうだったな」

ラウラが挑発する。これに黙っているセシリアや鈴ではない。

「何?やるの?態々ドイツくんだからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぶりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってるの?」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも共通言語をお持ちで無い様ですから、あまり苛めるのは可哀想ですわよ?」

二人も、ラウラの挑発に挑発で返す。

「貴様達のような者が私と同じ、第三世代の専用機持ちとはな。数くらいいしか能の無い国と、古いだけが取り柄の国は余程人材不足と見える」

二人の挑発をものともせず、更に煽るラウラ。最終安全装置が解除される。

「この人!スクラップがお望みみたいよ!!!」

「そのようですわね・・・!」

完全に手がつけれられない。こうなってしまうてはどちらかが根を上げるまでぶつかり合うしかない。

「ふん!二人掛かりで来たらどうだ?下らん種馬を取り合うような雌ごときにこの私が負けるものか」

この言葉で二人は完全にキレた。

「今何て言った!?!アタシの耳には、どうぞ好きなだけ殴って下さいっ

「て聞こえたけど!!」

「この場に居ない人間の侮辱までするなんて、その軽口、二度と叩けぬ様にして差し上げますわ!」

「御託はいい。さっさと来い」

「そう言いながら、手を自身の方に向けて挑発のポーズをとる。」

「上等!!」

ラウラの一言を皮切りに、二人が彼女に殺到した。

(そうだ。私はこんな奴らに、負けるわけにはいかないんだ!)

舞台は変わって、IS学園の廊下。現在ここでは一夏とシャルル。そしてユーゴの三人がいた。

「一夏にユーゴ、今日も特訓するよね?」

三人でたわいない会話をしながら廊下を歩いて行く。三人の行き先は勿論アリーナだ。

「おう。トーナメントまで日が無いからな」

「どうせやる事は限られてるんだ。如月さんから、新武装がそろそろ届くって連絡が来た。ならば今、自分が得た技を一度確認してみるか」

「へえ。武装を造ってるんだ、あの人」

「ああ。如月さんはかなり凄い人だ。新しい武装も、こちらの要望通りで、遠距離型兵装らしいし」

「じゃあさ。一夏と一緒に射撃の訓練をやってみない?」

「ああ。よろしく頼む」

するとふと三人はある事に気がついた。今日は妙に、女子達の数が多い。後ろから抜き去って行く者が多くいるのだ。

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって!」

その言葉と共に、数人の女子がアリーナに向かって走って行った。無論、ユーゴ達もその言葉は聞こえている。

「えっ?」

一夏達三人も、第三アリーナへ急行した。既にアリーナにはそれなりの人が来ており、立ち見となっていた。後から来た箒も合流した。
「ん?箒じゃないか」

「きゃあああ!!?」

物凄い爆発音と共に、知っている二人の悲鳴が聞こえた。

「凰さんとオルコットさんだ!」

「相手は、ラウラ・ボーデヴィツヒか!」

どうやら、鈴、オルコット対ラウラで模擬戦をしていた様だ。だが、二人が膝をついているのに対し、ラウラは余裕で立っている。

「何してるんだ、あいつら?」

「くらええっ!!」

「無駄だ!この停止結界の前では!」

鈴が龍咆を全力で発射する。しかし、発射されたは龍咆ラウラに届く事なく、ラウラの手前で爆発した。

「なっ!?!龍咆を止めた!?!どうなってるんだ!?!」

「A I Cだ」

一夏の驚愕の声に対し、シャルルが答えた。

「そうか、あれを装備していたから龍咆を避けようとしなかったのか!」

A I Cという言葉に筈が納得する。ユーゴも黙って頷いている。

「A I C?何だよそれ?」

「シユヴァルツエア・レーゲンの第三世代型兵装の名称、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。略してA I C。慣性停止能力とも言。一言で纏めれば、物体の慣性の動きを停止させる事ができる」

ユーゴがあっさりとした解説を行うが、そこで語られた内容は一夏の想像を越すものであった。

「・・・なあ一夏よ。わかっているのか?」

「まったく。でも、今見たので十分だ」

戦いは尚も続く。今度がラウラから攻撃を繰り返した。彼女のI Sからワイヤーの様な者が伸び、鈴を捕らえる。そのままセシリアの攻撃を難なく回避しながら、鈴を振り回してセシリアめがけて放り投げた。

「きゃあああっ!」

二人が墜落し、それを更に追撃を仕掛けようとするラウラ。しか

し、ブルーティーズから放たれたミサイルが爆発。二人はなんとかそこを離れることが出来た。

「やりましたの!？」

煙が徐々に晴れて行く。そこにはラウラが何事もなかったかの様に佇んでいた。再び彼女のISからワイヤーが伸び、今度は鈴とセシリアの首に直接絡み付く。

「おいおい！やりすぎだろあれ!!」

「酷い。あれじゃシールドエネルギーが持たないよ！」

「もしダメージが蓄積し、ISが強制解除されたら二人の命に関わるぞ！」

【ガンッ！】

何か鈍い音がするのでその方向を見る。二人のISからは既に危険だと警告は発せられるが、ラウラは止めるところかささらに痛ぶり続ける。

「止めろラウラ！止めろ!!」

一夏が観客席のバリアを叩きながら叫ぶ。しかしラウラはそんな一夏を嘲る様な笑みを浮かべた。

「あいつ・・・!!」

その顔を見た一夏が数歩下がり、ISを展開した。そのまま、観客席のバリアを粉碎し競技場に内乱入し、ラウラへと突撃した。

「その手を離せええ!!」

一夏がラウラに斬り掛かる。だが猪突猛進なその一撃は、ラウラに届く事なく、AICによって封じられた。

(これがAICかよ！身体が、動かねえ・・・)

「感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

だが、この隙に鈴とセシリアの拘束は解かれた様だ。

「やはりこの私とシユヴァルツエア・レーゲンの前では、有象無象の固まりに過ぎん。消え失せろ」

「一夏ー！」

シャルルとユーゴもISを展開して、一夏の援護に入った。攻撃が放たれる直前にラウラへと攻撃し、それを回避する為ラウラが動いた

事で、攻撃が逸れる事となった。

「雑魚共が!!」

「二人とも!こっちだ!」

一夏とシャルルの二人がセシリアと鈴の救出を、そしてユーゴはというと、ラウラと戦闘をしていた。大口径レールカノンを、ビームシールドとマントの二段構えで受け止める。

だがシールドを張っていた左腕に、ワイヤーロープが絡まり捕縛された。

「ふん。相変わらずデータにない見た事もないタイプのISだが、どうせ何処か小さな町の小さな町工場が、見様見真似で作ったもどきだろう」

「・・・遺言はそれで終わりか?」

「何!?!」

次の瞬間には、捕縛されたワイヤーで一気に距離を詰めてきた。ラウラは避けようにも、ワイヤーで繋がれている為その動作は妨害された。目の前に来たジョーカーがナイフを突き刺してくる。シールドに防がれたものの、刺す際の衝撃がラウラを襲う。

「くっ!貴様っ!」

ラウラが腕からプラズマ手刀を出した。こちらもファストナイフにエネルギーを纏わせ、迎撃する。

【maximum】

エネルギー同士がぶつかり合う。違いに全力のぶつかり合い。やがてエネルギー残量の差か、ファストナイフが右腕のプラズマ手刀を力づくでへし折った。

そのままナイフを突き刺そうとするも、咄嗟にラウラが後ろに下がった為、ナイフは地面に深く突き刺さった。それを直ぐに引き抜き、再び襲いかかる。

「おっ!おいユーゴ!もうその辺で!」

「一夏!あの二人、このままだと不味いよ!!」

セシリアと鈴との一戦は模擬戦という名の一方的な暴力とするなら、今の二人の一戦は模擬戦のレベルを超え、本物の戦いへと昇華し

ていた。

二人の目は完全に互いを殺し合おうとしている者の目へと変化していた。ここで引いたほうが負ける。生き残るには勝つしかない。人間の持つ闘争本能の様なぶつかり合いが、繰り広げられている。

それを見ていた箒の表情は、とても複雑であった。

（私にも、専用機があれば・・・私は！見ているだけしか出来ないのか!?)

ユーゴとラウラが再び急接近する。互いに武器を手に持ち、斬り合おうとした。

「これで!!」

「トドメだ!!」

「カキンッ!」

「カキンッ!」

二人の間に割って入った者。それはIS用ブレードを握った織斑先生だった。ユーゴとラウラの一撃を、両手に持った剣一本でそれぞれ受け止めている。

「なっ!教官!」

「・・・織斑先生」

「やれやれ。これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉?」

「模擬戦をするのは構わん。だがアリーナのバリアまで壊されては、教師として黙認しかねん。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

とりあえず、この場を何とか収める事が出来そうな事に一夏達が安堵する。だが、ユーゴとラウラだけは、不服の意を示す視線を送っていた。

「何故です教官!?!あのまま続けていれば、私には勝機がありました!」
「そもそもバリアの破壊は外野が原因だ。さっきまでの俺達の戦いとの直接的な関係は・・・」

「中止と言った筈だ!!」

千冬先生の言動が荒々しげになる。語気を強めた有無を言わさぬ

その言葉に、二人も遂に折れた。

「・・・教官がそう仰るなら・・・」

「ッ了解！」

ラウラは、口では認めつつも内心は大荒れしているのだろう。それはユーゴも同じであった。苛立たしげにユーゴとラウラがISを解除する。

「織斑もデユノアもそれで良いな？」

「あ、ああ」

「教師にははいと答えろ。馬鹿者」

「はっ、はい！」

「僕も、それで構いません」

「では今後！学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する！解散！」

こうしてこの戦闘は収束したのだった。

戦闘が終わり、アリーナから立ち去ろうとするユーゴを、千冬先生が呼び止めた。

「いかん、忘れるところだった。白銀。お前宛に荷物が届いている。

差出人は如月慎吾からだ。後で受け取りに来い」

「わかりました」

第10話 炎と油（最悪）の組み合わせ

保健室。セシリアと鈴の二人がベットで横になっている。その身体に至る箇所包帯が巻かれており、先程の戦いの痕を痛々しい程示していた。

「全く！別に助けなんていらなかったのに！」

「あのまま続けていれば、私達は勝つてましたのに」

うん。この様な事が言える辺り、どうやら本気の重症ではないらしい。

「またまた。二人とも無理しちゃって。好きな人の前でカツコ悪い所見せて、恥ずかしいんだよね？はい、お茶」

「ななな！なにを言ってるのか!?全然分かんない！」

「別に私、無理なんかしてませんわ！」

シャルルの言葉に二人が明らかに取り乱している。お茶を持っても、目に見えて震える程に動揺している。

「そもそも、何でラウラとバトルする事になったんだ？」

一夏の言葉に、二人が飲んでいたお茶がむせたのか、咳き込み始めた。

「ああ！もしかして一夏の事が・・・」

「わー！わー！ちよつと少し黙ってなさい！」

「一言余計ですわよ!!」

慌てて二人がシャルルの口を手で塞ぐ。この様な場面に限り一致団結出来ている辺り、その思いは二人共本物なのだろう。そんな会話をしていた最中、突然医務室の棚の薬剤瓶がカタカタと揺れ始める。地震にしては妙な感じだ。

「何だ？これ・・・」

すると突然保健室の扉が破壊され、女子達が流れ込んできた。

「ねえ一夏君！これ！」

「デュノア君も！はい！これ！」

女子達が一斉にある紙を一夏達に突きつけてきた。

「何々。今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行う為、二人組での参加を必須とする。二人組が出来なかった場合は、抽選により選ばれた者と組む事とする。締め切りは」

二人組でなければいけない。成る程。彼女達の意図が読めた。

「とにかく！私と組んで、織斑君！」

「私と組もう！デユノア君！」

「えっ、ええっど・・・そういえば、ユーゴはどうしたんだ？」

「実は私達、さつき白銀君にも声をかけたんだけど、彼、その時丁度I Sのメンテとかをしてね。一気に押しかけたもんだから・・・」

「私達、彼の工具箱を蹴飛ばしちゃって、中身をぶちまけちゃってね。その事で怒らせちゃって、部屋から逃げてきたんだ」

「うんうん。あの時のゆうーゆうー、頭の頂点にスパナが落ちてきて、とても痛がってたね」

彼女達の行動を説明しているのが、鷹月静寐と谷本癒子。そしてユーゴの事をゆうーゆうーと呼ぶのは、1年1組の布仏本音。通称のほんさんだ。

まあ、この大人数で向かってくれば、それは工具箱の一つくらいひっくり返ってもおかしくないだろう。そう思い4人が苦笑いをした。

「というわけで織斑君！これにサインを!!」

「皆！悪い！俺、シャルルと組む事になってるんだ！」

「何だ。そう言うことか。ならしようがないね」

「男同士って言うのも絵になるし」

「ここは素直に引き下がらしましょう」

素直に引き下がった。だが、これに納得していない人が二名いた。

「ちよつと一夏！アタシと組みなさいよ。幼なじみでしょうが！」

「一夏さん、クラスメイトとして、ここは私と・・・」

「駄目ですよ」

いつから居たのか、医務室に山田先生が入ってきていた。そして二人は一夏とペアを組まないと言い始めた。無論、理由もある。

「二人のI Sは、損傷などのダメージレベルがCを超えています。」

よって安全面を考慮して、トーナメント参加は教師として許可出来ません」

「そんな!?アタシ十分に戦えます!」

「私も納得出来ませんわ!」

「駄目と言ったら駄目です!当分は修復に専念しないと、後で重大な欠陥が生じますよ!」

「なんて事!このまま一夏が・・・」

「そうですね!一夏さんが!一夏さんが・・・」

(待てよ?一夏と付き合えるのは、優勝した生徒になる)

(そして一夏さんは、同じ男子同士のシャルロットさんとペアを組まれました)

(ならばここは・・・)

二人が目くばせをする。お互いに同じ結論に辿り着いた者の眼をしていた。その視線は一夏へと向けられた。

「良い?あんた達!絶対優勝するのよ!今のあんたならユーゴだっ倒せるわ!」

「お二人とも、私達の分まで頑張ってくださいな!心から応援致しますわ!」

「おっ、おう。任せとけ」

「はははっ。僕も、精一杯頑張るよ」

「ふふっ。美しい友情ですね」

この思惑の裏を、山田先生は気づいていない。

その頃、箒は屋上へと来ていた。先程の女子達に混じり、一夏とペアを組もうとしたが、組めなかったのだ。

(全く。何故一夏が景品の様な扱いとなっているのだ。そもそも、優勝したら付き合える件も、元は私が優勝した時の話だったはずだ!)
(・・・いや、問題ない。私が優勝すればいいだけの話だ)

一夏の顔とシャルルの顔が思い浮かぶ。だがそのすぐ後にユーゴの顔とラウラの顔が浮かび上がってきた。

(…ユーゴとラウラ。あの時の二人の戦い方。昔の私と似ていた…：嫌な思い出だ)

篠ノ乃箒。彼女は剣道を嗜んでいる。昔は一夏も箒と一緒に、箒の実家の篠ノ之神社で一緒に剣道を習っていた。だがそれは昔の話であつた。

彼女の姉、篠ノ乃東。彼女がISを発表した事が、全ての原因となつた。各国は直ぐにISの持つその脅威的な性能から、軍事利用できないかと模索。箒達は重要人物保護プログラムの名の下に、実質家族と引き裂かれた様なもので有る。

(気がつけば両親とは離れ離れ。姉さんは行方知らず。そして私は、必要なまでの監視と聴取を幾度となく受け、心身共に参っていた)

(…それでも、剣道だけは辞めなかつた。それが唯一の一夏との繋がりだと思えたから。元々剣道を習っていた事もあつて、気がつけば全国大会に出場出来る程の腕前となつていた)

(だが、あの大会での私はとても醜かつた。あの時の私は、鬱憤を晴らすかの如く、只相手を叩きのめす為の憂さ晴らしの剣道をしたのだ。あんなものはただの暴力で、強さとは言わない…)

先程の模擬戦のユーゴとラウラの眼。互いに相手を本気で潰し合おうとしていた者達の眼だ。昔の自分も、相手に対してあんな眼をしていたのだろうか…

(…いや！今回はあの時とは違うんだ！私は変わったんだ。必ず優勝して見せる。今度こそ勝ってみせる！己自身に！)

さて、場面は変わりISの整備室。ユーゴは先程女子達が走つてきた際の振動でひっくり返つた工具箱の中身を集めていた。

「ったく。何なんだあいつらは。まだ頭ジンジン痛むし」

そして如月さんから届けられた箱の包装を引っ剥がし、遂に箱の中身とご対面した。

「これが如月さんの開発した、新たな武装か…」

それは遠距離型兵装であった。これまでナイフのエネルギー弾で賄ってきた撃ち合い戦。これで確実は戦力の増強が見込めた。

ただ一つ、問題があるとすればその武装そのものだ。その武装は。セシリアやシャルルのISの様の持つ様な銃に近いが違う。最も、鈴やラウラのISの持つ砲台でもない。

美しいフォルムの半月型。ピンと張られた弦。

ジョーカーの遠距離武装として、何故か銃などではなく弓矢が届けられたのだ。矢はISなどのエネルギーを固形化する仕様らしい。

(これはファストナイフの様に携帯するのは無理そうだな。量子化させる事で記憶領域に入れ、取り出す形にしよう)

その後、機体とのパツケージ登録や技の技法など、一通りの作業も終わりユーゴはISを勾玉状の待機形態に戻して、ペンダントとして首にかける。

部屋を後にしようと、扉に足を進めた。すると扉が開かれた。目の前にはラウラがおり、彼女の背後には一人の女性も立っていた。ラウラと違い、眼帯などは付けていない。

「あつ、こんにちは」

「こんにちは」

「.....」

背後の人の挨拶にユーゴも返答する。しかしラウラは何もいう事なく、ユーゴもラウラに何もいう事なく、お互いに素通りした。背後に立っていた人もそそくさと後に続いていった。入れ替わりで部屋に来たラウラは、自身のISを展開させた。

「では、始めますね」

「早く終わらせてくれ」

以前ドイツ軍総司令部からの通信で、ラウラのISにチューンアップなどの改良を施す事が決まっていた。その担当者が遂にやって来たのだ。とは言え、改良する箇所自体が少なかった為、ユーゴが行っていた作業よりもより速く終わったが。

「はい。これで、シュヴァルツエア・レーゲンのチューンアップは完了です。エネルギー効率から武器の火力の増強まで、出来る事は全てや

りました」

「成る程。後は私の腕次第という事か」

「ええ。期待していますよ。今度の学年別トーナメントは、貴女之力を見せつける良い機会です。それだけじゃなく、母国のドイツの技術力などを見せつける場にもなる。是非、その力を存分に奮って下さい」

「分かっている。私は負けられない。そんな事くらい」

「・・・所でさつき、入り口ですれ違った彼ですけど」

「白銀ユーゴの事か。なにも言うな。今のところあいつは、織斑一夏以上に目障りな存在だからだ。放っておけ」

「へえ。白銀ユーゴ君ですか・・・では、行すべき作業も終わったので、私はドイツに戻ります。I S 配備特殊部隊「シュヴァルツエ・ハーゼ」ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。ご武運を！」

それだけ言うと彼女はI S学園を去り、モノレールに搭乗した。既に夕焼けが空を橙に染めている。そんな中、彼女はPCを弄っていた。

(・・・ふう。ほんと、演技って疲れるわね。ポチツとね)

ドイツ軍メインコンピューターに潜入完了・・・ドイツ軍所属。マリーネ・シルファスに関する全てのデータの完全削除を確認。これでもう自分とドイツ軍を繋ぐ線は完全に消えた。

そしてPCに入れていたフロップピーディスクを取り出して仕舞うと、満足げな笑みを浮かべつつ、夕焼け空を見上げた。

(さてと。ラウラ・ボーデヴィツヒ。いや、遺伝子強化試験体、C-0037。失敗作のモルモットらしく見せてもらおうわ。VTシステムの力を・・・)

そして時は流れ、遂に大会日当日となった。その日の生徒達の賑わいは、お祭り宛らであった

その後、女子達の話し合いによって、ユーゴに関しては取り合いになると今後のクラス活動時に、遺恨が残る危険がある為、公平に当日のトーナメント時の抽選で決める事となった。

「へえ。しかし凄いなこりゃ。各国からいろんな人が来てるんだよね？」

「うん。そうだよ。三年にはスカウトが、二年には一年間の成長などの確認の為に、それぞれ人が来ているからね。同然だよ」

「御国の偉い人は暇なのかな？ご苦労な事だな」

三人ともISスーツへと着替える。後は対戦カードの組み合わせが決まるのを待つだけだ。一夏とユーゴの二人がモニターを見続けている。

「二人は、ボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあな。あの時の戦いのケリはまだついてない。こちらら新武装もようやく慣れてきた頃だ。今度は引き分けになんてさせない・・・」
「なにを言ってるんだユーゴ？俺が闘って、勝利するぜ」

一夏にもユーゴにも、引けない理由があるのだ。

「全くもう。でも二人とも、どっちが闘うにしても、感情的にならないでね。ボーデヴィツヒさんは間違いなく、一年の中では最強クラスのレベルにいるから」

「ああ。分かっている」

「俺も、あいつにだけは負けたくない」

【ピロン】

画面に何かが表示された。ついに対戦カードが公表されるのだ。

「あつ。対戦の組み合わせが決まったみたいだね。僕達は、どれどれ・・・ええっ!」

「おっーおい!!これって!!」

「・・・最悪だな」

女子更衣室では、その男子更衣室よりも、衝撃とざわめきが激しい。

そしてあのラウラですら、僅かながらに眉を吊り上がらせた程である。

第一回戦の対戦カードがまさかのこれである。

「織斑一夏& a m p ;シャルロット・デュノア」

V S

「白銀ユーゴ& a m p ;ラウラ・ボーデヴィツヒ」

この組み合わせである。ユーゴは抽選とはいえ、よりにもよって、倒したい相手であるラウラとのペアである。この組み合わせを考えたら人間を恨むだろう。

「ユーゴ・・・」

「・・・互いに、いい試合にしよう」

それだけ言うとユーゴは黙ってその場を離れていった。

「マジかよ・・・一回戦から、一年の最強クラスの二人を相手にするのかよ」

「間違いなくこの一回戦。とても厳しいものになるよ。気を引き締めていこうね、一夏!」

「おう!頑張ろうぜシャルル!!」

固く手を取り握手し合った後、シャルルが慌ててその手を離し、赤面した。同じ頃、ラウラは既に会場の入り口へと来ており、そこにユーゴが辿り着いた。

「よりによって貴様と組むとはな。精々、私の邪魔だけはするなよ。一人で戦う方が効率的だ。もし私の足を引っ張る様な真似をすれば、貴様から潰す事を考えているぞ」

「でかいだけのデブリがフィールド上でうろちよろしようが、俺の戦いには何の関係もない話だ。せいぜい、つまらん事に気を取られない様にするんだな」

皮肉を言い終わったのちに、互いに睨み合った。一夏達とのペアとの相性は雲泥の差である。

果たして、勝利の女神はどちらに微笑むのだろうか・・・

第11話 トーナメント一回戦 開始!

遂に試合時間となった。アリーナの中央フィールド。ここに四人のIS乗りが集う。

「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたと言うものだ」

「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

「織斑一夏。それにシャルル・デュノア。この様な対戦カードとなった事は、俺としては遺憾だ。だがこれが闘いである以上、そこに一切の手は抜かん」

「うん。僕も全力で闘う。いいバトルにしようか」

人々が見守る中で、戦いの火蓋は切って落とされようとしていた。

「・・・叩きのめす!!」

スタートの合図と同時に一夏が先手で突っ込んできた。ラウラがAICを展開し、一夏の動きを封じる。

「開幕直後の先制攻撃。貴様の行動は分かり易いな」

「そりゃあどうも。以心伝心で何よりだ」

「直ぐに勝負をつけてやろう」

大型レールカノンが一夏へと向かられた。AICの拘束状態の一夏に当てるなど、造作もない行為である。

しかし一夏に焦りの表情はない。

「目の前の俺に集中しすぎだぜ」

一夏の背後からシャルルが登場。その手に握ったライフルを発砲する。流石に直撃する訳にもいかず、ラウラは回避する。それによりAICも解除され、一夏は再び自由の身となる。

距離を取ろうとするラウラに、逃がすまいとシャルルが銃弾を放つが、それをユーゴのジョーカーのマントで銃弾を受け止め、一気にシャルルに接近戦を仕掛ける。

「こちらの間合いに持ち込めば!」

「シャルル!」

間に割り込む形で、雪平式型とファストナイフが鏝迫り合う。互い

に全力でぶつかり合う為に、どちらにも押されず膠着状態となる。

背後に待機しているシャルルが、両手にアサルトライフル構える。ユーゴも即座に空いてる手でビームシールドを展開し、来るであろう一斉射撃に備えた。

するとジョーカーの足首にワイヤーが絡まり、宙に放り出される。

「お前！何のつもりだ!!」

次の瞬間、ラウラはユーゴを一夏達目掛けて放り投げた。二人がジャンプした事で回避され、ユーゴは地面に叩きつけられる。

「言っただけだ。邪魔をするなど」

「この野郎・・・」

「一夏さんとデユノアさんは、個人の力ではあの二人には及んでいません。ですが、お互いに相手補い合う様に闘っています」

「その一方で、ユーゴとボーデヴィツヒの二人は、個の力だけを信じて動いてる。チームワークもなくて、まるで互いを敵視してるみたい」

「一夏とシャルロットは二人で一人と闘っている事になる。そうなれば当然、手数の利点で一夏達が有利となる」

観客席で観戦しているセシリアと鈴。そして女子更衣室から観戦している箒。それぞれがこの戦いを分析している。それはアリーナのコントロール室でも行われており、この戦闘を解析する山田先生と、織斑先生がいた。

「ち、ちよつと！白銀君とボーデヴィツヒさんの二人の闘い方。ちよつと滅茶苦茶で乱暴すぎじゃないですかね？」

「ああ。チームワークも何も無い。ただ互いを都合よく利用し合っているだけの関係。ラウラは元々、チームプレーなど、そういうのが苦手な奴だ」

「そしてユーゴはラウラとの例の一件のトラブルがあった。その時の関係悪化をこの闘いでも意識してしまっている。だからこそ、互いにパートナーの力に頼ろうとしない」

「つまり白銀君とボーデヴィツヒさんにとって、この戦いは実質2対1対1。この様な盤面になってるんですね」

「それだけではない。二人はA I Cの致命的な弱点に気づいたのだ」

「致命的な弱点？」

「A I Cは対象の物体の慣性を停止させる。それ故、対象の物体に全神経を注ぎ込まねばならない。本来一対一ならそれも可能では有るが、今はチーム戦だ。しかも連携はボロボロ。だからこそ効力は薄いんだ」

「二人がそこに気づくとは、流石ですね」

「まあ、これくらい気づいて当然だろうがな」

その後ラウラは、ワイヤーブレードを使い一夏を集中的に追い詰めようとするも、なかなか試合の流れが掴めずにいた。そしてユーゴはシャルルとの戦闘、一夏への援護をさせないようにしていた。

「君の戦いたかった相手じゃなくてごめんね」

「ああ。だから憂さ晴らしに付き合ってもらおう！」

互いに相手への精神攻撃を欠かさない。銃弾などを受け止めるが、遂にマントの一部に穴が開かれた。マントはもう使用限界だ。これまでの様に受け止めながら有利な間合いに持ち込む闘いが出来なくなる。

「こうなったら、こい！」

パッケージから量子化した弓矢を取り出した。エネルギーの矢を装填し、構えを取る。

「何!?!弓矢だと!?!」

これまでユーゴの使って無かった兵装の登場に、一夏とシャルルが警戒し、身構える。すると突然弓を一夏達にはなく天へと向けた。

「降り注げ! 矢の雨!!」

エネルギーの矢が上空へと放たれた。少し上昇した後、矢は細かく分裂。無数の矢となり、地上へと勢いよく降り注いだ。

「なっ! なんて数だ!」

これにより三人のI Sのシールドエネルギーを一気に抉りつつてゆく。ユーゴはビームシールドや矢の雨の降り注がない箇所を退避する事で、損傷なく動いている。

ラウラとて例外ではなく、矢の雨の餌食となる。

「くっ! 貴様・・・」

「言ったはずだ。デカいだけのデブリが何をしようと、どうなろうと、俺の闘いには関係ない!」

「二人とも、闘い中に仲間割れなんかしてる暇はないよ!」

先程の攻撃から一夏達は既に立ち直っていた。白式は零落白夜を発動しており、上空へと飛び立ち、ラウラ目掛けて振り下ろした。咄嗟にラウラはそれを避ける。

一夏は再び飛び上がり距離を取ろうとするも、そのカウンターの一撃として、プラズマ手刀が、命中した事より、地へと落下してゆく。「立ち直りの手間がかかるはず!貫つ・・・!?!」

一夏への追撃をかけようとするユーゴを、シャルルが物凄い勢いで機体を加速させてタックルする。それによりジョーカーは壁際へと吹き飛ばされた。そのままアサルトライフルでラウラへの銃撃を開始する。銃弾に鉛玉の雨霰がラウラに降り注ぐ。

イグニッション・ブースト
「瞬時 加速!?!そんなデータは!」

「ないだろうね。だって今はじめて使ったんだから!」

「だが!所詮は実弾兵器!ならば停止結界で・・・!?!」

背後から銃撃された。本来なら予想できない攻撃。こちらもデータにはない攻撃。データに無い、一夏の白式がシャルルの銃を持っている。

「あれは、シャルルのアサルトライフル!」

「一夏さんが使える様に、解除して、渡してらしたのですね!」

「このっ、死に損ないがあ!!」

「何処を見てるの?この距離なら外さない!!」

一夏をワイヤーブレードで突き飛ばすのには成功するも、それに集中しすぎた為に完全に意識外から現れたシャルルへの対応が遅れた。「シールドピアース!!!」

左腕のパイルバンカーの様に撃ち込まれた一撃により、ラウラは勢いよく壁際へと吹き飛ばされる。

そしてユーゴと一夏の方は、再び雪平式型とファストナイフが鍔迫り合っている。

今度は零落白夜とエネルギーを纏ったファストナイフのぶつかり

合いから、先程よりも激しい衝突となっている。この膠着状態から一向に動かない。

つまり、今のラウラを援護する事も出来ない訳だ。

何度も撃ち込まれるシールドピアースにより、シユヴァルツェア・レーゲンのシールドエネルギーはどんどん削られてゆく。ユーゴが援護する事ができない為、観客達の誰もがラウラの敗北を確信していた。

(負けるだ?!?この私が!!・・・負けれないんだ!!私は!負ける訳には!!)

「遺伝子強化体C—0037。今から、君の新たな識別記号はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

(その呼ばれ方が、私が私であると自覚した時だった。私はただ戦いの為に造られた。生まれ、育てられ、鍛えられた)

(私は優秀だった。あらゆる面で誰よりも、最高レベルを維持し続けた・・・しかしそれは、世界最強の兵器、ISの出現までだった)

(直ちに私にも適合性向上の為に、肉眼へのナノマシンの移植手術が行われた)

(・・・しかし私の身体は適応しきれなかった。その結果、出来損ないの烙印を押された)

周囲からの言葉や視線も、目に見える程に冷たくなった。

(おい聞いたか?あいつ、ISの適合率上げる為の越界の瞳の移植手術。適合できなかったらしいぜ)

(マジでか?確かA Aの移植手術は、^{ダブルエー}そもそも受ける事すら出来なかっただろ?それなのにそっちの手術もダメだなんて、あいつ、もう終わりだな)

(結局のところ、出来損ないの失敗作って事じゃないの?)

私は自分自身に絶望していた。

そんな時立った。あの人に出会ったのだ。彼女は極めて有能な教官だった。私はIS専門の部隊で、再び最強の座に君臨した。

そしてある日、私はあの人に聞いた。

「どうしてそこまで強いのですか？ どうすれば強くなれますか？」

「私には弟がいる」

微笑みながら彼女は答える。

・・・違う。違う。違う！

（どうして、そんな優しい顔をするのですか!? 私が憧れるあなたは、強く、凛々しく、堂々としているのに・・・!）

（・・・だから、許せない。教官をそんなに風に変える男を！そして私の汚点とも言えるAA。これの適合手術に成功した、あの男が!!）

力が欲しい。誰にも負けない、最強の力が。

【願うか？ 汝、より強い力を欲するか？】

その声は、地の底深くから発せられる、憎しみを囁く悪魔の声であつた。

「超越せ・・・力を！ 比類なき最強を!!」

眼帯がポロリと外れる。その金色をした左目に色々な英語が羅列された。そして最後に、この単語が映し出された。

【^{ヴァ}alkyrie ^ル ^{キュ} ^リ Trace ^ト ^レ ^ス ^シ ^ス ^テ ^ム】

「ウウウウツ・・・アアアアアアアアアアアアツ!!!」

ラウラの悲鳴にも似た叫びが、アリーナ中に木霊した。

第12話 動きだした闇

ラウラの様子の異常には、皆が気づいていた。彼女の周囲に電撃の様なもの走り、彼女のISが姿を変えていった。今はスライムの様に、不定形な形を形成していった。

「なっ、何なんだ。一体・・・」

一夏たちが数歩ほど後ずさる。どう見ても普通ではない。そんな中でユーゴは、右の頬を痛そうに抑えていた。

(この感じ！まさか、あれは！)

コントロールルームでも、山田先生は困惑していた。だが織斑先生だけは冷静であった。

「これは、一体・・・」

「レベルDの警戒態勢を発令」

「りっ、了解」

『非常事態発生！全試合は中止！状況をレベルDと認定。制圧の為、教師部隊を送り込む！来賓、生徒は直ちに避難せよ！』

そのアナウンスの元、観客席と来賓席を遮断シールドで閉鎖する。そしてラウラのISは、ラウラ自身を取り込むと、その姿を別のものへと変えていった。刀を持った女性の様に。

(おいおい・・・いつまさか、あのシステムを・・・)

シャルルとユーゴが、特にユーゴのISが激しめの警戒体制を取る中で、一夏はその姿に唾然としていた。

「あれは・・・雪片。千冬姉と同じじゃないか！・・・二人とも、下がってくれ。俺がやる」

すると一夏が雪片式型を構え、真正面に対峙した。すると次の瞬間、そのISは物凄い速度で白式目掛けて斬りかかって来た。

「一夏!!」

ユーゴが弓矢で矢を射るも、その特殊なボディの前ではエネルギーの矢としての貫通力は薄い。

謎のISは意に会する事なく、再び一夏へと斬りかかった。これま

での戦闘の消費も重なり、遂に白式がエネルギー切れにより強制解除された。

片腕からは血が流れ出ており、彼自身も負傷している。だが、一夏はその眼に怒りを宿し、目の前のISを睨みつけていた。

(あの剣技！間違いない！俺が、最初に千冬姉に習った真剣の技だ：こいつ！千冬姉の、真似しやがって!!)

一夏の眼に映り込むIS。一夏はそれに怒り以外の何も感じていなかった。

「こっ……このやろおっ!!」

「おい一夏!!お前なに考えてんだ!!」

一夏は無謀にも、生身の状態でそのISへと向かっていった。言わずもがなだが、生身の人間が丸腰でISに勝てる訳がない。勝てるとしたらそれは、完璧超人くらいである。

今の一夏は完全に頭に血が昇っている状態だ。冷静な判断は出来ない。

「馬鹿者！何をしている！死ぬ気か!」

ふと、意外な声が聞こえその方を見る。いつの間にか箒がやって来ており、一夏を抑え込んでいた。どうやら鎮圧部隊の職員が使う緊急通路から来たらしい。

「離せ箒！あいつふざけやがって!!ぶっ飛ばしてやる!!邪魔するなら、例えお前であろうと……」

「いい加減にしないか!!」

【パチン!!】

箒が一夏目を覚まさせるべく、頬にビンタした。それによって、一夏も冷静さを取り戻した。

「今のお前に何が出来る!?白式のエネルギーも残っていない状況で、あいつとどう戦う!」

するとそこに教師部隊がやってきた。数は4人。全員がリヴァイヴに搭乗している。アナウンスで言っていた鎮圧部隊の様だ。

「見ろ。別にお前がやらなくても、直ぐに状況は収束される」

しかし一夏はこれに納得していない。

「・・・違うぜ箒。全然違う。俺がやらなきゃいけないんじゃない。これは、俺がやりたいからやるんだ！」

「まだそんな事を！ではどうすると言うのだ!?お前と違って、一夏は白式のエネルギーがないこの状況で！」

「エネルギーが無いならさ、持つてくればいいんだよ」

その提案をしたのはシャルルであった。ユーゴは威嚇として弓矢を構え、いつでも放てる様に待機している。

「持つてくる？何処からだ？」

「ここだよ。リヴァイヴのエネルギーバイパスを解放。エネルギーの流出を許可」

そう言うのと彼女はISからプラグコードを取り出し、一夏のブレスレットと接続した。すると何かが流れ込んでいる感じが、一夏には伝わってきた。

「成る程。リヴァイヴの持つISのエネルギーを、白式に分け与えるのか」

やがてエネルギーの移動が完了する。シャルルのISの残りのエネルギーを全て使った為、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが自動解除された。

「ねえ一夏。約束して。絶対に勝つて！」

「ああ勿論だ。負けたら男じゃねえよ」

「ふふっ。言ったね。じゃあさ、負けたら明日から女子の制服で通ってね？」

「おいおい」

箒が驚いた顔を向けている。笑顔でこの人はえげつない事を言うなあ。一方の一夏は、迷いの無い目をしていて。すると弓矢の構えを解除したユーゴが合流してきた。

「待て一夏。お前とあいつの相性は悪い。今の状態だと、明日から女子制服確定だぞ？」

「やってみたくちゃわからないだろ」

「話を最後まで聞け。とにかくお前とあいつの相性は悪い。だから俺も手を貸す。あのISは現在VTシステムが起動している状態だ」

「VTシステム？何だよそれ」

「ヴァルキリー・トレース・システム。本来ならISへの搭載は愚か、開発そのものが禁止されている危険なシステムだ。今、あのISを包んでいるのは、無数の特殊なナノマシンだ。機体への僅かな損傷などでは、直ぐに復元してしまう」

「それと俺と、どう相性が悪いんだよ」

「正確に言うなら俺にも相性が悪いだ。だが、俺達二人になら突破出来る筈だ。とにかく今は俺を信じてくれないか？」

「・・・ああ。いいぜ」

「随分とあっさりと信じるんだな。何も聞いてこないのか？」

「必要ねえよ。それに忘れたのか？先月のクラス対抗戦。お前は、初対面の俺の提案を信じて、作戦に乗ってくれた。なら今度は、こっちが信じる番だ。その代わり、失敗するんじゃないぞ」

「ああ。必ず成功させてみせよう」

「じゃあユーゴも、失敗した時には同じ罰を受けるんだね」

シャルルの鬼の提案に露骨に嫌な顔をするも、ここで断る訳にも行かなかった。二人とも覚悟を決め、一歩前へと足を進める。

それはコントロールルームからも確認出来ていた。

「あの子達、何を・・・」

「教師部隊を下がらせる。彼等に任せよう」

織斑先生の指示を受け、教師部隊は数歩下がり、静観となった。

「白式を一極限定モードで再起動させる！」

残されたエネルギーの内、白式の右腕と雪片式型を召喚する。

「やっぱエネルギー残量的に、右腕と武器で限界だね」

「それで十分だ。零落白夜も一度だけだが使える！」

「その一撃が決まれば、その後は俺がやるべき仕事だ」

まず一夏が目の前の敵に向かって対峙しようとする。すると後ろから箒が呼び止めてきた。

「一夏・・・死ぬな！絶対に死ぬな！」

「信じろ」

一夏が箒に言葉を返す。

「俺を信じるよ箒。必ずあいつに一太刀入れて勝ってみせる。ユーゴにバトンを繋げるためにも・・・行くぞ！零落白夜、起動！覚悟しろよ！偽物やろう！」

箒達や織斑先生達が見守る中で、右腕と武器だかの白式と、敵のISとで対峙する。

「この勝負、一瞬で決まる」

敵のISの太刀を零落白夜で受け流すと、一気に腹部への斬り込みを入れた。すると腹部に空洞の様な穴が広がった。

零落白夜がナノマシンの塊を掻き切ったのだ。だが、それらは周囲にある無数のナノマシンにより、直ぐに修復される。

はずだった。ユーゴがある隠し球を使った。

「・・・いくぞ。システム起動。ナノマシン結合」

すると右頬のマーカーの色から黄色から赤色へと変色した。いや、赤色だと思われたのは血であった。その部分から血がドバドバと頬を伝って垂れ流れてゆく。

次の瞬間、その穴の空いた箇所には、一瞬の修復する間も与えず、ナイフで次々と切り刻み、刺し込んでいった。あまりの速さに一夏たちの目が追いついていない。傷口は明らかに広がってゆく。

「そうか！まず一夏の零落白夜で、大きな切り傷を作る。その後、ユーゴのファストナイフでその傷口を修復よりも速く壊す。これなら、エネルギーが切れる前に何とかなるかも！」

シャルルが丁寧に解説する。

ファストナイフだけだと、削り切るのに時間がかかる。ISのエネルギーがなくなるならまだしも、最悪の場合、敵からの反撃が来る危険もある。

一方、零落白夜だけでも奴を倒すには及ばない。重い一撃を与える為に、エネルギー消費など、その反動は大きい。その後、仮に二度目があってもその時には傷口はほぼ修復。ファストナイフ以上に、エネルギー切れを起こすのだ。

だからこそ、零落白夜の様に、一度で敵に深く突き刺す強力な一打と、その後処理を行う為のナイフの連撃が渾然一体とする必要であつ

た。

敵のISは完全に困惑しており、ショートでもしたのか何の反応も示さなくなっていた。ユーゴ自身、一切動きを止める事なくナイフでその穴を広げていった。

やがてその穴の中から、金色の光が見えて来た。眼帯が取れたラウラの左側の瞳であった。

すると左側の瞳とユーゴの右頬の跡が共鳴するかの様に、一瞬だけ光った。彼に目眩が襲いかかる。一瞬だけ目を閉じ、次に開けてみると、そこは一つの部屋であった。装着していたISなども解除されている。

「ナノマシンが共鳴し合い、形成された空間が」

たった一枚の壁を隔てたその部屋。この向こう側にはラウラがいる事が、直感的に理解できた。そしてラウラとこの壁一枚を挟む形で背中合わせでの話し合いが始まった。

（・・・私はお前が憎かった。戦う為に生み出された私。そんな私が手術すら受ける事が許されなかったAA。それを持つお前が）

「アステカの祭壇の事か」

（そうだ。どうしてお前がその力を手にしたのか。何故、私はその力を手にする事が出来なかったのか。お前が強いからなのか？私が弱いからなのか？）

「・・・俺は強くない。お前より弱い存在だ。7年前、俺はこいつを望んでないのに得た。俺はその時のトラウマを未だに引きずってすらいる」

「もし、それでも俺が強いと言うのならそれは、俺には譲れない事があるからだ。俺と違い、アステカの移植後の症状に今も苦しんでいる人がいる。そいつは今も意識が戻ってこない」

「俺は以前、あいつに助けられた。あいつがあの時いなかったら、俺は腐ったまま死んでた。あいつがいたから、今の俺がいる。だからあいつを、今度は俺が助かる番だ」

（お前の言うあいつ。まるで私で言うところの教官だ・・・では何故、

お前は私を助けようとする。先程まであれ程、毛嫌っていた私を)

「俺としては理由が二つある。一つ目はこいつだ」

ユーゴが自分の頬にあるマーカーを指さす。ラウラからは見えてないが、きつとラウラも、頬のマーカーの事を指しているのだと理解しているのだろう。

「俺には一つだけ、決して譲れない事がある。自分の様な、研究などに使われる犠牲者だ。あのままいけば、お前はVTシステムに、ナノマシンに完全に取り込まれていた」

「俺はそんな犠牲はもう見たくない。下らない研究の犠牲者は、俺とあいつだけで十分だ。もうこれ以上、増えて欲しくない。もう一つは簡単だ」

「俺は女子の制服なんざ着たくない。それだけだ」

再び意識が現実世界へと戻ってくる。時間にして意識を失ってから0.1秒も経っていないだろう。それでいて、先程の問答の記憶ははっきりと残っている。

【maximum!】

ファストナイフに蒼炎を纏わせると、トドメの一撃としてそのISを真一文字に斬り裂いた。少しの沈黙の後、そのISを覆っていたナノマシンは崩壊していった。

そして崩れてゆくナノマシンの塊の中から、一人の少女が倒れこんで来た。慌ててそれを受け止める。

ただ意識を失っているだけのラウラ。無事なその姿に皆が安堵の息を漏らした。あのユーゴも例外ではない。

(これで、作戦成功だな・・・今回はお前のおかげでもある。感謝するぜ)

ユーゴは自身の頬にある禁断のナノマシン。アステカの祭壇をなぞった。そこには先程流れ出た生暖かい血が、まだ付着していた。

「やったな、ユーゴ」

「・・・ああ」

一夏と手を交わしあう。コントロール室からは、織斑先生の怒声の

指示がとんでいる。

「急げ！直ぐに救護班を!!」

「パチ、パチ、パチ、パチ、パチ」

突然、その場に似合わない渴いた音の拍手が聞こえてきた。するとアリーナの遮断シールドが破壊され、何か यूーゴ達の目の前に現れた。

「ブラボーブラボー。お二人共、とても素晴らしいコンビネーションでしたよ」

ISを装着した一人の女性。教師の一人か医療班の方だと、皆が最初は思った。だがそれは直ぐに否定される。

他の教師達と違い、リヴァイヴでは無く、これまで見た事のないISに登場している事だ。

「二人の勝利の祝福に、乾杯を」

すると यूーゴの表情が、これまでに無い程に険しいものへと変化した。

「お前は、クイーン!!」

第13話 アステカの祭壇と越界の瞳

「お久しぶりですねえ。今は白銀ユーゴと名乗っていましたか。先程のシステムを使ったIS強化とナイフの連撃。とても見事なものでしたよ」

「あんなIS。見た事ないよ！」

「ユーゴ。あいつと知り合いなのか？」

だがユーゴは一夏達の質問に答ええない。先程の一夏以上に怒りを剥き出しにしていた。

「・・・許さない！お前は！お前達だけは!!」

「冷たいですねえ。久しぶりの再会ではなく、遂最近、顔を合わせたからですかねえ。あのISの整備室で、私に気づかないとは。最も、あの時は素顔を偽っていたので、仕方ないですがね」

「あの時、ラウラの背後に立ってた奴か！」

「それと残念ですが、私達ネクロノミコンは、誰かに赦しを乞う様な軟弱な組織ではありません」

「教師部隊！侵入者を拿捕せよ！」

メインルームの織斑先生が、教師部隊に敵の捕縛を要請した。教師達がジリジリと距離を詰めてゆく。数で負けているのに、クイーンと呼ばれた存在は余裕であった。

「おやおや。第二世代のリヴァイヴ如きで、このFS—Eタイプのコアを持つIS。ソード・ヴォルフとこの私に挑むとは。その愚かさを教えてあげましょう！」

すると彼女のISから鋭利なワイヤーが飛び出し、周囲にいた教師部隊を意図も容易く蹴散らした。遂にワイヤーがISのボディを4機とも貫き、地面へ何度も叩きつける。

シールドエネルギーが一気に無くなり、教師部隊のISが強制解除される。

そのワイヤー捌きは、まるで尾の様に自分の身体の一部として扱っていた。そのままワイヤーを一気に遠くに伸ばし、壊れかけのシユ

ヴアルツエア・レーゲンから何かを引き摺り出す。

「あれは、VTシステムの本体!」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女はどうかやら、私達の理想の期待値を出すには不適合な存在でした。所詮は失敗作・・・ですが今回の一件で、今後の研究に実の良いデータが取れたのもまた事実。その点に関しては貴方達の実力に、素直に敬意を表させて貰います」

「さて、今日は君への顔見せとVTシステムのデータ取得が目的です。それが果たされた以上、もうこんなところに要はありません。それでは皆さん。またのご機会にお会いしましょう」

「待て! テメエには聞き手で事が!!」

しかし敵のISはアーリーナの遮断シールドを再び壊し、去っていった。もうISのレーダーにも映っていない。

「くそっ! くっそおおツ!!」

ユーゴが悔しそうに地面に拳をぶつける。やり場のない憤りである。

「ユーゴ。ネクロノミコンって、確か」

「以前お前が言ってた復讐の対象って奴か」

「.....」

今のユーゴは何も答えようとしなかった。痛む手を抑えながら、その顔を一夏に見せない様に。やがて救護班がやってきて、ラウラと負傷した教師部隊を乗せて行った。

医務室。

「ん・・・んんっ」

「目が覚めたか」

ラウラが気づいた。目の前には知らない天井が映し出されている。

隣を見ると織斑先生がいた。

「教官……私は、どうなったのです?」

「本来なら機密事項であり、重要案件なのだが、当事者たるお前には教えておこう。VTシステムは知っているな」

「ヴァルキュリー・トレース・システムの事ですね」

「その通りだ。アラスカ条約で使用は愚か、開発と研究すら禁止されている、禁断のシステム。それがお前のISに搭載されていた」

「私のISに、そのシステムが」

「……以前ドイツから派遣された、マリーネ・シルファスという人物を、知っているか?……ついさつきドイツ軍に問い合わせしてみたが、そんな人間は知らないの一点張りだった。だが、お前は覚えているな?そいつの事を」

「……ええ。覚えてます」

「そうか。ではこの話はここまでだ。そしてそのVTシステムの発動条件はお前の精神ダメージ。蓄積ダメージ。そして操縦者の意思。いや、願望と言うべきか。それが渾然一体となった際に、起動したと言うべきだな」

「……私が、力を望んだからですな」

あの時感じたドス黒い感じ。あれに飲み込まれたのは誰のせいでもない。自分のせいだ。その事はラウラ自身が、一番理解していた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」

俯くラウラに何かを思ったのか、織斑千冬が、ドイツ軍所属時の教官時代の様なら雰囲気へと変化した。

「はっ、はいっ!」

「お前は誰だ?」

「えっ?私は……」

「誰でもないなら丁度良い。お前は今から、IS学園に通う生徒の一人、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。それと、お前と話したい奴等が来ている。せめて話だけでも聞いてやれ」

「そして最後に、お前は私になれないぞ」

そう言う千冬先生は医務室を後にした。そして入れ替わる様に、

一夏とユーゴ。そしてシャルルの三人が来ていた。

「お前達か」

「僕達もさつきまで、簡単な検査を受けてたんだ。とりあえずみんな、身体の何処も大きな負傷をしてなくて良かったよ」

「ラウラも。身体、何ともなかったんだってな。良かったよ」

「織斑一夏。貴様は本当に可笑しな奴だ。お前を憎んでいた私の心配をするとは」

「その憎む原因って、やっぱり、俺のせいで千冬姉の栄光に泥がついたからか？その事でなら言い訳はしない。本当に情けない弟だよな」

「・・・でもラウラ。何で織斑先生がドイツで教官をしてたか、分かるか？」

その言葉をかけたのはユーゴであった。

「織斑先生は、一夏の監禁場所について情報を提供してくれたドイツ軍に感謝していた。そしてその借りを返す為に、ドイツで教官をしていたんだ」

「教官に、その様な事が？」

「もし、一夏が誘拐されなければ、織斑先生がドイツ軍に教官として行く事は無かった。そうなれば、お前と織斑先生が会おう事だって、無かった事になる」

「ジレンマって言うんだっけ？そう言うの？」

「矛盾でいいだろう。変にカッコつけないでそっちの方が分かり易い」

「・・・つまり、織斑一夏のおかげで、私は教官と出会ったという事か？」

「そこまでは言うほどの事ではない。だが、少なくとも、その一件に関して、織斑一夏を恨むのはあまりに逆恨みだ。それはやめておけ」

「・・・織斑一夏。済まなかったな。私の身勝手な逆恨みに巻き込んでしまつて」

「気にすんなよ。もう終わった事なんだし。てかユーゴ。その事件の事知ってるんだな」

「まあな。所で一夏。それにシャルル。悪いが席を少し外してくれな

いか？ラウラと一対一で話したい事がある」

そう言われ一夏達は部屋を去って行った。夕焼けが差し込む医務室の中はユーゴとラウラだけとなった。

「・・・あの空間で、俺はお前の過去を見た。そこで知った。お前が強化人間だと言うことを。闘い以外に何も知らない事も」

「私もだ。あの時、私にもお前の過去が見えた。お前は私と同じと思っていた。だからこそ、私より上なお前が憎かった」

「・・・でも違っていた。お前には普通の人間としての祝福があった。だが、7年前の出来事で、お前の幸せは全て奪い取られた。初めから幸せなど無かったと思っていた私なんかよりも、その衝撃は大きかったのだろう」

「・・・勝手な話だが、私はお前の過去を見た時、お前の事が少しだけ分かった気がした。何故お前が強いのか。単に私には無い強化があるからでは無いと言うことに」

「奇遇だな。俺も同じだ。お前の事を、少しだけ理解出来た様な気がする。じゃあな。長話はするなって織斑先生から止められてるんでね」

「・・・待て」

部屋を去ろうとしたユーゴを、ラウラが呼び止めた。顔を振り替えらせると、ラウラが僅かにだが微笑んでいた。

「お前の右頬にあるマーカー。中々かっこいいぞ」

「・・・お前も、左目の金色の瞳。結構綺麗だぞ」

今度はナイフを投げつける事なく、それだけ言うとユーゴも微笑みを返した後、今度こそ医務室を後にした。

ふと、ラウラが側に置かれた机を見ると、眼帯や通信機など自分の所持品が置かれていた。すると彼女は通信機を取り、自分の部隊、シユヴァルツェ・ハーゼ黒の副隊長と連絡を取り始めた。

「・・・クラリツサ、私だ。お前は確か、日本文化などの知識に富んでいたな。その知識を見込んで、相談したい事があるのだが・・・」

その頃、ある場所ではクイーンと呼ばれたものが室内に来ていた。机を囲みクイーンを含めて3人が座っている。

「これで集まったか。さてクイーン。今回の行動の結果を教えてくださいませ」

「はい。本来の目的は概ね達成されました。唯一達成できなかったものが、VTシステムの課題である、発動条件の簡易化です。ですが、起動したVTシステムからのデータを得る事には成功。よって、本来の計画は達成したと言えます」

「そして並行して行っていた、デユノア社に潜入し、内部からの株の操作に成功。そしてドイツ軍への潜入にも成功し、A I Cのデータを得る事にも成功しました」

「そのA I Cのデータが入ったフロツピーが、ここにあります」

机の上にフロツピーディスクが置かれる。それを部屋の外から人間が受け取り、持っていった。

「これでデユノア社の株主は、実質我々になった。あそこはかなり強い勝手が良い企業だから、大事に扱わねばな」

「そしてA I Cはドイツが専門であり、裏ルートで回る事はなかったが、データを入手した事で、我々の立場が優位性がより保てますね」
「・・・所でクイーンよ。一つ聞きたい事がある。7年前の事件の生存者がいる。それを目の前にして、実質逃げだしたそうではないか」

一人の男が、話を切り出した。するとクイーンの眉が僅かに吊り上がる。

「逃げだしたは悪い言い方ですね。私の時の任務はあくまでデータ集め。戦闘はあくまで自衛目的で、基本は避けるものですからね」

「つまり尻尾を巻いたと言うのか。臆病者め」

「言ってくれますねジャック。戦略的撤退の五文字が無い人間は、頭の中も筋肉で詰まって出来ているのでしょかね?」

「やめろ。ここは作戦の成功の話を書く場であり、つまらんケチを付け合う場ではない」

するとリーダーの様な人物の一言で、場が一気に静まり返った。その人物はこれまで喋る事なく、机の上にトランプを並べ、一人でモンテ・カルロをしていた。

(キング・・・)

「別に良いではないか。今回の一件で簡単な顔合わせはしたのだ。それに、戦いとは常に互いが同じ立場で行うもの。消耗した相手を一方的に殴るのでは、戦いをする醍醐味が無い」

「そう!相手の力の更の上に上を行き、その力で叩き伏せる!それこそが戦いの醍醐味!!その瞬間こそ、生きてると言う実感が湧き上がる!!!」

キングはそう言う嬉しそうに、カルロで集めたトランプを辺りにぶち撒ける。その総数は53枚。本来ある筈の54枚の内、1枚が無くなっていった。

そしてその抜け落ちたカードは、一枚のジョーカーである。

「ところで、例のコアなど生産はどうなっている?」

「問題ありません。篠ノ乃束が創ったコアとは違い、能力的には劣りますが、僅差と言えば僅差です。今のところ順調に量産もされています」

「そうか・・・ならば良い」

その言葉は先程までとは違い、興味のない番組を見て、その感想を言うことも以上に、つまらなそうな言葉であった。

「一体何故です?」

その頃、織斑先生は電話である人と話していた。相手は日本政府で

ある。

「だから言っただろう。今回のIS学園を襲撃した組織。確か、ネクロノミコンとか言ったな。奴等の正体などが分からない以上、下手な火種はごめんなのだよ」

「火種はごめんとか、そんな体裁を気にしている場合なのですか？これが世界的なテロ組織なら、日本だけでなく世界の脅威でもあるのですか？」

「では聞くが？その組織は何を目的としているのかね？規模は？行動理念は？構成員は？君には分かるのかい？」

「それは・・・今の段階ではまだ分かりません。少なくとも本日のVTシステム事件。それに絡んでいる事だけは間違いありません」

「ほら見たまえ。何も分からない。それが人々にとつてどれ程恐ろしい事か。まだ、危険ながらもその思想などが分かりやすい極東赤軍の方がまだ可愛いものだよ。君は市民達を無闇に恐怖させ、混乱させる気かね？」

「別にその様なつもりは・・・」

「とにかく、IS学園には様々な特権がある。だが今回の一件は無闇に報道して、市民の恐怖心などを煽るべきではない。この件に関する一切の報道をするつもりは無い。後で纏めた報告書が提出される筈だ。それで確認させてもらう」

「・・・分かりました。では、失礼します」

それだけ言うと織斑先生は通信を終わらせた。

(騒動は嫌いか。そこまで自分達が可愛いのか。日本政府は)

第14話 打ち明かす本音

「結局トーナメントは中止だって。でも生徒の現在の腕前を把握する為に、一回戦だけは全部やるんだって」

「ふーん」

「まあ、あんな出来事があったんじゃ、仕方ないな」

あの後一夏達は、織斑先生から今日の戦いでのを生徒達に口外する事を禁じられた。生徒達や来賓の方達にも、上手く理由をつけて今回の一件を丸く収めたらしい。

今は食堂でラーメンなり定食なりで、空腹を満たしていた。

「優勝のチャンスが消えた・・・」

「交際の夢が・・・」

「・・・うわああん!!」

すると離れた所にいた三人の女子が何故か床に崩れ落ちた。立ち上がったかと思うと、嘆きながら食堂を後にして行った。

「あいつら、何を嘆いてるんだ?」

すると一夏は少し離れた場所にいる筈に気づいた。すると筈の元へと歩みよる。

「そーいや筈。例の件だけどき。別に付き合ってもいいぞ」

その言葉の驚きのあまり、筈が固まる。ユーゴとシャルルも表情にこそ表さなかったが、箸を取り落とす程に固まって驚いている。

「・・・今、何と言った?」

「だから、付き合っても良いって」

「本当か!? 本当の本当に本当なのだな!？」

喜んでいる筈に胸ぐらを掴まれ揺さぶられている一夏。結構苦しそうである。

「お、おう」

ぐんぐんと顔を近づけてくる筈に、一夏は多少だが引いている。やがて近すぎる事に気付いたのか、筈が慌てて離れた。

「ちっ、因みに何故だ? 一応理由を聞こうではないか」

「そりやお前。他ならぬ幼なじみの頼みだからな。付き合うさ」

「そうかそうか！」

「ああ！」

「買い物くらい、付き合うさ」

【ドスツ！】

「グハアツ!？」

箒の全身全霊の怒りを込めたであろうパンチが、一夏の頬に直撃した。ものの見事に吹き飛ぶが、それだけでは終わらない。

「どうせ！そんな事だろうと思ったわっ!!」

そのまま一夏の腹をサッカーボールの如く蹴り上げた。すげえ。身体少し浮いたぞ。箒はカンカンに怒りながら食堂をそそくさと出て行った。

「ほ、箒のやつ、何であんなに怒ってるんだ？」

「思うんだけど、一夏ってさ。ワザとそうやってるんじゃないかって思う時があるんだよね」

「それについては同感だ」

これに関しては完全に一夏が悪い。寧ろ付き合ってもらおう！と聞いて何故、買い物に付き合うが真っ先に思い浮かんだのだろうか。純粹か？純粹だからか？それともただの唐変木なのか？

せめてあの時、屋上で昼を食べた時に買い物だろ？って言っていれば、まだ手加減程度はして貰えただろうに。哀れ、南無三。

すると三人のテーブルに、山田先生がやって来た。

「織斑君にデユノア君。それに白銀君。今日は大変でしたね。でも、そんな三人の労を誇る素晴らしい場所が、今日から解禁になったんです！」

「解禁？」

「何と男子の・・・大浴場なんです!!」

男子の大浴場。今の使用者は一夏一人だけだが、確かに三人で使う分には、それは大きすぎる浴場であった。

「ふー。生き返るな。これは」

【ガラガラ】

「おつ。ユーゴか。アドバイザーへの連絡は終わったのか?・・・ユーゴ?どうし・・・!?!」

「・・・いつ、一夏あ」

振り返った一夏の顔が赤く染る。何とユーゴではなくシャルルが、大浴場に入って来たのだ。

「おいシャルル!何やってんだ!!」

「そのっ・・・あんまり見ないで。一夏のエッチ」

「すっ、すまん!直ぐに上がるから!」

「待って!話したいことがあるんだ。大事な事だから、一夏にも聞いて欲しい」

上がろうとする一夏をシャルルが呼び止めた。そして現在、一夏とシャルルが背中合わせで話し合っている。

「一夏。聞いて。僕ね、ここに居ようと思うの。一夏がいるから、ここにしようと思うんだよ?」

静か浴槽の中で、シャルルが静かに一夏の手を握る。

「そっ!そっか」

「それにもう一つ。僕の在り方について決めただ!!?」

一夏の背中に、柔らかい感触が二つ感じ取れる。それもその筈、シャルルが一夏に抱きついている。タオル？湯船にタオルを入れるか？つまり、そう言う事だ。

「僕の事はこれから、シャルロットって呼んで欲しいな。二人きりの時だけでもいいから」

「・・・それが、本当の名前なのか」

「うん。お母さんがくれた、本当の名前」

「・・・分かったよ。シャルロット・・・」

「ありがとう。一夏・・・あのね一夏。僕、一夏の事が」

【ガラガラ】

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

いい雰囲気をぶち壊すかの如く、ユーゴが大浴場へと入ってきた。入ってくるなら一夏とシャルルを凝視した。

二人の顔が最高潮に紅潮する。慌てて二人が離れて、浴槽から出ようとするが、それをユーゴが制した。

「待ってくれ一夏。それにシャルル。聞いてくれないか？せめて二人にだけは、本当の事を言っておきたいと思う。この頬にあるマーカーについてだ」

それは意外な言葉であった。これまで幾度となく気になって聞こうにも、ユーゴが言う気配も無かった為に、突然のその言葉に二人は驚いている。

ユーゴが簡単に身体を洗い、浴槽内に入ってくる。すると濡れた手で頬にある黄色のマーカーをなぞった。

「この頬にあるマーカー。これはアステカの祭壇っていう特殊なナノマシンを埋め込んだ人間に現れる、記号の様なものだ」

「アステカの祭壇？それってあの心霊系の奴に出てくる、検索してはいけないワードのやつか？」

詳しいことは言えないので、気になった方は調べてみよう(但し、どのような事態になっても、作者は一切の責任は取りません)

「違う。それじゃない。で、これは体内に多量のナノマシンを埋め込む事で、人間の持つ肉体の機能を飛躍的に上昇させる事が出来る、特殊なシステムだ」

「そんな凄いシステムが。でも、僕は聞いた事ないよ？」

「元々がかなり危険な強化法だからな。失敗した時のリスクだって高い。8年前には新たにこれを肉体に埋め込む事そのものが禁止された程だ」

「その時、これに関わるすべての関係資料がこの世から抹消され、今となつては、その名を知るものは身体に埋め込んだ者か、関係者くらいだ」

「詳しい事は言えないが、俺は今から7年前、ネクロノミコンによってこれを埋め込まれた。だから俺は奴等を追っている。奴等が埋め込んだ張本人達だ。なら必ず、除去する為のプログラムだって持っているはず。それを手に入れる為に」

「でも、それでも進展はなかなか見られなかった。だから俺は、この学園を利用しようとした。その為にこの学園に通う事にした。表向きに居場所を明かして、連中を呼び寄せようとな」

その結果が、クイーンの登場である。つまりのユーゴの狙いは確かに成功したのだ。しかしユーゴの顔持ちは重いままである。

「・・・だが。関係ない奴が巻き込まれる事は良しと思っではない。だからこそ、今回の一件。ネクロノミコンがラウラを使ったのが、俺がいる学園の生徒だから。そういう理由だけかもしれない」

「もしそうなら、俺は・・・」

そこから先の言葉は言えなかった。いや、言いたくなかった。

彼自身、立場上の建前だけでなく、今のこの学園生活を楽しんでいる自分がある事に気づいている。それは復讐の為に、如月さんと情報を集めながら旅をしていた時間とは、全く違った時間であつたからだ。

「だからせめて二人にだけは、一応本当のことを伝えておこうと思つてな」

「そうか・・・ありがとうな、ユーゴ」

「なっ!?いきなり礼を言っつて、何だ?」

突然一夏が礼を言い出した。その突然の事にユーゴが困惑する。

「俺達に秘密を打ち明けてくれた事だよ。それって、お前が俺達の事を信用してくれたからじゃないのか? そうだとしたら、嬉しくてよ。他人に頼られる事が」

「僕もだよ。僕もさつき、一夏に僕の秘密を打ち明けた。だから分かるんだ。秘密を打ち明けた今のユーゴの気持ち」

「それとユーゴ。一つだけ言っておくぜ。俺はお前もシャルロットも友達だと思ってる。秘密を打ち明けてくれたんだからさ。もし、お前の言う事態になったとしても、俺の中のそれは変わらねえよ」

ユーゴは顔をキョトンとさせていたが、やがて笑い始めた。

「・・・ふっ。ふふふっはっはっはっはっ! ラウラ・ボーデヴィツヒが言っていた様に、本当に可笑しな奴だな。お前って」

その言葉は随分と砕けたものへと変化していた。復讐者としての、そして自分を偽る為の仮面は今では要らない。ユーゴの持つ素が表れていた。

「一夏。こんな事言うのは悪いが」

「分かっている。この話を無闇に広げる事はしない。今は俺とシャルルだけの秘密な。そしてシャルルが女って秘密も、俺とユーゴだけの秘密だ」

「あつ、一夏。その事なんだけど・・・まあいいか」

シャルルが何か言いかけたが、気付いてなかった為に話すのをやめた。その後三人は風呂を長く堪能した後、自分達の部屋に戻っていた。

次の日。ユーゴが朝起きてみると、シャルルが部屋にいない事に気

がついた。そのまま朝食を摂る際にもシャルルの姿はなかった。

何処に行つたのかと疑問に思っていたユーゴと一夏だったが、二人の目の前に、シャルルは突然現れた。

「えー・・・今日は皆さんに、転校生を、お知らせします」

明らかに山田先生が上の空状態である。一夏に至っては、かなりの冷や汗を流している。まあユーゴ自身も、結構焦っているのだが。

「シャルロット・デュノアです。皆さん。改めて、よろしくお願いします」

「えーと・・・実はデュノア君は、デュノアさんと言う訳でした。」

「・・・は？」

箒のその一言で、教室内がとてつもなく騒ついた。

「「えええっ!?!」」

「デュノア君って女だったの!?!」

「どうりでなんかおかしいと思った!実は美少年じゃなくて、美少女って訳だったのね!」

ここで終わればよかった。それならまだ「何だそうか。騙されたな。ははは」で済ませられた。問題はこの後の発言だ。

「って織斑君!それに白銀君!二人とも、確か一緒に部屋だったのに、この事に気がつかなかったの!?!」

おや、ボヤ程度の騒ぎなのにどんどん火が大きくなってるぞ?意識したとはいえ、これ以上火種が大きくなならない事を祈ろう。

「待って!そう言えば昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね?まさか二人とも!そこで・・・」

「いや!俺はなにもしてないぞ!!そりゃ一夏とシャルルが抱き合ってたけど、俺は何も・・・ヤベッ」

「ばっ!馬鹿!!」

祈りは通じなかった。言った後に後悔するが、最早手遅れだ。ユーゴの失言により、炎上している火種にガソリン。いやニトロ缶が丸ごと放り込まれた。

クラス中に歓喜の悲鳴が聞こえてきた。その発言には山田先生すらも、顔を赤らめている。あーあ。大爆発だなこりゃ。ナレーター

俺、もう知ーらね。

【ドツスーン!!】

一組の教室の壁が崩壊する。なんと2組から鈴が甲龍にのってやってきたのだ。それも額にはつきりと、青筋を立てながら。

「一夏あ!!!」

龍咆のチャージは全開状態だ。

「ちよつと待て鈴!!落ち着け落ち着け!俺死ぬって!!」

「丁度いいわ!いつぺん死んで来なさい!!」

龍咆が放たれ、教室の窓側の壁を破壊した。一夏は何とか直撃を避ける事に成功するも、余波で思い切り吹き飛ばされた。

「痛ててて。直撃したらやばかった」

「痛いって事は、まだ神経が繋がってる。つまり問題ないって事だ。よかったな一夏。俺、腹痛くなっちゃった。早退します!」

この場からとにかく逃げようとするユーゴ。しかし、そうは鈴と問屋が下さない。

「ユーゴ!!あんたもあんたで同罪よ!!」

うん、知ってた。再び龍咆がチャージされる。

「待て待て待て!!!何故だ!」

「女として、許せないからよ!!」

無茶苦茶だ。咄嗟にユーゴがジョーカーを展開、マントとビームシールドで龍咆を受け止めようとした。

しかし、再び放たれた龍咆の攻撃に割って入るものがいた。シユヴァルツェア・レーゲン。ラウラのISだ。AICを使って受け止めている。

「ラウラか。悪いな、助かつ・・・んんっ!」

「!!!?」

その瞬間、ユーゴの世界は固まった。ユーゴだけではない。クラスメイト達も、山田先生も鈴も、ラウラ以外の全ての時が止まっていたと言っても過言ではない。

何と、ラウラがユーゴにキスをした。しかもティープなのを。数秒の時間が経過した後、キスは終了する。

ユーゴは啞然としていた。震える手で、自分の指を自分の唇に当てる。

「……………エ? ナニコレ?」

「お、お前は私の嫁にする! 決定事項だ。異論は認めん!」

「……………はい?」

第一声がこの気の抜けた返事である。

「何だその反応は!? 嬉しくないのか!? お前を嫁として、私が貰ってやるのだぞ!!」

「え……………ええっ!? ちよちよちよ! ごめん。え、何で!? 何でそうなった!? ちよつと何言ってるかマジで分からない!! えっ? えっ? えっ?」

放心と動揺が交互に襲ってくるあまり、ユーゴが取り乱していたその時であった。

【バキッ!! ドスッ!!】

何かプラスチックが折れる音がした。その直後に壁に全力拳をぶつけた様な鈍い音もする。先程までのクラス中の歓喜の音が、恐怖の喘ぎに変わる。

「あつ……………あつ……………」

とても嫌な予感がする。一組のメンバーが恐る恐るその音のした方角へと視線を向けた。

「……………おい貴様ら。この惨状は一体どういう事だ?」

織斑先生がそこにはいた。とても穏やかな笑顔を浮かべながらも、それでは隠しきれない程の怒りが溢れている。

それは手にしている出席簿が真ん中から真つ二つにへし折られている事からも想像がついている。眼など完全に殺気付いており、その眼はISに乗ったユーゴ達を睨んでいた。死んだなこいつら。

「あ……………アタシ! 早く教室に戻らなきゃ! じゃ! じゃ! そう言う事で!」

鈴もISを解除して、壊した箇所から出ようとするもそこにいた織斑先生が道を塞いでいる。

「そんな逃げる事はないじゃないか。是非、ゆっくりと話し合おうじゃないか (ポキポキ)」

「あ、あつ、アハハハハ!! ポキポキ指を鳴らすのは、話し合う人のす

る事じゃないですよ？織斑先生」

「この、大馬鹿者共があ!!!」

織斑先生の怒鳴り声が、学園中に響き渡った。もしかしたら窓ガラスを割れるかもしれない程に。その後、一組の今日の授業は全部中止となり、2組との合同で1組のメンバーは全員、教室の修復作業に1日取られたのであった。

なお、この後に破壊の主犯たる鈴と、ISを教室内で展開したユーゴとラウラ。そしてクラス代表でありながらこの事態を防げなかった一夏。そしてとぼつちりの如く、副担任の山田先生の計5人は、織斑先生直々にこっ酷くお説教されたとか・・・

第15話 久しぶりの街へ

日曜日である。昨日ようやく1年1組のクラスの修復が完了。特にユーゴと一夏に至っては、貴重な男手という事もあり、かなりの労働をさせられた。その為に眠れたのもかなり夜遅くであった。

そしてユーゴは現在、ベットの上で絶賛爆睡中だ。

シャルル、いやシャルロットが女の子だと皆に発覚し、当然の如く三人部屋は解消され、今は一夏とユーゴの二人部屋となっている。そう、シャルルの使っていたベットが空いたのだ。

寮のベット、それは彼がこれまで寝てきた寝袋や硬いマットレスとはまるで違う。弾力のあるふわふわとした暖かさに、掛け布団。全てがユーゴにとっては初めての感触であり、極楽であった。

(マジで柔らかいんだな。布団って・・・)

僅かに目覚めた意識で、ぼーっとしながら寝返りをうとうとした時、身体に何かがぶつかり、動きづらい。

(あれ?身体、何かにぶつかってんな。あんまり動けねえ・・・ん?)

ふと、身体に妙な温かみがある事に気がつく。背骨あたりに硬くて丸い何かが。腰には手のような感触が・・・というか誰かの身体が自分の身体に密着している。第六感が何かを伝えている。

何とか寝返りを打ち寝ぼけ眼を全開にして確認する。何とそこには、ほぼ産まれたての姿をしたラウラが、ユーゴ抱き枕の様にして寝ていた。太陽の光など浴びなくとも、脳が活性化された。

「うおっ!!」

余りの驚きに強引にホールドから抜けて飛び起き、ナイフを取り出す体勢を取る。すると強引に離れた際の振動か、ラウラの方も目覚めた。

「なんだ。もう朝か?」

「ラウラ! 一体何してんだ!?! てか、どうやって入った!?! あと、何で裸!?!」

「何を言っている? 夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたが? 何よりお

前は私の嫁だ。当然だろう?」

「寝ぼけてるのか!?それとも誰かに何かされたのか!？」

「心配するな。私は正常だ。私の意思でやっている」

「・・・なら、この際はつきり聞くけど、その嫁つてのは一体何だ?」
「知らないのか?日本では、気に入った相手を嫁として認める。これは日本文化の中でも、深く根付いているらしい。私はそう聞いたぞ?」

こうして日本は世界から誤解されてゆくのだ。

「成る程。とりあえずその間違った知識を教えた奴は見つけたら粛清してやるか」

ここで閲覧者の皆さんに断っておくが、決してユーゴは女より男の方が良いとか、そういうわけではない。そこら辺の持つ感性は、世にいる大多数の人間と差異はない。

では何故か。それは彼自身がこういう事に不慣れなのだ。元々対人関係に難があった性格の為、人ともあまり関わろうとしなかった。その為、ここまで突然ぐいぐい来る様な事態に関わった事がない。

故に対処の仕方もわからずにとても困惑している。え?慣れてる方がおかしいって?細けえ事はいいんだよ!

「よし。では朝のストレッチを始めるぞ」

次の瞬間、ベットから放り出され、寝技を決め込まれた。痛みにより必死にもがき、何とか一瞬の間を見つ、自分の体制を立て直す。
「流星は私が嫁と見込んだだけの事はある。私のドイツ仕込みの寝技をから抜け出し、立ち上がるとはな」

「まあな。身体を使う事には俺自身、結構慣れている。てか、結構痛いな」

「よし。ならばここは一つ模擬戦をしようではないか。目覚めには丁度良いだろう」

「・・・分かったよ。受ける」

こうなつては間違いなく堂々巡りだ。ならいつそ相手をして、満足してもらって帰ってもらうに越したことは無い。それからはお互いにプロレス試合へと流れ込んだ。

数分間取っ組み合った後、勝負は決した。ユーゴの勝利だ。

「はあつ。はあつ。マウントを取った！俺の勝ちだな！」

「くっ！私の負けだ。さあ私を好きな様にするが良い」

「・・・は？何言ってるの？」

流石に予想外の言葉に、どう反応すれば良いか困っている。

「どうした？お前は戦いに勝ったのだ。勝者は敗者を好きなようにする権利があるのだぞ？」

「どこで習ったそんな知識!？」

何でそうなった。勝者が敗者を好きにできるとは・・・良くあるカードゲームの販売促進アニメの見過ぎだろうか？

「おいユーゴ!!おっ、おっ、おっ！お前何してんだ！」

見ると一夏が先程の騒動で起きていた。ここでユーゴがラウラの状況を思い出す。慌ててラウラの方を見る。目の前に裸の女子がいる。その上に跨る自分。何も知らない人間が見たら、絵面的に完全にアウトだ。

するとラウラはマウントから抜け出し、一夏に対して先程と同じ寝技を決め込んできた。

「痛てててー！ラウラ！ギブギブ!!ロープ!!」

「織斑一夏！この裸は貴様に見せるためではない!!その目を潰せ！」

潰せって言ったぞいつ！つむれじゃなくて潰せって言ったぞ！てかそもそも！高校生という麗しの乙女の癖に、裸なんて見せんじゃねえよ！

【コンコン】

「おい一夏よ！起きているのか？日曜だからといい、怠けては腕が鈍るぞ！朝稽古を始め・・・」

おや？不安な流れだ。躊躇いなく箒が部屋の中に入って来た。当然の如く、箒の目に今の現状が映り込んだ。

今の一夏の状況。これは誤解されますわあ。

「一夏ア！なにを・・・何をしているー！」

「私の裸を見たので、記憶から消させようとしているのだ」。

「なっ!?!なん・・・だど!?!」

あまりの驚きのあまり、手にした竹刀が床へと落ちる。

「ちっ、違うぞ箒!!これは違う!・・・そうだ!ユーゴ!お前から箒に説明してやってくれ!なっ!ユーゴ!」

既にユーゴはその場から逃げていた。さっきの箒の迫力の前には、抵抗の気すら起きない。

「ラウラよ。少し、部屋を後にもらえないか?この愚か者には、私から裁きを与えよう」

「うむ。そうか。では頼んだぞ」

ラウラが部屋を後にする。これでこの部屋には箒を止める者は誰もいない。鬼神の如き威圧感。今この瞬間だけなら、完全に向かう所敵無しである。

「待て落ち着け箒!話せば分かる!話せば分かる!」

「天誅!!」

無慈悲に振り下ろされる竹刀。日曜の朝。まだ寝ている人も多くいる寮の中で、とびきりの一夏の悲鳴が響き渡ったとか。

さて、日曜日ということでは学校はお休み。生徒達は思い思いの自由を楽しんでいた。ユーゴは今度行われる臨海学校の際、水着を持ってこいと言われた為、その調達のために街へと繰り出していた。(久しぶりにIS学園の外に出たな・・・)

「ユーゴよ。奇遇だな」

ふと名前が呼ばれたので顔を前に向ける。すると目の前にはラウラがいた。

「ラウラ。お前も街に用事か?」

「ああ。教官から今度の臨海学校までに水着を持ってこいと命令された。その為、水着の補給を行う為に街へと繰り出すのだ」

その後、目星をつけていた店も同じである為、とりあえず一緒に行動する事になったらしい。

モノレールが駅に止まり、二人が降車する。するとホームの自動販売機の影に、知ってる二人の背中があった。セシリアと鈴だ。

「セシリア。それに鈴。お前達なにやってんだ……って、うおっ！」
振り返ってきた二人の目には、これっぽっちの生氣もこもっていない、まるで死んだ魚の様な目をしているではないか。すると鈴が言ってきた。

「……ねえあんた。あれ、見てよ」

何かと思い、物陰から顔を覗かせ様子を伺う。すると一夏とシャルルの背中が見えた。二人は楽しそうに話しているではないか。

「一夏とシャルルだな。楽しそうに話してるじゃねえか」

「問題はその下です。あれ、手、繋いでますわよね？」

よく見ると一夏とシャルルは手を握っている。一夏は何とも思っていないが、シャルルは満更でもない、というか結構満足気である。

「繋いでるな。まあ、確かに」

「そっか。ユーゴにも見えるって事は、やっぱりあれ、握ってるのか。見間違いでも、白昼夢でもなく……やっぱりそっか……」

「よし殺そう!!」

鈴が甲龍の右腕だけを展開する。やりすぎだ。

「ふん。つまらない事で悩んでいるな。そもそも、そんなに不安なら、二人の間に混ざれば良いではないか」

「それが出来たら苦労しないわよ!!」

そんな話をしていると、セシリアがポカンとした表情でこちらを見ていた。

「何だセシリア？俺の顔になんかついてるか？」

「いえ、ただあなた方、随分雰囲気が変わりましたわね」

「それは思ったわ。以前のおんた達は、何かこことは別世界の存在な風で。何処かどつつきにくい印象だったけど、随分と丸くなったわね……って！いけない！」

そう言っている間に、二人の姿は人混みに紛れ、見失いそうになっていた。

「見失ってたまるもんですか！とにかく！ここであつたのも何かの縁

よ！あんた達もあいつらの尾行についてきなさい！」

「いやいや。そもそも後をつけて、何すんだよ」

「決まってるのじゃない！いい所で邪魔するのよ！」

「そうですわ！早く手を打たないと、シャルロットさんに先を越されてしまいますわ！お二人もご一緒に来てください！」

こうして鈴とセシリアに強引に押し切られる形で、ユーゴとラウラは行動を共にする事となった。だが運が良い事に、二人が入った店は、丁度目星をつけていた店であった。

「いいユーゴ！あんた達は向こうを探しなさい！アタシ達はこっちを探すから」

そう言うと二人は店内の奥にどんどん進んでいった。

「まあ、後はあの二人が解決するだろ。こっちはこっちの用事を済ませちまおうぜ」

「賛同だな。水着ごとき、とつとと選んでしまおう」

水着そのものが男性者と女性者用に分かれている為、ラウラとも一旦、分かれた。ラウラ側は、次回覗いてみる事にして、今回はユーゴ側を覗いてみよう。

（水着ねえ。俺にはどれもこれも、似た様なもんだと思うけどなあ）

セール中と貼られたワゴンの中から色々物色するユーゴ。ふと、前を見ると、ここでも知っている人間の背中が見えた。しかも外であつてそこまで嬉しくない人だ。

「あれ？織斑先生に山田先生。二人とも、何してるんです？」

「ああ、白銀君。私達も水着を選びに来たんですよ」

「私は、山田先生の付き添いだ」

「付き添いって・・・そもそもここ」

「何も言うな白銀。言いたい事は分かっている」

最初はいい歳して何をと思つたが、直ぐにそれは訂正された。自分分のある場所は男の水着売場である。本来山田先生達が来るスペースではない。

織斑先生の顔を覗くと、やれやれと言つた顔をしている。どうやら山田先生は、水着などは店にある全部を実際に見てから決めたい人ら

しい。だからって女性が男物の水着を物色するのは、如何なものか。「まあその、いい水着が見つかるといいですね。すいません。これとこれでいいや。試着室お借りします」

「どうぞー」

【シャツ】

「……………」

「……………」

「……………」

つい最近、これと似たような事をした記憶がある。確か大浴場だ。デジャブとはこの事か。一つの試着室の中で、一夏とシャルルと一緒にいた。しかもシャルルは水着を試着している。

狭い試着室の中に男女が入っている。その姿は、背後に偶然いた織斑先生と山田先生にもばっちりと見られていた。山田先生の顔が赤く染まる。

「……………失礼」

ユーゴがそう言うのとカーテンを何事もなかったかの様に閉める。勿論、直ぐに織斑先生が全開に開け放ったのだが。

「何をしている……………」

そして現在、一夏とシャルルはIS学園の制服で店の床に正座をして、山田先生のお説教を受けていた。店にとっても迷惑である。

「いいですか二人とも！いくらクラスメイトとはいえ、ケジメはつけなければいけません！試着室に男女が一緒に入るなんて、駄目です！！」

「ちよつとユーゴ。あれ何よ？」

鈴とセシリアがこちらの騒ぎに気づき、合流してきた。物陰から先生方二人を指さすと、セシリア達は納得した。

「そういえば、ラウラは？」

「ああ。ラウラなら見かけたけど、なんか緊急事態発生とか言って店

の外に出たわよ」

「緊急事態・・・ねえ」

こうしてユーゴは、山田先生のお説教が聞こえる試着室の中で、水着の試着を開始した。

なお、結果は無難なメ●ズの海パンに決定したらしい。

第16話 女子の思惑 底知れず

さて、ユーゴと分かれたラウラはどうだったろうか？時間を少し遡らせよう。丁度、山田先生達と遭遇したあたりの時間だ。

「水着とは、こんなにも種類があるのか・・・」

ラウラは現在、水着の総量に圧倒されていた。胸を乗せるタイプや定番のビキニなど、水着の種類は豊富である。この中から一つ選ぶのだ。そんな中、ある人達の会話を聞いてしまった。

「しつかり気合い入れて選ばなくっちゃね〜」

「似合わない水着着ていたら、一発で彼氏に嫌われちゃうもの」

「他の事が全部1000点の加点方でも、水着がだめじゃ結局×0になっちゃうもんねえ」

その言葉が、彼女の中で電流を走らせた。いや、電流なんて生易しいものではない。リボルバー拳銃で撃ち抜かれた衝撃である。水着など、たかが特殊な布程度感覚。それが崩壊した瞬間である。

（私は先程、ユーゴの目の前で、水着如きと言ってしまった・・・）

いけない。このままではいけない。ラウラは専用の通信機を取り出すと、ある人物へと電話した。自分に日本の知識を教えた、最も信頼できる人物に。

「クラリツサ、私だ。緊急事態発生」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。何か問題が発生したのですか？」

ドイツ軍。シュヴァルツェ・ハーゼ、通称黒うさぎ隊。ドイツ軍が保有する10機のISのうち3機が配属されるといった特殊部隊である。そして通信相手はこの副隊長。クラリツサ・ハルフオーフだ。

「うむ。白銀ユーゴの事についてだな」

「ああ。織斑一夏に次ぐ、男でありながらISを運用する人物でアステカの祭壇を持つ、隊長が好意を寄せている彼の事ですね」

「そうだ。お前が教えてくれた所謂、私の嫁だ」

お前が教えたのか。文法的に間違ってるため、お前の婿が正しいな

どと言ってはいけない。

「実は今度、臨海学校というものに行く事になったのだが、どの様な水着を選べば良いのか、選択基準が分からない。そちらの指示を仰ぎたいのだが」

「了解しました。この黒うさぎ隊は、常に隊長と共にあります。因みに、現在隊長が所持している装備は？」

「学校指定の水着が一着。だが装備には多少の難ありだ。これの多少サイズの大きい版が良いのだろうか？」

「なっ！何を馬鹿な事を！」

通信相手のクラリツサが激昂した。

「確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね!?それはそれで一部のマニアからの受けは悪く無いでしょう。だが！しかしそれでは・・・！」

「それでは？」

「色物の域を出ない!!」

「おおーっ！」

はつきりと断言したその言葉に、部下達が顔を合わせ、喜びを語り合っている。部下たちには現在クラリツサが、覇者のオーラを纏っている様に見える。

「流石は黒うさぎ隊の副隊長！」

「伊達に日本の漫画やアニメを愛好しておられない！」

・・・誤解の内容に言っておくが、彼女の得た知識の大半は漫画やアニメなどのサブカルチャーである。漫画やアニメ、これら全てが正しい日本知識ではない点を、留意しておこう。

まあ本人がその気になっているのなら、それで良いのかもしれないが。

こうきてラウラは、クラリツサに言われた通り、ある水着を購入したのだった。

さて、一方のこちらはようやく山田先生のお説教から解放された一

夏とシャルロットである。

「ごめんね一夏。僕のせいで一夏まで怒られて」

「気にすんなよ。それより、そろそろ昼飯の時間だな。何か食事でも食べるか？」

「え!?!食事!!それも、僕と一夏!?!」

シャルルの顔が赤くなる。だが先程試着室での赤さとは違う、赤さである。

「まあそうなるな。もしかして、誰かと一緒に食べる約束とかあるのか?」

「無い!無いよ!だつ、だつたら・・・」

「あらあ!一夏さん。偶然ですわねえ」

「一夏ア!それにシャルロット。なーにしてるの?」

一夏達の元に、いいとこブレイカー2号機3号機がやってきた。尚、1号機は無論ユーゴだ。

「げっ!セシリア。それに鈴」

「あらあシャルロットさん。何が「げっ?」なのですか?」

「なっ!何でもないよ!」

「セシリア。それに鈴も。二人も買い物か?」

「ええ。私達、偶然ここに来ておりまして、買い物を終えたところです。それで今から偶然昼食を摂ろうとしておりましたの」

「よかったら一夏達も一緒に食べない?この店付近にいるユーゴとラウラも誘うわよ?」

「ああ。そうだな。食事は大勢で食べた方が美味しいしな。シャルルもそれでいいよな?」

「うっ、うん。勿論。大歓迎だよ。アハハハハ」

（ううっ。やつぱり、邪魔されたあ・・・）

（本当は私と二人きりが良いのですが、背に腹はかえられませんわ!とにかく今は、お二人を二人つきりさせてはいけません!）

（あんと一緒にいいとかはともかく、その点は認めるわ。絶対に二人つきりにさせるもんですか!）

女性の思惑は実に恐ろしい。こうして買い物を終えたユーゴとラ

ウラと合流し、近くにあったファミリーレストランへと足を進めていた。すると入り口の看板メニューを見ている知った人物がいた。

「箒？箒もこの店で食べるのか？」

「お、一夏よ。奇遇だな、こんな所にいるとは」

店の前に何と箒がいた。看板メニューで何を頼むのか、考えているらしい。彼女は本当に偶然であったのだが、今後の行動の予想は出来た。

案の定、一夏のパーティーを見た箒がこのメンバーに加わった。こうして7人がイタリア料理店での食事が始まった。

「このピザ結構美味いぞ！みんなも食べてみるよ！」

「おい！その一切れは私が目をつけていた一切れだぞ！」

「何言ってるのよ！アタシの方が先に目をつけたわよ！」

「これからドリンクバーに行きますが、何方か、リクエストはございますか？」

「あつ。じゃあ僕、緑茶を頼みたいな」

一夏達のテーブルはとても賑やかな様子であった。まあ少なくとも彼女達が静かに食事をする風景は、あまり予想できないのだが。

「全く。静かに食事をする事も出来んのか」

「賑やかな方が楽しいって言うし、仕方ないだろうな」

テーブル席の都合上、ユーゴとラウラは隣のテーブル席であった。互いに頼むのがコーヒーにスパゲッティと、向こうとは違いこじんまりとしている

コーヒーを飲みながらラックに置かれた新聞をユーゴが読んでいる。するとある記事で露骨に嫌な顔をしたかと思うと、そのページを直ぐにめくり、見なかった事にした。

そのページに書かれた記事。

「現総理大臣、山鳩秀吉。疑惑について」

(国家権力が・・・)

そして皆が食事を終わり、モノレールに乗りIS学園に戻る事になった。ホームで待っていたさなか、突然ユーゴが走り出した。

「みんなは先に戻ってくれ。俺は少し寄りたい場所がある」

「寄りたい場所？何処だ？」

「まあ、個人的な用事だ。先に戻っててくれ」

そう言うくとユーゴはそくさとモノレールの駅からユーゴは去っていった。彼がホームを去るとの同時に、モノレールは駅へとやって来た。一夏達が乗り込むが、ラウラの足はホームで止まっていた。

「あの様子、少し気になるな。私も後を付けてみよう」

ラウラも、ユーゴの後に続く形でホームを後にした。

「どなたか、ユーゴさんやラウラさんと一緒に行かれるのもよろしいのですよ!？」

((念の為、不確定要素は減らしておかないと))

彼女達の駆け引きはこんな所でも行われていた。心休まる時はないのだろうか？まもなく扉が閉まると言うアナウンスが聞こえてきたその時だった。

「やべっ！買い忘れがあった。待ってくれラウラ！俺も一緒に行くよ」

「「ええっ!!」」

突然一夏が立ち上がり、モノレールから降りた。そしてあっさり言われたその言葉に四人の顔が青ざめる。

「待て！一夏が行くなら、私も行くぞ!!」

「私も！買い忘れがありましたわ!」

「アタシだって！その・・・ペン買い忘れちゃった!」

「僕も、その・・・忘れ物しちゃった!」

これが一夏大好き病か。四人がモノレールから閉まる扉から慌て駆け降りてきた。皆さんは駆け降りはやめてくださいね。

こうして一夏を半ば強引に連れ彼女達が本日二度目の尾行を始めた。対象のユーゴは気づいてないらしい。

彼はその足をショッピングモール街から、中央の大通りへと進めた。やがてユーゴは一つの大きな病院の中へと入っていった。一夏達もそれに続く。

「病院？もしかしてユーゴ、何処か体調が悪いのか？」

彼は1階の花屋で花束を購入すると、エレベーターに乗り込んだ。エレベーターは5階に止まる。その直後に下へ降りてきた事を考えるに、ユーゴは5階で降りたらしい。

ラウラは隣のエレベーターで、残りのメンバーは階段で5階を目指した。受付にユーゴについて聞くと、503号室の部屋を案内された。

だが、辿り着いた先の扉には面会謝絶という立札がかけられた。

「ここにユーゴがいるのか？」

「でも、面会謝絶だよな？」

もう一度受け付けに聞きに行こうとしたその時だ。

「こんな時間に面会の方ですか？」

不意にかけられた声で一夏達が驚き振り返る。そこには1人の看護師がおり、一夏達を怪訝そうに見ていた。

「あつーいえ、友達を待ってるんです」

「あつーすみません！白銀君のお友達ですか!?私、503号室の患者さんの担当看護師の、宮野京子といます」

するとその言葉に反応したのか、入り口の扉が開かれた。そこにはユーゴがいる。見るからに不機嫌そうに一夏達を見た。

「お前達、ここで何をしてるんだ？」

「その、悪かった。ついでに覗いてやろうとか思つて・・・」

「まあいい。騒がないなら入れよ」

503号室に招かれた6人。そこで見たのは、生命維持装置などの機械囲まれた、1人の少女であった。点滴やペースメーカーなどの医療器具に繋がれている。

何より、頬にはユーゴと同じ様にマーカが、アステカの祭壇が刻印されている。

「俺の知り合いの方の友人だ。ある事故に巻き込まれて、未だに意識が戻らないんだ。俺がIS学園に通うまでは、ただ一人の友達だった」

「そうか。安直な言葉しか言えないけど、早く目覚めるといいな」

暫くの間、皆は黙っていた。するとユーゴが何かのカードを取り出

した。しわくちやになっている一枚のジョーカー。彼がお守り代わりにずっと閉まっている切り札。それは直ぐに終われた。

やがてユーゴがこちらを振り返り、歩き出した。

「じゃあ、とつととIS学園に戻るか。見舞いも終わったし。ほら出てった出てった！」

普段通りの口調でユーゴが一夏達を外へと急かす。振り返り、最後にユーゴが部屋を出る前に、寝ている少女に一言。

「また来るからな、奏……」

その後、皆が病院を後にしてモノレールに乗り、IS学園に戻っていった。

「……今日は、楽しかったぜ」

「ユーゴ？今なんて？」

「何でもない。気にするな」

その言葉を最後に、ユーゴは何も言わなくなった。モノレールを降り、IS学園に向かって歩いていると、駅の入り口に織斑先生と出会った。その隣には山田先生もいる。

しかし午前中に出会った時と雰囲気の違い、その表情は真剣なものであった。

「おいユーゴ。お前に客が来ている」

「客？如月さんですか？」

「……山鳩秀吉だ総理大臣。しかも、警官まで連れてきている。お前を名指しでな」

次の瞬間、ユーゴの表情が怒りで支配されたのは、言うまでもない。黙ってそのまま、客の待ち受ける談話室へと足を進めた。

第17話 臨海学校での再会

「ガラッ！」

扉が壊れてもおおしくない勢いで開け放たれる。学園などでなければ間違いなく扉を蹴飛ばしていただろう。

「来たか」

「・・・ちっ！」

いる。目の前にはスーツを着込んだ嫌な奴がいる。嫌がらせの様に聞こえる舌打ちをした後、椅子に腰掛ける。その背後には織斑先生達が、扉の向こう側では一夏達が聞き耳を立てている。

「・・・何しにきた。宇宙人総理」

「山鳩総理だ。知ってる人から怒られるぞ」

「何でもいい。何しに来たかって聞いてんだよ」

ユーゴは総理に一切目もくれずに、座っていた。その手は腰周りへと少し伸ばしている。

「では簡潔に話しましょう。白銀ユーゴ。お前に傷害の容疑がかけられている。その件に関して、任意で事情を聞かせてもらおう」

「失礼ですが、この学園の生徒に対してその様な干渉は、アラスカ条約で禁止されているはずですが？」

「・・・確かにIS学園にはその様な規定が定められている。だがそれはIS学園内での問題に対してであって、彼がIS学園の外で問題を起こしたのなら話は別だ」

「まず白銀君。初めに聞きたいことがある。君は、蒼炎の狩人という犯罪者を知っているかな？」

一瞬ユーゴの身体が硬直する。直ぐにそれを元に戻す。

「・・・聞いたことはありません」

ユーゴは一切表情も声色も変える事なく、当たり前会話のように答える。その心中は決して穏やかなものではない中で。

「巷で噂されるテロリストだが、最近の活動などが音沙汰が突然なくなってる。最後にこちらで確認されたのが、以前この学園が謎のIS

に襲撃された時なんだ」

「犯罪が無くなるのは良い事じゃないですか」

「そういえば君の I S は、多少の違いこそ見られるが、蒼炎の狩人の使っていた I S によく似ているね。マントがある点以外はそっくりだ。そういえば君がこの学校に来たのは、その事件があったすぐ後だったよね?」

「………偶然です」

「便利だよね。偶然って。その一言でこの世の全てが片付けられたらいいのに」

「……次にだ。最近、一つの I S パーツの密売組織が壊滅した。そして彼等の所持品などを検閲した際に、この様な写真が出たのだよ。話を聞くにこの写真は、以前蒼炎の狩人によつて襲撃された際、偶然撮った一枚と言っていたよ」

「百聞は一見にしかず。これを見てほしい」

そこに置かれた写真。それはフードを被った人物が、ボスと思われる人物を締め上げている際の写真であった。顔こそ隠れて見えないが、頬などの下部分は何とか見れる状態である。

横目で見たそれには、頬にある黄色いラインがよく写っていた。

(これは、俺が以前潰した裏の売人達か)

わからない人は第一話を読み返してみよう!この写真のアングルから見るに、近くに倒れていた部下の一人が偶然撮ったのだろう。

「この頬にある刺青の様な痕。黄色で特徴的です。そう言えば、君にも良く似た痕がよく似た場所に刻印されていますね。その服、フードもついていらつしやる。よければつけてみなさい。似合うと思いますよ。写真の人物みたいに」

「………」

「今度は偶然と言わないのかい?」

「つまり刑事さん達は俺が、蒼炎の狩人って言いたい訳?」

「よくわかってるじゃないか。一体お前の身体、どれ程の錆や埃が出てくるか。是非、詳しく調べたいものだな」

警官がユーゴの手を掴む。しかしその手はあっさり払い除けられ

た。

「待てよ。さっきの話で証明されたのは、あくまで俺と蒼炎の狩人がよく似ているという内容だけだ。それじゃ俺が蒼炎の狩人である決定的な証拠にはならない筈だ」

「それを確かめる為に貴様を拘束すると言っているのだ」

「ち、ちよつと警官さん！そこまでしなくても！」

「無駄ですよ。山田先生」

周囲の警官が立ち上がり、ユーゴの周囲を包囲した。その手には拳銃が握られており、銃口はユーゴへと向けられている。山田先生が止めようとするも、ユーゴがそれを静止させた。

「やってみろよ。でもやったら最後、ここから無傷で帰れると思うなよ」

「馬鹿者共め。両方共に落ち着け」

すると織斑先生が話に入ってきた。的確なアシストである。これ以上続いていれば最悪血が流れた可能性だってある。

「警官の方々。申し訳ありませんが、本日はお引き取りください。こちらの要件に関しては理解しました。こちらでも彼にこの件を聞いてみます。ここはお引き取りを」

「教員などに用はない！我々は白銀ユーゴ容疑者に・・・」

「これ以上確かな証拠もない中で、私の生徒を疑うのでしたら、アラスカ条約違反という事もあり、この件を上層部で取り扱わねばなりません。その事は、当然ご存知ですね」

「・・・くっ！」

流石に国際問題になれば、自身の立場や信頼などにも影響が出る。「分かりました。本日はお引き取りしましょう。ですが白銀君。これだけは言っておきます。君の事を不審に思う存在は、数多くいるんですよ。精々気をつけるんですね」

一応あくまで任意の事情聴取である為、本人が断ってる以上踏み込む事が許されなくなってしまうた。

「では我々はこれで。また会いましょうか。白銀ユーゴ君」

「・・・てめえまで来る必要があったのかよ。お偉い総理大臣さまがよ」

「・・・何。久しぶりに君の元気な姿が見たくなったのだよ。ずいぶん大きく元気になって・・・健やかな育ちに安心したよ」

一見相手を気遣うその言葉。僅かながら緩んだユーゴの警戒心。だが次の言葉が、ユーゴの中の怒りのマグマを一気に噴火させた。

「ところで、ご家族やお友達の方々は元気かな？たまには顔を出してみたらどうかかな？」

【ガバツ！】

「やめろユーゴ!!」

織斑先生がユーゴの腕を強く掴む。彼の腕は腰に備えたナイフへと伸びており、今にも取り出そうとしていた。その力は織斑先生が全力で掴まなければ、すぐに振り解ける程であった。

ユーゴが憎々しげに相手を睨みつける。相手は全く意に介してないらしいが。

「では本日はこれで。また会う機会がありましたら、その時までさようなら」

「その汚いツラを二度と俺の前に出すな。もし出したら・・・ぶち殺す・・・」

総理の背中を憎々しげに睨みつける。そして一夏達が慌てて近くの室内に隠れる。少しして、総理大臣と警官達は帰っていった。ユーゴは総理達が部屋から出るなり、走ってその場を後にした。その日、彼が部屋へと戻る事はなかった。

それから時間は流れ、遂に念願のあの日がやって来た。

「青い海！」

「白い砂浜！」

「輝く太陽！」

「二海だあ!!!」

臨海学校当日、初日は自由行動であり、生徒達は思い思いに海めがけて駆け出していた。

「今は11時です。夕方までは自由行動、夕食までには旅館に戻ることに！良いですね!?!」

「はーいーい」

山田先生の返事に二つ返事で答える生徒達。楽しみを前にお預けにされては堪らない。

「ねえおりむー。私達と一緒に遊ぼく？」

「ビーチバレーしようよ」

クラスメイトからのお誘い。

「いいぜ。何処でや・・・」

「おおーっ！高い高い！遠くまでよく見えるわよ！」

鈴が一夏に飛びかかり、おんぶするような形となった。一夏が振り解こうとするも、しがみついて離れようとしなない。

「なっ！何をしていたらっしやいますの!？」

するとそこへセシリアがやって来た。手にはビーチパラソルとバックを抱えている。

「見れば分かるでしょう？移動監視塔ごっこよ」

「一夏さん！ここに来る前に約束したことをお忘れですか!？」

そう言うとセシリアはビーチパラソルを砂浜に差し込み、マットを敷いて横たわる。その隣には、何かしらの容器を置いて。

「さあ一夏さん。お願いしますわ」

「アンタこそ！一夏に何させる気よ！」

「見ての通り、サンオイルを塗って頂くのですわ」

「なっ！なんだってえ!!」

サンオイルを塗る。コレは合法的にJKの生肌に触れる事が出来る。一夏自身も、バスの中で約束してた以上、断るわけにもいかない。

「わかったよ・・・」

観念したらしく、サンオイルのボトルを手取る。一夏が手にサンオイルを塗って、セシリアの腰に恐る恐る触れる。するとセシリアの身体が突然跳ねた。

「きゃ?！」

「うおっ！どうした!？」

「一夏さん。せめて手で温めてから塗って下さいな！」

「わっ、悪い。こういうことするの初めてなもんで・・・これくらいで

いいか？」

手の中でこねくり回したジェルを付着させる。今度は跳ねずにゆったりと寛いでいるあたり、丁度良い温度らしい。時々セシリアから喘ぎ声のような息遣いが聞こえてくる。

「うわぁ・・・気持ち良さそう」

「こつちまでドキドキしちゃう」

この作品は健全です。やがて一夏は一通り背中にオイルを塗り終えた。

「さてと。背中だけでいいんだよな」

「あの・・・せっかくですし、足とお尻も、お願いしたいのですが」

「・・・ええっ!？」

「そういう事なら！アタシがやってあげるよ!!」

そう言うのと鈴がくすぐりを開始した。マットの上を転がるセシリアだが、その最中なんと水着の上部分が取れてしまった。

「キヤアアアッ!!」

腕だけISを展開したセシリアが反射的に殴りかかる。咄嗟に一夏が避けたその拳は背後の鈴に命中し、ブイのある沖合へと吹き飛ばされた。

「ちよー!鈴!!」

慌てて一夏が海に飛び込み、鈴を回収しに泳ぎに行く。鈴を抱えると、陸地へと戻ってきた。

「鈴！大丈夫か!？」

「だ、大丈夫よ。問題ない」

事故とはいえ碌に準備運動せずに海の中へと突っ込んだのだ。身体の一部が攣つてもおかしくはない。

「すいません鈴さん！・・・ここは私が責任を持って！ホテルまでお連れしますわ!!鷹月さんもお手伝いください!」

「ええっ！わかったわ!」

そう言い両側からがっちりと腕を掴む。鈴はジタバタ抵抗しているが効果は薄い。

「ちよつと！アタシは本当に大丈夫だってちよつと！腕離して！ちよつ！助けて一夏！一夏ア!!」

こうして鈴はセシリアと鷹月さんの二人によって強制連行されて行った。それを一夏は呆気に取られながら見ていた。

「・・・まあ、あれだけ元気なら大丈夫だな」

「ああ一夏！ここにいたんだ」

「おつ、シャル・・・っ!？」

声のした方にシャルルはいた。試着室で着ていた水着を身につけている。だが一夏が驚いた原因はその隣だ。シャルルの隣にミイラのお化けが立っているではないか

「なんだ！そのバスタオルお化けは!？」

「・・・ねえ一夏。それよりユーゴは？一緒じゃないの?」

「いや、ユーゴならここについて直ぐにどっか消えたぜ。旅行鞆を宿にも入れずに背負ってさ」

その頃、ユーゴは海の家で時計を見ながら何かを待っていた。やがてその長針と短針が12時に重なり合った。

すると近くの砂浜にアイスクリームの販売車両が訪れた。それを見たユーゴはバックを背負い直して駆け出し、カウンターに乗り込んで一言。

「すみません！バニラとチョコのダブル下さい！」

「・・・ふっ!」

すると店員は失笑したかと思うと元気よく返事をした。

「分かりました！バニラとチョコのダブルですね!・・・なーんてな。

久しぶりだな。ユーゴ」

「こうして会うのは久しぶりですね。如月さん」

その日、ユーゴはあの出来事以来久しぶりに笑った。心の底から信用できるこの人に出会えた事で。

第18話 ポーカー勝負

「奏さん。入りますよ」

とある病院の一室。503号室。決して応える事のない返事を、彼女は少し期待した。

「奏さん。今日も点滴の交換に来ましたよ」

その病人の担当看護師である宮野京子はいつもと同じ様に病人の点滴交換に来ていた。ビニール状の点滴袋を慣れた手つきで取り替える。

(・・・あれ？お花が添えられてる)

ふと隣の台を見る。置かれた花瓶の中に白いエーデルワイスが一輪だけ備えられていた。そして花瓶の下には添えるやつに、三つ葉のクローバーが置かれていた。

どちらも昨日見た限りでは、病室に無かった花である。

(どなたかお見舞いにこれたのでしょうか？あら？これは)

よく見ると花瓶はもう一つ置かれていた。そこには白い菊が飾られていた。

(病院で菊の花だなんて、縁起が悪いですね)

場所は変わってアイスクリーム移動販売の車。その車内には2人の男がいる。片方は水着に着替えているが、まだ海などには入っていない。もう片方はエプロンをしており、販売員という風格を醸し出していた。

「例の一件はこちらでも情報は集まっている。VTシステムの発動にクイーンの出場。そして非公式にして非公開な山鳩のIS学園の視察。いよいよ連中もこつちに何かしら仕掛けてきたな」

如月さんがPCを見ながら話している。しかし話し相手のユーゴ

は何処か上の空であった。

「……………」

「……ユーゴ?」

彼は販売する場所から海を眺めていた。その目は遠くにいるIS学園のクラスメイト達を見ていた。

「なーに見てんだ。このムツツリすけべ野郎」

右耳をぐいぐいと引つ張る。慌てて如月さんの方を振り返った。

「いや、なんて言うかさ。あの光景が凄い平穩に見えてさ……」

「ユーゴ?お前いきなり何言って」

「すいませーん」

突然の来客。これまでの軽口から一転、如月さんは慌てて営業スマイルを作り、受け答えをする

「いらつしやいませ。ご注文をお伺いします。って君達か」

ガラスケースから顔を上げたその面は、一夏達の物であった。ユーゴも肩越しにそちらを向いた。

「あれ、一夏。それに山田先生達。一体どうしたんだ?」

「何って、そろそろ昼時で小腹が空いてさ。海の家に来てみたら、お前がアイス屋さんに居たから声かけたんだよ。ところで、この人って確か」

「如月慎吾。俺の所属する会社の社長さんだよ」

「如月慎吾だ。うちのユーゴがお世話になって。今は資金集めの為に副業のアイス売りさ。どうだい?今なら少し安くしとくよ。それにしけも本当に皆さん、別嬪さんですねえ。別嬪さんが一人、二人、三……ミイラが一人」

当たり前前の様に並んでいる為気づかなかったが、一夏たちの隣にはバスタオルお化けが当たり前前の様に並んでいた。

「なんだこのミイラは?」

「ほら、ユーゴに見せる為に着替えたんでしょ」

シャルルが耳打つ。その言葉にバスタオルお化けは動揺している。

「待て!私にも、心の準備というものがあって……」

「え?その声、ラウラか!?!」

普段ある威圧的な雰囲気、その言葉にはなかった。だが今の声は間違いなくラウラの声であった。少しした後、覚悟を決めたのかバスタオルを一気に剥ぎ取った。

「……………」

「おいユーゴ。その…どうだ？」

「あ、いや、その……………」

そこにいたラウラは、スクール水着ではなく黒ビキニを着ていた。あの後クラリツサ達にアドバイスされ、最終的にこれを選んだらしい。

「…………可愛いんじゃないか？」

「!!？」

単純な褒め言葉である。だからこそ真っ直ぐな貫きがある。ラウラは赤面した後、砂浜へと倒れ伏した。

すると慌てて如月さんがユーゴの首根っこを掴んだ。

「おいユーゴ！ひよつとして、こっつ、これか!？」

カウンタ―下にユーゴをしゃがませると、如月さんがこっそりと小指を立てた。

「…………何それ小指？爪？」

「その、あれだ。異性交遊の関係なのか？それとも、何か弱みを握ってこき使っているのか？」

「…………お前は何を言っている」

流石にその単語にはユーゴも軽く引いている。

「俺はお前を昔から見てきた。だからこそ言える！お前が女友達を作るなんて月が落ちる以上にありえない事なんだ！どんな催眠術を使って彼女を堕とした？」

「……………むかつく」

とりあえず自分が侮辱されている事は何となく理解ができる。すると近くの棚に置かれたメガホンを手に取り、大きく息を吸い込む。

「おーいみんなー!!!このアイスクリーム屋さん、今なら、レギュラーダブルが半額の値段だつて!!」

「なつーばつー馬鹿！何を言っているんだ！材料費を知らんのか！」

しかし時すでに遅し。デザート用に別腹を持っている女子達が、この話を逃すわけがなかった。長蛇の列が既に出来ている。そこにはセシリアや鈴もいた。

「・・・あーっ！しょうがねえ！こうなったら出血大サービスだ!!今から数時間限定の割引セールだよ!!ユーゴ!!お前も手伝え!!」

その後も、一夏達を強引に協力させ、客の対応に当てていた。丁度昼時という事もあり皆デザートとしてアイスを買いきてきた。客がくる度に如月さんの顔が泣いているように見えたが気のせいだろう。

「ふうっ。客波は一旦落ち着いたらいいな。この出費は痛いなあ」

一通り客並みが落ち着き、軽口を言いながら勘定を計算していた最中、客が1人やってきた。黒いサングラスに麦わら帽子と、これでもかと言わんばかりに夏を堪能している様に見える。

「レギュラーダブルを一つ」

「レギュラーダブルですね。今なら割り引き時間であり、定価の半額の350円になります。種類は何にしますか?」

「待て。ただ買うというのは面白みに欠ける。ここは一つ、コレで勝負して決めよう」

そう言う男は懐から何かを取り出した。それはトランプの束であった。百均などで売ってる様なケースに入っている。

(トランプ?)

「おいおいあんた。一体何をするつもりだい?」

訝しげにそのトランプを見ながら如月さんが言う。

「簡単なギャンブルだ。これでポーカー勝負を行う。私が買ったら無料でレギュラーダブルを頂く。もし私が負けたらレギュラーダブル本来の値段を支払おう」

「ちよーちよつとお客さん!そんな急で勝手な」

「分かった。その勝負受けるよ」

「おいユーゴ!なんで勝負なんか受けるんだ!」

「わからない。でも、何故か戦ってみたいって思う」

そう言い両者ともに近くの椅子へと腰掛ける。周りにはIS学園の生徒達も集まっている。

「本来不正が懸念される為に望ましくないが、この状況で行おう。周囲の人達はギャラリーであり、この勝負の証人だ。手札の不正操作が行われてない事を証明する」

「勝負内容は簡単だ。強い役を作る一本勝負。交換は2回だ」

「分かった。早く始めようか。誰かカードをカットしてくれ」

「じゃあ、私が行いますね」

山田先生がディーラーとして、それぞれに5枚の手札が配られた。素早く手元に寄せ、一気に確認する。

(弱いな。4のスリーカードはまだしも、残りは5と9のブタ)

ユーゴが相手に気づかれぬ様に視線を一瞬上げる。サングラスをかけており表情は読み取れないが、その眼をユーゴは予想した。

(この男・・・やり手だ。カードを見る目になんの変化もない)

男は手札を全て同じ様に見ている。ほんの僅かな変化も見せない。ただ手札から導かれる結論だけを見ていた。すると男は札を全て板状へと置いた。

「私は5枚全てを戻す。お前は どうする」

「おぉーっ!!」

その行動にギャラリーがざわめく。その意図は判らない。良い札なのに戻すとか、そういうのが分かつては興奮めだ。

(5枚。普通に考えればノーハンド。だが問題はそこじゃない。この男がそこから引く札だ。その役次第で・・・)

「・・・5枚！俺の持つ全部の札を戻す！」

コレに周囲は再び騒めく。男の方は僅かに頬が緩み、笑みを浮かべている。

「戦いにきたな。今ある札をすべて戻すとは」

「お前から勝ちに行く強さを感じた。ならこっちはその上を行くしかない。危険な橋の一つくらい渡ろうとしなくてどうする」

「・・・面白い。その理想が実現できるか、だだの無謀な蛮勇か。それは引き札が応える」

互いに山札から5枚全てを引きなおす。慣れた手つきで互いに手繰り寄せ、その札の見たユーゴの表情が一気に強張った。

(10と8のツーペアだと！先程の役より悪化している)

「一瞬だけ見せたその表情。どうやら蛮勇だったようだな。交換可能なのはあと一回。私は再び5枚、全ての札を戻す」

相手は先程と同じ手つきで札を棄て、山札から補充する。そしては5枚見定める。当たり前のように行われた動作が、今のユーゴに焦りを生ませた。

(どうする。ここは戻すべきか・・・)

(だが、そもそも5枚交換で役を作る事自体、かなり難易度の高い所業・・・)

「・・・一枚だ。コレを交換する」

「チキンだな」

「・・・」

何も言い返せない。煽りを受けながらも捨て札置き場に捨て、山札から一枚引く。この一枚で実質的に、勝てるかどうかが決まる。引こうとする手が僅かながらに震える。

(・・・いや、祈ったところで一番上の札は変わらない)

勢いよく引いた札、それを持つ手は未だに震えている。薄目を開き、その札を見た。

「・・・ふっ」

その手札を見ていた背後の人達と同じく、ユーゴの顔に笑みが浮かんだ。手の震えも収まる程に。

「どうやら切り札は、最後に俺の元にやって来るみたいだな」

相手に見せたその一枚は、切り札であった。

「引いた札はジョーカー！よってフルハウスが成立!!」

ジョーカーが混ざった事により、フルハウスは成立した。相手は5枚戻している。フルハウス以上が作れる可能性はそうそうない。

(ふうっ。とりあえず勝ったか)

「・・・勝ったと思っっているその顔。本当の戦いでは死に直結する」

次の瞬間、喜びは絶望へと変わった。相手の手札にある4枚の王によって。

「キングの4カード。私の勝ちだな」

「ばっ！バカな!!」

あの時、5枚全てを捨てそこから引いた札で、キングを4枚揃えた。現実味があまりにもない。だが不正はなかった。それはギャラリー達が物語っている。

「抹茶とチョコミントのレギュラーダブルを頂こう」

唾然としていた如月さんだが、注文を受けて直ぐに用意に取り掛かった。アイスとコーンを受け取ると、踵を返し戻ろうとした。しかし数歩程歩いたところで、男はこちらを振り返った。

「・・・私ならあの場で、再び5枚全ての札を交換していた」

「何?」

「先程の戦い。あの土壇場でジョーカーを引き当てた事は、称賛に値する。だがお前は一枚戻した際、フルハウスの役で勝てるかと踏んだ。その瞬間にお前の敗北は決定した」

「お前は危険な橋を渡ったつもりでいるだろうが!私から言わせれば、危険な橋を渡ったのではなく、ただ入り口手前で足踏みに過ぎん!!」

その言葉に、ユーゴの中の何かにヒビが入った。

「人を待たせているのでな、これで失礼する。そのトランプは貴様に譲ろう」

言いたいことだけ言うと男は黙って砂浜の奥へと消えていった。なんとも言えない空気の中で、静かにユーゴが札を片そうとした時、ある山に目が止まった。それは捨て札置き場だ。

山札とは別のそれを何気なく数枚ほどめくってみる。めくつていくたびにユーゴの表情が険しいものに変化する。

(まさか!嘘だ!嘘だ!!)

捨て札置き場に置かれた16枚の札。自分の捨てた札は覚えている。1回目2回目のどちらも5枚ずつ相手は捨てた為、その捨てた時の手札も、容易に作る事が出来た。

そして、ある事実が判明した。

(あの男が2回捨てたこの札!それぞれ1回目にフルハウス、2回目にフォーカードが出来てる!)

「俺は、負けていたのか・・・初めから・・・」

ユーゴが力無く、ただその場に崩れ落ちた。気がつくとも意識のうちに手札に勝負した時の札を持っていた。どうやらあの後ずっと茫然自失になっていたらしい。

「よお。やつとこっちに戻ってきたか」

隣では如月さんがPCをいじっていた。既に当たりは夕焼け色が滲み出ていた。如月さんがユーゴの握っていた手札以外は片付けたらしい。

「みんなはビーチバレーに行ったよ。あの時のお前には、なんて声かけてやればいいか、分からなかったんだろうな」

すると彼はPCである画像を出した。それは有名なTCGのカードイラストであった。

「そういえばお前は昔から、ランプやUNOとかのカードゲームが好きだったな。特にTCGなんねカッコいいイラストのカードを集めて、自分のデッキを組んで」

「ねえ如月さん・・・父さんに母さんの2人だけど、どうしてる?」

その言葉に如月さんの動作が硬直する。手にしたマウスは手の痙攣に合わせる様に震え、カチャカチャと台と擦れ合っている。その手を強引に抑えつけた。

「・・・2人は今、どうしてる?」

先程と同じ無気力な言葉。それで繰り返された。

「・・・・・・・・2人とも、元気だぜ」

「そう・・・如月さん。全部終わったら、また元に戻れるよね。俺も奏も、如月さんも。あの頃みたいに、戻れるよね?」

その言葉は普段の彼からは想像もできない程、弱い口調であった。

「・・・きつと戻れるさ・・・みんなのどこに行つてこいよ。今ならまだ一試合くらいは参戦できると思うからさ。鞆は中身を抜いたら旅館に届けとく」

「・・・そうだな。じゃあ如月さん。こっちもこっちでやる事をやるので、如月さんの方もお願いします」

無理矢理だが元のテンション状態に戻す。そして車から飛び出す

なり、一夏たちのいる場所へと駆け出して行った。

「おーいみんな！俺も混ぜてくれー!!」

「・・・ガツシャーン!!」

ユーゴの姿が見えなくなった頃、如月さんは車を閉ざした。そして近くにある機材を出鱈目に放り投げた。PCは壊さずに一人、やり場のない怒りを辺りの物にぶつけて。

（元に戻る？まだそんな事を考えてんのかよ・・・戻れるわけねえだろ！それは他の誰でもない、お前自身が知ってるだろ!!だからお前は、蒼炎の狩人になったんじゃないのか!!?）

（・・・何を怒ってんだ。半分は俺の責任じゃないか。あいつを人から遠ざけさせてきた俺の・・・）

「コンコン」

「すいません。レギュラーのバニラを一つください」

「はーい、ただいまー!」

不用意だった。閉ざしたシャッターを開け、車窓を開く。そこには1人の女性がいた。砂浜に似合わない、黒スーツ姿。開けた瞬間に如月さんの顔つきが強張った。

「如月慎吾ですね。貴方と少し話したい事があるのですが、お時間はよろしいでしょうか？」

「嘘。なんでお前が、クイーン!!!」

「私がここにいる理由。それも含めてご説明いたします。とりあえず1人のお客として、バニラアイスを下さい」

その頃、とある岩場にて。ここでは箒と織斑先生が話をしていた。箒は今日の臨海学校において、何故か皆の前に現れなかった。

「気もそぞろという様子だな。何か心配事でもあるのか？」

「それは・・・」

「・・・束の事か・・・以前、束が私の前に現れたよ。白銀がIS学園に乱入して来た際だ。その時あいつは言っていた。お前にプレゼントがあるとな・・・明日は7月7日だ。もしかしたら、現れるかもな・・・戻るぞ」

「・・・はい」

2人が旅館へと戻ろうとした、その時であった。

（ん？あれは確か、白銀とポーカーをしていた奴だな。誰かと話しているのか？）

多少気になったが、2人とも深くは考えずにその足を旅館へと進めた。

そして箒達のいる岩場から少し離れた岩場。そこには一人の男がいた。すると男の背後から一人が歩いてきた。その手には齧りかけのコーンを持っている。

「待たせたな。ジャック」

「お気になさらず。対象との接触は如何でしたか？キング」

第19話 ひとときの談笑 前編

夕焼けに染まるビーチ。そこに2人が対峙していた。平気で済ました様な顔をする女性と、その女性に研ぎ澄ました殺意を向ける男性。

その名をクイーンと如月慎吾。この2人だ。

「……………」

「そんなに睨まないで下さい。私は殴り合いの喧嘩をしに来たのではないのですよ」

「……………」

「初めに言っておきましょう。7年前の事件。あれは確かに我々ネクロノミコンのが起こしました。ですが私達が起こしたのではないのですよ?」

「……………だから?俺からすればネクロノミコン全てが敵だ」

「貴方は黒人を差別する白人を見たら、全ての白人が黒人を差別すると考えるのですか?実態は違うでしょう?」

「そんな短絡的な理由で納得しろと?それにユーゴから聞いている。あの事件から一年間、お前達がユーゴや奏に何をしたのか」

「それについては何も言いません。貴方の怒りに無駄に油を注ぐだけなので」

「……………」

クイーンは手にしたアイスを満足げに食し、最後のコーンを紙ごと飲み込んだ。

「さて、そろそろ本題に移りましょう。どうです?白銀ユーゴと共に我々の元に来ませんか?言わばスカウトです」

「随分と笑えない、ふざけた冗談が好きなんだな」

「我々は常に、一流の人材を求めています。たとえ敵対する者であれど、優秀ならば自軍に加えたいものです……あの男、如月一馬の様に」

「!!?」

「貴方のお父さんは、それはそれは偉大な研究者でした。だからこそ周囲は、長男である貴方に父の面影を追う。そして貴方はそれに応えようとした」

「お前、一体どこまで……」

「さあ？どうでしょうね。それで答えは？」

「誘いに乗ると思う？」

「……何故拒むのですか？復讐の道を選んだ白銀はまだしも、妹さんの身体を考えれば、貴方にとって悪い条件ではないと思うのですが」「奏の事まで……」

「見つけたのはつい最近ですがね。ああ、ご安心下さい。何もこの件を断れば殺すなど、その様な無作法な真似は致しません。コレは上司から口酸っぱく言われているので。貴方達が此方とぶつかる時が来るまで、こちらからの直接的な手出しは控える様にと」

「……その言い方。まるで俺たちを今まで見逃していて、命令一つで直ぐにでもこちらを潰せるみたいな言い方をするじゃねえか」「まあ貴方達を見つけたのもつい最近ですがね。ですが我々がその気にさえなれば、たった2人の人間を消す事など造作もありません。実際際の赤子の手を捻る方がまだ手間がかかります」

「……」

「私はそろそろ帰りましょう。ご安心ください。夜襲などの無作法な真似はしませんよ。その証拠にここに来る前、私は彼女の病室を訪れ、お見舞いの花を添えました……コレから先は独り言として聞き流してください」

「私個人の考えとして、貴方達と衝突するのは望んでいません。普通ならこちらの圧勝ですが、仮にアステカの祭壇を使われればこちらの被害も大きくなりますし」

「ですが警告だけはさせて貰います。我々に楯突いたその時には、それなりの代償を支払って貰います。ではコレにて失礼」

一陣の風が吹きすさんだ。宙に舞う砂埃により、目を反射的に閉じる。次に目を開けると、そこに彼女の姿は何処にもなかった。まるで蜃気楼の様に消えてしまった。

「親父、やはり貴方は・・・」

何かを考えた後、如月さんは車を宿へと向けて走らせた。そして受け付けに荷物を渡した後、宿を後にして行った。

夜の旅館。今この旅館はI S学園の貸切状態となっている。通された広間は、座敷とテーブル席に分かれており、それぞれ生徒達が夕食を採っていた。

「この刺身、見た目以上に美味いぞ！」

刺身や小さな鍋など、出される料理はそれなりの豪華さと美味しさを両立していた。恐らく名旅館なのだろう。

「コレ、美味しそうだね」

「ちよーシャル！それ・・・」

「んんっ!？」

時すでに遅し。シャルルが涙目になりながら鼻を押さえている。彼女が食べた緑色の固形物の塊。分かりやすく言えばワサビだ。小山程盛られたそれを彼女は一気に食べてしまった。

「おいシャル!?大丈夫か!？」

「風味があつて・・・美味しいよ・・・」

「どこまで優等生だよ。ほらお茶」

一夏から渡された湯呑みの中身を飲み干す。それによって辛さは中和された様だ。

「ん?」

ふと隣を見る。隣ではセシリアが足をモジモジさせていた。正座は日本の伝統文化だ。イギリス人の彼女が慣れてないのも無理はない。

「大丈夫かセシリア? 正座が辛いならテーブル席に移動したらどうだい?」

「いえ! 大丈夫ですわ、

(この席を獲得するのに費やした労力に比べれば、コレくらい!)

セシリアがそんな事を考えているその頃のテーブル席。こちらではユーゴとラウラが食事をしていた。すると周囲の人達が何かを閃

いた様な顔をした。

「所でボーデヴィツヒさん。白銀君とは何処まで進んだの?!?」

突然の発言にラウラは咳き込む。

「ゴホッ!ゴホッ!いきなり何を言っているんだ!?

「いやだって、白昼堂々教室の真ん中でキスしてたし、続きが気になるじゃん」

「別に大した事などしていない。一緒のベットで一度寝ただけだ」

十分大した事である。ラウラのこの発言を周囲は聞き逃さなかった。

「ええっ?!?寝たの!?一緒に!?

「ねえ白銀君!その時どうだったの!?どうだったの!?

「どうって。あの時は大変だったな。あの後取っ組み合いになつて」

何故こうも事実を述べてるのに誤解される様に湾曲して物事を語るのだろうか。わざとか?わざとなのか?

「じゃ!じゃあ。まさか・・・した」

「「きやー!!!」」

小声をかき消す様な黄色い悲鳴が聞こえてきた。大きい音に反応し、皆が反射的にその方角を向く。

そこでは一夏がセシリアにいつぞやの様にあーんをしていた。どうやら正座が辛いセシリアを見かねて、食べさせ様と考えた、一夏なりの気遣いなのだろう。

「セシリアずるい!」

「織斑君に食べさせて貰うだなんて!」

「抜け駆けなんて、卑怯者!」

まあ目の前のこの光景に、思春期の健全な人達は騒がずにはいられないのだが。ふと、座敷の奥を見ると、箒が恨めしそうに一夏を見ていた。やがて見飽きたのか、ユーゴは食事を再開した。

「なあユーゴ。お前は、ああいうのに興味はあるか?」

ふとラウラが話しかけてきた。

「別に。ラウラは興味あるのか?」

「・・・まあ、少しばかりあるな」

「ふーん・・・じゃあやる？」

「!!?いい、いいのか!？」

彼女は動揺している。その証拠に橋を床に落とした。

「まあ別にやったって減るもんじゃねえし」

「いや、料理は減るぞ」

「あ・・・はっはっは!」

「はっはっは!白銀君は馬鹿だなあ」

笑い声の響くテーブル席と、歓声に包まれた座敷席。どちらも今をエンジョイしている。だがこの二つを崩壊する者が現れた。

「お前たち!!静かに食事をする事も出来んのか!？」

襖が勢いよく開かれた。そこにはこの現状に不機嫌そうな織斑先生がいた。一気に大広間が沈黙に包まれる。流石に度を外しすぎた様だ。

「織斑、あと白銀。あまり騒ぎを起こすな。静めるのが面倒だ」

「すいません」

「分かりましたよ」

それだが言うとは織斑先生は部屋へと戻っていった。鬼が去ったとは言え先程の様になってはまた来てしまう。皆、その後は黙々とした食事を終え、それぞれ自分の部屋に戻って行った。

因みに風紀上一夏は織斑先生と、そしてユーゴは山田先生と同室となっている。まあ女子生徒と同室にはならない点に関しては、簡単に予想がついていただろう。

「なあユーゴ。よかったら今から俺の部屋に来ないか？」

「悪いが俺はもう一風呂浴びてくる。でも風呂から上がったら部屋に寄るよ」

ホテルではなく旅館である為、オートロックの扉ではなく襖である。

ユーゴが部屋に戻ると、山田先生が誰かと電話をしていた。彼が部屋に入ると、ちょうど終わったらしく彼女は電話を切った。

「はい。では後日、よろしくお願いします。ではコレで、失礼します」

「すいません。電話の邪魔でしたか？」

「いえ、それ程重要な電話ではありません。ISパーツの業者への電話ですよ。さつきISのメンテナンスをしたら、打鉄の予備パーツが無くなってしまうて。それで発注を頼んだんです」

内容を特に気にもせず、先程の風呂の時に使った道具を一式手に取り、部屋を後にしようとした。

「白銀君。ちよつと座ってください。真面目な話があります」

すると山田先生がそれを呼び止めた。その顔は、普段ほんわかした表情ではなく、以前模擬戦を行った際の真面目な顔であった。

「・・・何ですか？」

「あつ、そう固くならないで。お説教とかではないですから。とりあえず座ってください」

促されるまま、椅子に腰掛ける。すると山田先生は淹れたての緑茶を出してきた。これを飲んで一息つこうと言っているらしい。

湯呑みを手に取り、口の中に流し込む。温かい飲み物を飲むと自然とリラックスができ、一息ついた。

「今日の臨海学校の初日。つまりは自由時間と食事の時間ですが、楽しかったですか？」

「へ？まあ、楽しかったですね。自由時間の時、トランプで負けたのは悔しかったです」

その意外な質問に、当初変な声を出したが、直ぐに質問の回答に移る。

「それはよかったです。・・・最近の白銀君は何処か変でした。授業中でもフードを被り、目を合わせようとせず、心ここに在らずといった感じでした」

「あのVT事件以降、ボーデヴィツヒさんがクラスに馴染めた事で纏まったかと思ったら、今度は白銀君が学園に来たばかりの頃に戻ってしまったて、正直不安を感じていました」

「・・・・・・・・」

「そうだったのはあの日、山鳩総理がIS学園を訪れてからですね・・・貴方と山鳩総理の間に、どの様な確執があるのかは知りません。です

がこれだけはいっておきます。私はIS学年1年1組の副担任で、貴方は生徒です。悩みがあるなら、ちゃんと相談して下さい」

「・・・それだけ、ですか？」

「いいえもう一つ。コレを渡しておきますね」

すると彼女は鞆の中から何かを取り出した。それはA4サイズの封筒であり、中にはいろいろな書類が入っていた。

「白銀君のIS学園への入学は織斑君の時とは違って、結構ゴタゴタしてしまいました。ですのでこの機に、ちゃんとした書類を書き上げて欲しいんです」

封を切り、中身を取り出す。そこには色々な書類が封入されていた。

「今日中に提出しなくてもいいです。ですがこの臨海学校が終わるまでには、書き上げて提出して下さい」

「・・・分かりました」

「話は以上です。私は暫くの間部屋を開けますから、その間に私の持ち物を物色してはいけませんよ」

それだけ言うと山田先生は部屋を後にした。残されたユーゴは一通りの書類に目を通す。さっき言ってたので当たり前だが、中身は入学関係の書類で殆どである。

金銭面は如月さんが色々と根回した為、ここにあるのはユーゴ個人に対する書類ばかりであった。アレルギー調査票。健康観察票。個人調査票。家庭調査票。緊急連絡網。

一通り目を通し、それらを手に持ち窓側に寄りかかると、窓を半開きにした。蒸し暑いはずの夜なのに、吹いてくる夜風はひんやりしており、肌に触れると心地よい。

ふと手に持つ書類に目を下ろす。それを持つ手を窓の外へと置いた。このまま指を離せば、書類は風に飛ばされて海の方へと消えて行くだろう。

(悩み事があるなら、相談してください)

「・・・・・・・・」

少し考えた後、彼は窓を閉める。無駄な事はやめよう。ユーゴは備

え付けのボールペンを手に取り、書ける範囲で一通り書き終えた後、風呂道具を手に取ると部屋を後にした。

第20話 ひとときの談笑 後編

「ん？あれは？」

廊下を歩いていた足を止める。見るととある一室の前で、いつもの箒達が固まっている。しゃがむ者と立つ物で分かれているが、全員襖に耳をくつつけている。

「お前ら、何してんだ？」

何気なく聞いてみると皆、人差し指を口の前に立てている。静かにしろという事らしい。そして耳をつけるジエスチャー。どうやら室内の様子を盗み聞きしているらしい。

促されるままユーゴも襖に耳を当てて聞いてみる。中からは一夏と織斑先生の話し声が聞こえてきた。

（そうか。この部屋が一夏達の部屋か。ん？何か話しているのか？）

「千冬姉、久しぶりで緊張してる？」

「そんな訳あるか馬鹿」

「じゃあ、ここは？」

「なっ!?そこは・・・あんっ！待て！」

珍しく、千冬さんが慌てている様な声が聞こえて来た。

「直ぐに良くなるよ。だいぶ溜まってたみたいだし」

ムーディな感じの音が聞こえる。きつと幻聴だ。だが箒達の顔は何処か赤らんでいる。

「なっなっ、一体コレはなんなのですか？」

「どう聞いても、アレしかないじゃない？」

「教官、まさか自分の弟と・・・」

みんな小声で楽しそうに話している。女子と言うのはこう言う話が好きなのだろうか？少なくとも、男の俺には理解が出来ない。

「悪い。俺は興味ない」

そう言い足音を立てずに立ち去った。一方の彼女達は、興奮のボルテージがかなり上がった。

「ちよつとーこれってこのまま行ったら・・・」

【ガタ】

「へ？」

【バッターン！】

寄り掛かりすぎたのか、襖が倒れた。襖が倒れた事で、それに寄りかかっていた彼女達も倒れる様になだれ込む。そんな5人の目の前に、一人の女性がいた。

顔は彼女なりに笑顔を作っているが、ヒクヒクと眉を動かしている。怒っている事が予想できる。

その奥では、一夏が何事かと覗き込んでいた。

「.....」

こうして5人は正座をさせられ、織斑千冬の前に並べられた。

「まったく何をしているか、馬鹿者どもが！」

「まっ、マッサージをしているらしいのですね」

先程のやりとり、室内ではマッサージが行われていたのだ。妙に色っぽい声もした様な気がするが気にしてはいけたい。

「ああ。こいつはこう見てえ、マッサージがかなり上手い。お前達も順番に受けてみる」

「え？いいんですか？」

「ああ。順番はお前達が決めろ」

こうして5人が一夏のマッサージを受ける事となった。じゃんけんで決めた結果、最初はセシリアからになった。

「じゃあセシリア。横になってくれ」

セシリアを布団に寝かせ、リラックスできる体勢にする。今日のオイルを塗った時と同じ様に、セシリアの背中に指を押し当てた。

「セシリア、気分はどうだ？」

「ちよつと痛いですね。揉む様な感じでしょうか」

背中を一本指で押すのではなく、5本指で揉む様な形となった。

「いい気分で、眠くなって来ましたわ・・・ヒャン！」

急に織斑先生が立ち上がり、セシリアの浴衣の一部を剥いだ。

「ほうっ、ませ餓鬼め！黒下着か」

「先生！離してください！」

「教師の前で淫交を期待するなよ？15歳」

「いつ！」

「・・・冗談だ。おい一夏。自販機で人数分の飲み物を買ってこい」
財布を投げ渡し、一夏が部屋の外に追い出した。ユーゴも風呂へと行っている為、この場には女子だけが集まっている訳だ。

「さて、そろそろ肝心な話をしよう。ラウラはともかくとしてお前達、あいつの何処がいいんだ？確かにあいつは役に立つ。家事も料理もなかなか上手い。付き合える女は得だな」

あまりの突拍子な発言に四人があたふたしている。

「べ、別にアタシは、一夏と付き合える事を得だなんて思っただけ・・・」
そんな中で鈴が赤面しながら言う。すると織斑先生は待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「おいおい。私はあいつと言っただけで一夏だなんて一言も言っただけでいいぞ」

嵌められた。そう気づいた時にはもう遅い。

「えーいや！話の流れ的に一夏の事だと思っただけ」

「じゃあアイツって、一体誰の事なんですか!？」

「さあ、誰だろうな・・・じゃあ聞く。お前達！一夏の奴が欲しいか!？」

「「「くれるんですか!？」」」

「やるかバーカ」

上げて落とすとは正にこの事だ。えーっと言う様な顔で四人の顔が同じになる。その表情が見られた事に、何処か満足気な織斑先生である。

「さて、ラウラ。次はお前の番だ。あいつのどこがいい？あいつは一見刺々しい印象だが、何も人嫌いな訳ではない。生身やISでの戦闘力もかなりある。男に守って貰いたい系の女なら、一度は夢見るタイプだな」

「だからこそ、あいつと似ているお前が、あいつに惚れた気持ちが少し分からなくてな。ペアを組んだ時も睨み合ってたのにな」

「・・・私はあの事件の時、あいつの記憶に触れ、あいつもまた私の記憶に触れました。きっとそれが原因でしょう」

「あの事件が境目か。噂程度だと思ってたが、吊り橋効果とは本当にあるんだな」

そんな事を話している内に、倒れた襖から一夏が顔をのぞかせた。「戻ったか一夏。おっと、白銀も一緒か」

風呂上がりのユーゴとたまたま合流し、一夏が部屋に戻った事を確認した織斑先生は女子達の方を向いた。

「小娘ども。男が欲しければ奪い取る位の覚悟を見せてみる。では廊下に一夏という。ああ白銀は残れ。少し、一対一で話をしようじゃないか」

何時ぞやの話の時の様に、一夏達は残された襖の裏に行き、話を伺う事にした。織斑先生はさつき受け取ったビール缶の中身を一気に飲み干し、ユーゴと向かい合う形で座った。

「さて、白銀。今お前はナイフを持つてるか？」

黙ってユーゴは自身の腰部分を指さす。常にナイフを装備している事を表していた。

「なら単刀直入に聞こう。その頬にあるマーカはなんだ？」

場の空気が一瞬にして凍りついた。以前ラウラとの初対面の時の様な事になる事を周囲は警戒していた。現にユーゴはその手を腰部分へと伸ばしている。

襖の奥にいる一夏達も、ナイフが跳ぶ事を覚悟し、取り押さえようと身構えた。しかし彼は少し考えた後、その手にナイフを取らず、自身の頬に当てた。

「アステカの祭壇。ラウラの眼と同じ、人体強化タイプのナノマシン」
「その頬のマーカについて、お前の前で触れているのに、ナイフを投げつけないんだな」

「あの時はまだ、俺自身がIS学園に対して警戒心を剥き出しにしていた、デリケートな時期だったからな」

何処か昔を懐かしむ眼をしながら、ユーゴは宙を眺めた。そして彼は、アステカの祭壇について話し始めた。

「このアステカの祭壇の効果は一言で言えば、人体強化だ。例えば……これだ」

するとユーゴは千冬さんの飲み干したビール缶を手にした。そしてそれと織斑先生を交互に見比べる。そして次の瞬間、ビール缶を千冬さん目掛けて投げつけた。それを彼女は悠々と右手で受け止めた。「ほう。いきなり何をするかと思えば」

「今、ビール缶を投げてキャッチするまでの間で、人間の脳内では色々な反応が起きた。感覚神経や脊髄、筋肉など、色々な事がね」

「だがそれを行動に移す際には、1秒にも満たないタイムラグがある。これは無理もない。命令を出す脳や脊髄と、命令を受け、行動にうつす為の筋肉との間には距離がある」

「このアステカの祭壇は、その僅かなラグをナノマシンで専用の道を作る事で極限にまで減らせる。つまり、脳で感じた瞬間に筋肉が行動に移しているんだ」

「成る程。その黄色いマーカーは」

「脳と脊髄と筋肉を繋ぐルート。その一部だよ」

「・・・参考として聞くが、VT事件の時のあの動きは」

「あれは反射の強化だ。ナイフを喰い込ませた瞬間には、脳が次の動きから位置決め、何処にナイフを喰いこませるかを決めという行動に移しただけ」

「・・・」

「まあこの説明は全部如月さんが言ってた事だし。詳しい事は彼に聞いてよ。俺みたいに答えるかどうかは分からないけど」

するとユーゴは周囲を窺う様な動作をした後、声を潜めていった。「今度は、こちらの質問に答えてください。断っておきますが、そつちがデリケートな質問した以上、こちらもそれなりの内容を聞きます」

その声は本当に小さく、襖の奥にいる一夏達では聞き取れないほどであった。何より先程までの話以上に、真面目な口調であった。

それに合わせる様に千冬さんの声も小さくなる。

「何だ？私のスリーサイズか？いい気分だからなんでも答えてやるぞ」

最初、彼女は揶揄うつもりでいた。だが次のユーゴの言葉で、から

かいではなく真面目な答えをする気になる。

「両親に捨てられた時、どんな気分でした？」

千冬さんの眉が僅かに釣り上がった。声を忍ばせて言う。

「お前、どこでその事を」

「以前一度、一夏から聞いた。小学生の頃に捨てられたって。その事を理解した時、貴女はどんな気分でした？」

「まったくあの馬鹿め・・・本当なら答える気などないが、お前は私がしたデリケートな質問に答えたからな。こちらも答えよう」

一つ咳払いをした後、彼女は答えた。

「別に何とも思ってたなどいない。何せ思い出は愚か、名前や顔すら忘れてしまったからな・・・その時にはもう」

「・・・強いですね。俺なんかとは大違いだ」

「ん？なんだって？」

「何でもない・・・織斑先生、この世界は好きですか？」

「日本の事か？まあな。自己中な無能政治家が国の舵を切っている事以外では、紛争は無くテロも少ない。住みやすい世界だよ」

「・・・俺もう寝ます。これで失礼しますね」

その会話中、彼は一才表情を変える事なく部屋を後にした。

（そういえば、あいつの両親についてを聞いてなかったな。もしかして山鳩と知り合いなのか？今度、如月慎吾と出会う時があれば、聞いてみるか。もしかしたら、ネクロノミコンというテロ組織についても、聞けるかもしれないな・・・）

その様な事を頭の片隅に留め、織斑先生も明日の用意などを開始した。

やがて朝となった。新しい希望の朝だ。一夏が散歩がてら、縁側の様な場所を歩いていると、ある場所で箒がしやがみ込んでいた。

「箒？何見てんだ？」

それに箒は答えず、じつと一点だけを見つめていた。同じ様に一夏もそれを見つめた。

【ひっぱってください】

そう書かれ、地面に突き刺さるプラカードの前に、二つの突起物が埋まっていた。にんじんの様に引っこ抜く事を所望しているらしい。

この時、一夏と箒は何かを察していた。

「なあ箒。これってもしかして……」

「知らん。私に聞くな」

バツの悪そうに箒がその場を後にした。出来るだけ遠くに行きたいのか、多少速足となっている。残された一夏の前にある突起物は、引っこ抜けと相変わらずの自己主張を続けている。

「……やるしかないよな」

やがて意を決したらしく、一夏がそれを力一杯引き抜いた。意外な事にその突起物は直ぐに引き抜く事が出来、反動で尻餅をつく。空を見上げた一夏の目に、空で何かが光った。

やがて空から巨大にんじんが降って来た。砂埃が宙を舞う。そしてその中から無邪気な笑い声が聞こえてきた。

「あははははー！引っかかったねいっくん！ブイブイ!!」

にんじんが真っ二つに割れた。そこからにんじん太郎……ではなく、うさ耳をつけた一人の女性が現れた。穏やかな笑みでダブルピースを一夏に向けている。

「おっ、お久しぶりです、束さん」

「久しぶりだねいっくん！ところでいっくん。箒ちゃんは何処かな？」

「えっと、箒は……」

「まあ、私の開発したこの箒ちゃん探知機で直ぐに見つかるんだけどね。じゃあねいっくん。またあとでねー!」

そう言い彼女は、ダウジングマシンの様な何かを持ってとぶらぶら走って行った。

この時一夏は何となく予想していた。嵐の様なあの人の登場によって起きる、嵐の様な出来事を……

第21話 第四世代型IS

朝、朝食も早々に終わらせたユーゴ達はとある岩場に集まっていた。臨海学校の2日目は各自のISのデータを取る事。

だが専用機持ちは国や企業に提出する為のデータを取る為、より精密なデータが求められる。故に普通の生徒達とは別の場所でデータを取る事になっている。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな」

その場には織斑先生を含め、8人が集まっていた・・・8人？一人多くないか？

「ちよつと待ってください。箒は専用機を持ってないでしょ？」

鈴が発言する。確かに彼女は国家代表候補生でも、試作機のテストパイロットでも無い。故にこの場にいるのはおかしいのだ。

「そつ、それは・・・」

「その事について、私から説明しよう。実は・・・」

「ヤアツツツホオオオ!!!」

突然、靴を地面で擦る様な音が響いた。大の方を見ると誰かが斜面を滑って来ている。ある程度滑り終えると、うさぎの様に点高く飛び跳ねた。そして着地点は箒の立っている場所であった。

まるで予想していたのか、彼女はその場をすんなり離れる。すると着地した存在は織斑先生に抱きつこうとした。

「やあやあ会いたかったよちーちゃん！さあハグハグしよう！愛を確かめ会おう！」

「相変わらず煩いぞ。束」

「おおっ！ちーちゃんも相変わらず容赦の無いアイアンクロードだね！」

「じゃじゃーん！やあ！」

「・・・どうも・・・」

すると彼女は岩陰に隠れていた箒の方へと寄ってきた。箒の方は彼女が苦手なのか、何処かきこちない返事だ。

「久しぶりだね。箒ちゃん。こうして会うのは何年振りかな？大きくなったねえ箒ちゃん！特におっぱいが」

【ゴスツ！】

鈍い音が響いた。箒は何処に閉まっていたのか木刀を取り出すと、彼女に突きを喰らわせていた。

「殴りますよ？」

「殴ってから言ったあ！箒ちゃんひどくい！いっくんも酷いと思うよね!？」

「えっ、その・・・」

「おい東、自己紹介くらいしろ」

「ここまでは埒があかないと判断したのか、遂に織斑先生がストップをかけた。」

「ええ。面倒臭いなあ・・・コホン」

一つ先払いの後、自己紹介を始めた。

「私が天才の東さんだよ。ハロー・・・終わりー！」

随分とあっさりとした自己紹介。皆呆然としていた。だが彼女達が呆然としているのはそれが理由ではない。東と言う名前だ。

「束って、まさか！」

「ISの開発者にして、天才科学者の!？」

「あの篠ノ之束!？」

彼女達は驚きを隠せていない。これまで教科書などでその名を聞く機会こそあれど、こうして実物を生で見るのは初めてだ。

「ふふーん。それでは大空をご覧あれ！」

東の指差しにつられ、皆が空を仰ぐ。すると空に何かが光り急降下して来た。着地点は一夏のいる場所。

「あつぶねー！」

慌てて一夏達がその場を離れた。それと同時に地面に何かが落下し、衝撃が地面に襲いかかる。

そして砂埃が引いて来た頃、クリスタル状の物体から、紅色の何かが姿を表した。

「じゃっじゃじゃーん!!これが箒ちゃん専用機こと、紅椿だよ!!全ス

ペックが現行 I S を上回る、束さんお手製だよ！なんとって赤椿は、第四世代の I S なんだから！」

「『第四世代!』」

口を揃えて、驚きを露わにする。

「各国は第三世代の量産が目標とされ、その試作機がやっと軌道に乗ったのに」

「もう第四世代なのかよ」

「ウチなんて、まだ第三世代の試作機すら作れてないのに」

「そこがほら、天才の束さんの実力だから」

得意げに話す束さん。生粋の天才とは彼女の様な事を言うのだろう。織斑先生が口を開いた。

「これが篠ノ之がこの場にいる答えだ。篠ノ之箒には、白銀の様に試作 I S のテストパイロットを務めてもらう事になった」

「という訳で箒ちゃん。今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！」

何やら電子パネルで小難しい事を色々とセッティングしているらしい。その間、6人はリラックスして話していた。

「そう言えばユーゴの I S って、会社が造ったんだよな」

「ああ。といつてもデュノア社見たいな量産化を目的とせず、接近戦特化や遠距離戦特化など独自の I S を造る、言わばオーダーメイドタイプだな」

「・・・ねえ、前から気になったんだけど、ユーゴの勤めてる会社は、日本政府からコアの支給がされているの?」

この世界に存在するコアの数は467個。新たに造られたゴーレムや赤椿のコアはノーカンウントとする。その内の322機が実戦に配備され、コアの研究などに支給されたのが145である。

「悪いがそういう事については企業秘密で答えられん」

彼は一番無難な回答である。そうこう話している内に赤椿のセッティングが完了したらしい。

「さあ箒ちゃん！試運転行ってみよう！箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよー」

一呼吸おいた後、宙に浮いた。そして空目掛けて飛び立ったと思っ
た次の瞬間、もう赤椿は皆の予想より遙か上空に到達していた。

「何これ、速い！」

「これが、第四世代の加速なの……」

遠くでもわかる様に、赤椿は空で紅く光っている。その光の移動速
度は、正に圧巻の一言に尽きる。

「次は刀を使ってみようか。右が天月で左が空裂ね。武器データ送る
よ」

彼女はまず天月を使用する。これは斬るのではなく突きの方に向
いている。その際に出たレーザーが、宙に浮かぶ雲を引き裂いた。

「おおっ……」

その威力に箒が驚く。東の方は予想通りといった反応を示してい
る。

「いいねいいね。次はこれ撃ち落としてみて」

量子化されていたミサイルが展開され、赤椿目掛けて突き進んでき
た。それに対し赤椿は空裂を使用。ビーム状の刃を形成し、ミサイル
群を全て斬り落とした。

「たったの一振りで、あのミサイル群を撃ち落とした」

「すげえ……」

皆が赤椿の動きに注目していた。これが第四世代の力なのか。

「やれる。この赤椿なら……私にも」

「さて。それではテストを開始する。まずは……」

「ちよーと待ってよちーちゃん！ほんの少し、東さんに付き合ってく
れない？そうそう！忘れるとこだったよ！君もついて来てくれない
？」

東の指は真っ直ぐにユーゴを指さしていた。

「え？俺も？」

「白銀も？……まあいいだろう。予定のテスト開始時間にはまだ余裕
があるからな。では各自、私が戻ったら直ぐに各種装備のテストを始
める。それまでに自分のISを温めておけ」

（あれ？俺の意思は無視なの？）

そんな事を思いながらユーゴと織斑先生が束の後を歩いて行った。その足はやがて、人気の無い森の中で止まった。

「さて、ここに君を呼んだのは他でも無い。君に頼みたい事があるんだよ」

「何ですか？要件なら手短かに」

「じゃあ簡潔に言うね。君にはIS学園を辞めて欲しいんだ」

「……は？」

最初、ユーゴは言われた言葉の意味が理解できなかった。それは織斑先生も同じであつただろう。

「おい束。いきなり何を言い出すんだ。こいつをIS学園に入学させたのは、他ならぬお前だろ」

「うん。でもそれには理由があつてさ。私があるとある調べ事をするまでの間、彼放浪させない様に縛り付けておく必要があつたんだ。で、調べ物も終わったわけ！そしたら束さん、君のことを調べてたら興味が湧いちゃったよ。だから学園を辞めて、私の所においでよ！ね！そうし……」

「おいおい。白昼堂々と人様の会社の社員をヘッドハンティングしてんじゃねえよ」

不意に呆れる様な声が聞こえて来た。見ると近くに車が止まっていた。そして車体に寄りかかりながら、煙草を吸っている男がいた。

「お前は、如月慎吾！」

「おお！会社の上司が直々に現れたか！まあ実態はペーパーカンパニーだけだね」

「……その口調に態度。こっちの事情を知ってるのか？」

「うん！とつても知ってるよ！君達に関するデータが不自然な程に無いつてことをね！でもこれだけは知ってるよ。蒼炎の狩人。変な名前だねえ。厨二病かな？」

「それだけ知ってたら上出来だな。これを機に俺達について調べるのを辞めたらどうだ？ネズミみたいに、ウロチョロ嗅ぎ回ろうとするのは。あつ、見た目はうさぎか」

互いに直接的な言葉で口にごそ出していないが、激しくいがみあつ

ている。これ以上この行為を続けるのは不味いと感じ、止めに入ろうとした織斑先生。

「落ち着けお前ら。とりあえず話をだな……」

だが、それを掻き消す様に電子音が鳴り響いた。

【ビーツ！ビーツ！】

「ん？ちよつと待て。パソコンが呼んでる」

突然彼は車内に戻りパソコンをいじり始めた。そしてPCに向かう彼の目の色が変わった。

「裏サイトの垂れ込み情報だ……アメリカとイスラエルの共同開発のISが暴走!?詳細データは!？」

時を同じくして、その情報は織斑先生の元にもやって来た。山田先生が走って伝えに来たのだ。

「匿名任務レベルA。現時刻より対策をとられたし……白銀！お前は織斑達の所に行つて、直ぐに宿に戻る様に伝えて来い！」

「分かりました。如月さん。車出して。ルート指示するから」

ユーゴが後ろの荷台に転がり込み、車は一夏の元へと向かった。

「既に対策本部を設置しています。織斑先生も急いで」

「分かった。直ぐに向かう」

二人が駆け足で宿に戻ろうとした。だがその時、織斑先生の肩に手を乗せた存在がいた。束だ。

「おい束。今はふざけてる場合じゃ……」

「ねえちーちゃん。これは親友として警告させて。あの子をIS学園から排除しないと、本当に取り返しのつかない事になるよ。それこそ、IS学園や生徒を巻き込んで……」

織斑千冬が一瞬怯んだ。

彼女は束と長い付き合いだ。だから彼女の人柄についても詳しく知っている。

普段からふざけており、特定の人物以外にはほぼ無関心。だが、今、目の前にいる彼女はその付き合いの中で一度も見せた事のない程、真剣な顔をしていた。

その表情の何処かに、何かに怯える様な影が見え隠れしていた。そ

れだけ言うと彼女は、うさぎの様に飛び跳ねながらその場を後にした。

第22話 福音事件

宿部屋の一角。そこに設けられた対策本部には、現在専用機持ちが集結していた。そして織斑先生による状況説明が開始された。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカとイスラエル共同開発の第三世代のIS、シルバリオ・ゴスペル。通称【福音】が制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があつた。情報によれば、無人のISらしい」

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2Km先の空域を通過することが分かつた。時間にして50分後だ」

電子地図に詳しい情報が追加されてゆく。

「学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処する事になった。教員は学園の訓練機を使用して、空域及び海域の封鎖を行う。よつて本作戦の要は、専用機持ちに担当してもらおう」

「は、はいっ!？」

余りの情報の多さに、一夏はついていけてなかつた。

「つまり暴走したISを、我々が止めると言う事だ」

「マジ!？」

「一々驚かないの!」

「一夏。今はとにかくこの空気に慣れろ。こういう事が起きた時、それを対処するのも専用機持ちには必要な事だ」

「その通りだ。では作戦会議を始める。意見が有る者は挙手するよう」

「まずセシリアが挙手をした。」

「はい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「うむ。だが決して口外にはするな。この情報が漏洩した場合、諸君等には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

「いや!マジかよ。裁判つて・・・」

あまり穏やかじゃない単語に困惑する一夏を横に、各メンバーに福

音の詳細なスペックデータが渡された。それに一通り目を通す。

「なんだよこのスペック。無人を想定してるからとはいえ、普通じゃあり得ない性能だぞ」

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。私のISと同じ、オールレンジ攻撃を行える様ですわね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体、かなり厄介ね」

「この特殊武装が曲者って感じがするね……連続しての防御は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数……偵察は行えないのですか?」

「それは無理だ。この機体は、現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だ」

「一回切りのチャンス……と言うことはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

「って事は……」

「……」

全員の視線がある人物に集まる。その人物がその意味に気づくのに、数秒程かかった。一夏である。

「え?俺!?!」

「そうよ一夏。アンタの零落白夜で落とすのよ」

「零落白夜なら、ジョーカーとは違って一撃が重い。一撃必殺の点ではこれ以上ないだろう」

「それしかありませんわね。ただ問題が……」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか。白式のエネルギーは全部攻撃に使わないと難しい。だとすると、それまでの移動をどうするか」

「目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。それに、超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよ!ちよつと待ってくれ。俺が行くのか!?!」

「「当然!!」」

「他に誰がいる?」

「おい!簡単に言うな!」

「織斑、これは訓練ではなく実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いは

しない」

訓練ではない。相手は無人機であり、こちらの都合など考慮しない。それこそ、最悪・・・死ぬかもしれない。

その言葉に一度は顔を下げても、やがて一夏は顔を上げた。

「・・・やります。俺がやってみせます!」

「よし。白銀。VT事件の際の高速移動、あれで・・・」

【ガタツ!】

「ちよつと待つてよちーちゃん!!もつといい作戦が、私の中にナウプリンテイング〜」

突然天井の板が外され、そこから何か飛び出してきた。口調からわかる通り、篠ノ之束だ。

「また出た!!」

「出ていけ。今はお前に付き合ってる余裕がない」

「そんな事言わないでよちーちゃん!ここは断然、赤椿の出番なんだから!」

「何?どういう事だ?」

その発言に束は、待つてましたと言わんばかりの笑みを浮かべていた。そして、束に促され箒達は外へと出ていた。ある場所で箒の持つIS、赤椿が展開される。

「赤椿はちゃんと起動してるね。それじゃあ箒ちゃん。展開装甲をオープンさせるね」

その言葉に反応する様に、赤椿の至る所から展開装甲が開かれた。

「展開装甲は、第四世代型ISの装備だね。一言で言っちゃうと、紅椿は白式の持つ、雪片式型が進化したものなんだよね〜!」

「進化・・・」

展開装甲。それは攻撃、防御。スラスターとして使える雪片式型の専用装備の事だ。それが全身にあると言うわけだ。

「なんと、全身のアーマーを展開装甲にしちゃいました!ブイブイ!」

「・・・要は凄いな」

とりあえず今の皆の思考で納得出来る答えがこれであった。

「それにしてもあれだね。海でのISの暴走。10年前の白騎士事件

を思い出すねえ！」

その言葉にユーゴが反応した。

「白騎士事件って、俺知ってます！何度もネットとかで事件について見ましたから」

それは今から10年前。篠ノ乃束がISを発表してから一ヶ月後に起きた、世界を揺るがす大事件であった。

何者かの仕業により、日本を含めた各国のミサイル2341発。これらがハッキングを受け、制御不能に陥った。攻撃目標は無論、日本である。

世界中が混乱する中で、白銀のISを纏った、一人の女性が現れた。後に白騎士と呼ばれるそのISは、2341発のミサイルを全て撃墜し、日没と共に姿を消した。

「これが、白騎士事件の一連の流れですよね」

「へえ。君よく知ってるねえ」

「あの事件が世界に与えた影響はかなり大きい。何せ、たった一人で、今ある兵器がISに対し無力である事を証明した。言い方を変えれば、一人で世界と戦って、そして勝ったんですから」

「うんうん。本当に白騎士は凄いねえ！その白騎士って一体誰なんだろうねえ。ね？ね？ちーちゃん？」

「知らん」

「因みに私の予想だとバストは88センチで・・・」

【ゴントッ！】

織斑先生のゲンコツが束さんの脳天に直撃した。

「うわーん。ちーちゃんがぶったあー！脳味噌二つにわれたあー！」

「それはよかったな。これからは左右で物事を考えて行動が出来るぞ」

「あつ！それもそうか！さっすがちーちゃん!!」

束さんがスキンシップとして織斑先生に抱きつく。どうやら彼女達は白騎士について何か知っているらしいが、今はそれどころではない。

「話を戻すぞ。赤椿の調整にはどれほどかかる？」

「7分あれば余裕だね！」

「・・・よし。本作戦は織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡、及び墜を目的とする！作戦開始は30分後。各員は直ちに準備にかかれ！」

各員はそれぞれ散っていった。今、自分に出来る事をする為に。

その頃、ハワイ島にて。シルバリオ・ゴスペル、福音を開発した研究チームは大慌てであった。突然の福音の暴走。外部からの操作を受け付けないこの環境で、突然起きたハッキング。

誰が、何の目的でハッキングしたのか。その理由も分からず、研究チームはただオロオロしているだけであった。

「何故だ!?何故こうなったのだ!？」

「外部からのハッキングなど、想定されてないぞ！」

「不味いぞ！このままでは!!」

「失礼します」

その言葉と共に、一人の女性が降りてきた。慌ただしくあたふたしていた周囲の研究者達の動きと言葉が硬直する。

「こつ、こつ、これはネクロノミコンのクイーン様。遠い日本から態々お越しいただき、誠にありがとうございます」

「建前は結構です。それより何やら大騒ぎしているみたいですね。何かあったのですか？」

「そつ！それはですね！詳しい話は詳細なデータと共にします。とりあえず是非、あちらの部屋でございください」

「いいえ結構です。詳細なデータに関しては目安がついておます。

【今日、我々に受領される筈であったシルバリオ・ゴスペルを、外部か

らのハッキングで奪われた」といった感じでしょうか？」

研究者達の顔がみるみる青ざめてゆく。一方のクイーンの顔は、興奮の様な白けた顔をしていた。

「仕事はISの受領だけだと思っていました。昨日の出来事のせいで、少し不機嫌なんです。仕事が増えてしまいました。手早く終わらせましょう」

錯乱したのか、研究員の一人が慌てて近くの内線に手をかけ、警備の詰所へと電を入れる。

「警備兵!!こいつを!この女を始末しに来い!速く!!」

しかし、誰一人としてその内線に出る者はいなかった。

「無駄です。既に警備兵共はキングが始末している筈です。後は貴方達を始末するだけ」

彼女のIS、ソード・ヴォルフが展開される。その剣の様な尾は不機嫌さを表す様に波打っていた。研ぎ澄まされた尾が、研究者達の前へと向けられる。

「まつ!待ってくれ!命だけは!!」

「ネクロノミコンに二流は不要です。死になさい、ゴミが」

【バキッ!ボキッ!ベギッ!】

階下から聞こえてくる悲鳴。それも一人、また一人と消えてゆく。この警備兵の詰所は、それより前から静かであったが。唯一、他の詰所と違う点と言えば、血の匂いで充満している事くらいである。

男の手にする剣の持ち手には、ある紋章が刻まれていた。髑髏の架けられた十字架の紋章が。

「キング。研究者と研究データは全て消去致しました。もうこの様な場所に御用はありません」

下での処理を終わらせたクイーンが戻ってきた。

「そうか。後の処理はアメリカの連中にも任せておけ」

「・・・何やらご不満の様ですね」

「弱い。どいつもこいつも弱すぎる。この場に私の求める誰一人としていない。この戦闘行為自体が、ただの尻拭いではない」

「それについては同意しますが、我慢してください。これも組織に属

する者としてのマナーという物です」

それだけ言うと彼女は飛行機のチケットをキングに手渡した。

「さて、暴走I.S。通称【福音】の後始末はジャック一人で十分でしょう。私達はこのままイスラエル側の始末に向かいます。よろしいです
ね？キング」

「・・・好きにしろ」

それだけ言うと二人は、島の港に止められていたボートから、その場を後にする。

第23話 予期せぬ乱入者達

あれから30分が経過した。一夏と箒が砂浜で合流する。互いに視線を合わせた後、無言で頷いた。

「来い！白式！」

「行くぞ！赤椿!!」

二人のISが展開される。白きISの白式。そしてそれに並び立つ赤椿。

「じゃあ箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど、私のプライドが許さないが、今回だけだ」

「なあ箒。分かっているとと思うけど、これは訓練じゃ無い。十分に注意して取り組まないと・・・」

「無論分かったからさ。心配せずともお前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいろ」

「・・・なんか楽しそうだな。やっと専用機が持てたからか？」

「え?・・・私はいつも通りだ。一夏こそ、作戦には冷静にあたる事だ」

「ああ。分かっている」

すると二人の元に織斑先生から通信が届いた。

「織斑、篠ノ之。聞こえるか?」

「はい」

「よく聞こえます」

「今回の作戦の要は一撃必殺。短時間での決着を心がける。討つべき敵はシルバリオ・ゴスペル。以降、福音と呼称する」

「・・・織斑先生。私は状況に応じて、一夏のサポートをすればよろしいですか?」

「そうだな。だが無理はするな。お前は赤椿での実戦経験は皆無だ。突然何かしらの問題が出るとも限らない」

「分かりました。ですが、出来る範囲で支援をします」

「・・・あの子、ちよつと声が弾んでない?」

「ええ。私もそう思いましたわ」

「気持ちとは分からなくもないけど……」

「まあ、緊張で身体がガチガチになってるのに比べれば、マシだとは思
うが……なんとも言えねえな」

司令室で言葉に出来ない不安を抱いているユーゴ達。そんな中で
織斑先生が一夏にプライベートチャンネルを開いた。

「一夏」

「はい!？」

「これはプライベートチャンネルだ。篠ノ乃には聞かれない。どうも
篠ノ之は浮かれてるな。これでは何かを仕損じるかもしれない。い
ざという時には、サポートを頼むぞ」

「分かりました。意識します」

「頼むぞ」

山田先生が合図を出す。

「オープンチャンネルに切り替えます。スタンバイどうぞ」

「……では、初め!!」

作戦開始。その言葉と共に、モニター越しに見守る中で二機のIS
は空高く飛び立った。

目指すは戦場。そこ目掛けて一直線に。

「はっ！速い!!」

戦場に向かう二機のISの動きは、モニターを通して司令部でも確
認している。皆が今注目しているのは地図の方。二人の居場所を示
す二つの点が高速で移動している事について、釘付けとなっていた。

「すごい。あれが赤椿の加速性……」

「イグニッションブーストの比じゃない」

「驚異的な速さだ」

しかし、これでもまだ赤椿の全力は出されていない。赤椿にとって
は軽い準備運動程度感覚だ。

「暫時衛生リンク確立。情報照合完了。目標の現在位置を確認。一
夏、一気に行くぞ」

「おうー!」

赤椿のボディが紅く輝いた。先程までの加速など甘かった様に、一気に加速時のGが二人に襲いかかった。だが一夏は、苦悶の表情を浮かべながらもしつかりと赤椿を離さずに掴んでいた。

そして遂に二人は、目標との会敵を果たした。

「あれがシルバリオ・ゴスペルか」

望遠モニターに映し出されたそれは、データで見た通りのISであった。無人機だから人もいない。

「加速する。目標との接敵は10秒後だ！」

遂に福音との戦闘フェイズに移行した。まだ福音はこちらに気づいていない。仕掛けるなら今が絶好のチャンスというわけだ。

「一夏！零落白夜を!!」

「うおおおおおっ!!!」

「!!」

一夏の渾身の零落白夜、だがその一撃はあたる寸前で避けられた。福音のセンサーに引っかかり、緊急回避行動をとられた。

「回避した!?!」

福音がビームを弾幕の様に一夏達目掛けて降り注がせる。咄嗟に二機とも回避行動をとる。だが今の一件で福音からは完全に敵対されている。

不意打ちは使えない。もう真っ正面からぶつかるとは出来ない。福音は再び特殊装備による弾幕を展開させ、一夏達に襲いかかる。

今度は追尾性があるビームらしく、避けながらも数発程被弾した。この相手との長期戦は本当に不味い。

「箒！左右から同時に攻める！左は頼んだ！」

「了解した！」

降り注ぐレーザーの弾幕を掻い潜りながら、二機は確実に福音との距離を詰めて行った。

「一夏！私が動きを止める!!その間に！」

「分かった！」

箒が一気に福音の背後に回り込み、羽交い締めにする。展開装甲も使用した攻撃に、福音は激しく抵抗するも、あと数秒程度ならこの

ロックが続けられる。

「一夏！今だ!!」

「おう!!」

白式が再び零落白夜を起動し、一気に距離を詰める。この一振りです勝負が決まる。

「?!箒！避ける!!」

そう思われた時突然、一夏達目掛けて赤い粒子ビームが飛んできた。あまりに突然の事で、反射的に避ける。その隙に福音は箒のロックを振り解き、距離をとった。

「なんだ！今のビームは?!」

そのビームは司令部の皆も見ていた。皆が動揺を隠せない。

「今のビームはなんですの?!」

「明らかに福音からじゃない。別の所から放たれてた!」

「織斑！篠ノ之！何が起きた?!説明できるか!」

「分かりません!!突然、横からビームが!!」

しかし、次のビーム砲と共にその存在は姿を表した。それは改造された戦闘機であった。機銃の代わりに、先端にビーム砲を備えている。

「戦闘機だと?!この非常事態に!」

「何処の戦闘機だ!?!国籍不明!」

国籍が不明。普通に考えればあり得ない。密漁船などならまだしも、戦闘機で国籍不明など、どう考えても異常である。

「その戦闘機!?!この状況が見えないのか!?!撃ち落とされたいのか!?!」

「その戦闘機！直ぐにこの場から離れろ!」

織斑先生や箒の呼びかけに対しても、戦闘機は相変わらずの無反応。その行動の一つ一つが、まるで福音を援護する様に飛んでは、一夏達にビーム砲を向けてくる。

「くっ！シールドエネルギーが」

一夏が白式のエネルギー数値を見て焦る。このままではISのエネルギー切れにより、作戦が失敗となってしまう。

相変わらず戦闘機はビーム砲しか使ってこないものの、その破壊力はかなりのものである。更に福音のビームの弾幕も重なり、このままでは自分達はやられてしまう。

「くっ…なら!!」

箒が戦闘機目掛けて一気に加速する。空裂を戦闘機目掛けて振り下ろそうとした。その刀が触れる目前で、一夏が叫んだ。

「落とせる敵から、墮として…」

「やめろ箒！それが戦闘機なら!!」

その言葉に箒がハツとする。刀は戦闘機に触れる寸前で止まっていた。

何をしている私は。目の前の機体は無人機の福音とは違う。戦闘機だ。つまり中に人が乗っている可能性が高い。

人殺し。その考えが脳裏をよぎり、判断を鈍らせた。

「私は、もう少しで…」

しかし福音は違う。感情など持たない機械にとって、箒の見せた動揺など、攻撃の絶好のチャンスでしかなかった。福音の放つビームの弾幕が、箒めがけて真つしぐらに突き進んだ。

「箒!!」

咄嗟に一夏が攻撃に割り込む。即ち直撃を受けた。この一撃により、遂に白式のエネルギー残量がゼロになる。

「一夏!?一夏!!」

白式は真つ逆さまに、海面へと落下していった。暫くして水柱が立った所を見るに、海面に着水したのだろう。

「おい篠ノ之！聞こえるか篠ノ之!!」

「お、織斑先生！一夏が！一夏が！」

「馬鹿者!!今は他人の心配をしている場合か!?!」

その通りだ。戦闘はまだ終わっていない。福音と戦闘機は箒だけにターゲットを絞ったかと思うと、次の瞬間にはビーム砲を発射していた。

「!!」

ビーム砲が来る。頭で理解していても、恐怖で身体が動けなかつ

た。

(やられる！)

そんな考えが脳裏をよぎった。反射的に目を瞑る。

だがその時突然、そのビームを掻き消すように、何処からかビームが放たれた。それは筈の真後ろであった。

「なんだ。一体今度は何だ!？」

振り返るとそこには、一つのISが飛行してきた。普通のISより一回り大きく、全身がガンメタルのボディをしており、搭乗者の姿は見かけない。

機械ボディ故の無機質さが、何処か不気味である。そのISは再び、右腕のビーム砲からビームを放射。それは福音に直撃した。

見ると福音の右側は半壊しており、所々から火花が散っている。流石に福音のAIが不利を悟ったのか、福音は全速力でその場から離脱した。それを追従するかの様に、戦闘機も戦闘空域から離脱する。

それを見届けたかと思うと、そのISも来た道に戻っていった。

「私は・・・私は・・・」

空域に残された筈にはその場で、ただ項垂れる事しか出来なかった。

その頃の司令部では、一夏救助の為にボートを出す用意が急ピッチで進められていた。

「何なんだよあれ。あの戦闘機は!?!そしてあのISは!?!一体何なんだよ!?!」

「アタシが知るわけないでしょー!」

皆が言い様の無い不安と苛立ちを覚えていた頃、突然通信機が鳴り響いた。慌てて山田先生がそれに出る。

「はい！・・・織斑先生！学園上層部からの伝達です！」

「内容は？」

「専用機持ちを連れて、指摘されたポイントへ迎えだど。指定された座標は・・・先程の福音との戦闘宙域の直ぐそばです！」

「・・・山田先生。念の為、直ぐに医療班を集めてください。お前達！今すぐ私と一緒に来てもらう」

数分後、医療班を連れて皆が乗り込んだボートは、指定されたポイント目掛けて海上を走り出していた。

第24話 力

ある島に招かれた一同。ここでは織斑一夏と篠ノ之箒が回収されており、現在治療室にいるらしい。

この島は一見、そこら辺にある普通の島であった。だがその地下には、日本政府が管理する武器工場が隠されており、専用機持ちと織斑先生と山田先生はそこに招かれたと言うわけだ。

しかし、織斑先生達招かれた者は治療室ではなく、現在ある場所へと集められていた。呼び出しは相手はこちらに気づくと、嘲笑の様な笑みを浮かべた。

「よく来たな。事態が事態な為に、歓迎の用意は出来てないが」

「早速ですがこの非常事態に、我々をこの場に呼んだ理由をお聞かせください。山鳩総理」

ユーゴ達の目の前にいる存在。それは以前IS学園を訪れた山鳩秀吉。今の日本の内閣総理大臣だ。ユーゴの手は自身の腰へと回しており、いつでも襲い掛かれる様にしている。

「私も忙しい身だ。なので手短かに話をしよう」

「パチン！」

彼の指パッチンと共に、格納庫の奥方の暗がり明るく照らされた。そこには一つのISが佇んでいた。

「これは、先程のIS！」

「紹介しよう。プロメテウスだ。日本が極秘に開発した第三世代の試作型IS。その強さは君達も見ただろう？特に右腕は様々なアタックメントに変化可能だ。先程のキャノン砲は10%以下だが、それで福音を半壊させる事が出来た」

「すごい。あれで10%以下なんて。全力出したらどれぐらいなんだろう……」

「日本のISは日々進歩しているのだよ。何せIS発祥の地といっても過言ではないからな。」

「……まさかこの非常時に、ISの自慢をしに我々を呼んだわけでは

無いのですよね？」

織斑先生と山田先生の機嫌が明らかに悪くなっている。

「ああ。本題に移ろう。最初の上層部の決定時に、福音の一件は我々も担当する事になっていてね」

「そつ！そんな話、上層部から聞いてません！」

山田先生が口を挟む。

「君達の上層部も一枚岩では無いというわけだ。兎に角、君達が失敗した以上、もう福音対策に専用機持ちの力は借りん。これからはこちらで引き受けさせてもらう。それを直接伝えさせて貰う。以上だ」

用はこの一件から手を引け。この男はそう言いたい訳だ。

「・・・とはいえ、あの撃墜された少年の容態は、今尚不安定だ。安定するまでは、この基地で待機していてもいいだろう。そして安定したら、彼を連れてとつと帰ってくれ」

「そうそう、忘れる所だった。織斑先生。山田先生。お二人には対策会議で知恵をお借りしたい。少し、私の後についてきてください。それと白銀君。君も来た方が何かと利口だよ？」

そう言う山鳩総理はこの場を後にした。残されたメンバーは顔を見合わせる。

「織斑先生。私達は、これから・・・」

「・・・何と言おうと、解除命令が出されてない以上、作戦は継続していると捉えるべきだ。たとえばあの男が、あんな事を言っていようとな」

「ですが、我々はこれからの様な手を・・・」

「それはまだ、何とも言えません・・・お前達。次の指示は追って出す。それまで各自、それぞれに割り当てられた部屋で待機している。二人とも行くぞ」

それだけ言う三人は山鳩の後を追いかけ、何処かへと歩いていった。残されたセシリア達が、再び顔を見合わせる。

「・・・今は、教官の言う通りにするべきだな」

「でも・・・先生だって一夏の事が心配な筈だよ。お姉さんなんだよっ・・・」
「ずつと目覚めてませんのに・・・」

「着いた時に手当ての指示を出してから、様子を見に行こうとしないなんて……」

この島に辿りついた時、丁度この島の救護班により、一夏が担架に乗せられて運ばれていた。その側では、箒が沈んでいた。

織斑先生が救護班に通りの指示をした後、案内される形でその場を離れていった。そして最初に至る。

「だから、どうしろと?」

「箒さんにも声を掛けませんでしたわ……幾ら作戦失敗だからと言って、流石に冷たすぎるのではなくて?」

「……教官だつて辛いはずだ。そんな中でも、やるべき事をやっているんだ。なら、我々の取るべき行動は、決まっているな」

今、自分達に何が出来るか。この場の全員が再び顔を見合わせた。やがてその意味を理解したのか、4人は強く頷いた。

丁度その頃、織斑先生と山田先生。そしてユーゴの三名はある部屋の前に辿り着いていた。

「さて白銀君。君にお客さんが来ている。この部屋の中だ」

開かれた扉の箇所から中を除きこむ。そこは電気が消えており真つ暗で、何も見えないし、何も見当たらない。

「嘘つくなよ。俺の知り合いがこんな場所に……!!?」

「……うぐ」

今にも消えそうな声で、男の声が確かに聞こえた。

「織斑先生。今、何か聞こえませんでした?」

「ああ。確かに私にも聞こえました。でもなんと言ったか」

二人にはその言葉の主も、声も理解できなかつた。だがユーゴは違う。あの声を聞き逃さなかつた。

「おじさん?……間違いはない。一馬のおじさん!!」

駆け出したユーゴが部屋の中に入る。すると彼が入った瞬間、背後の扉が閉ざされて部屋の電気がつけられた。その部屋は長方形である。中には誰もいないし、何も無い。

いや違う、たった一つだけ、その部屋にはある物が置かれていた。一枚の薄汚れた毛布。その瞬間、彼の全身の毛が逆立った。本能が危険な何かを知らせている。

「・・・!!!出せー!!!ここから出せよ!!!おい山鳩!!!」

背後にある扉を何度も叩き、蹴飛ばした。ナイフを突き刺す事もある。だが扉は頑丈なまでに硬く、開く気配は微塵も感じ取れない。

ISを展開しようとしたが、電波などでジャミングされているのか、展開が出来ない。

「おい!!聞こえてるのか!!!おい!!!おい!!!おい!!!」

外にいた三人にも、その怒声は聞こえてきた。だがそれも段々と声の質が変化する。そして最終的には言葉ではなく、ただ喚く様に叫んでいるだけとなった。

「白銀君?!山鳩総理!!彼に何をしたんですか?!」

山田先生が問い詰めるも、彼の方は澄ました顔をしている。

「おやこれは失礼。どうやら部屋を間違えてしまいました。ですが困りました。この扉は時間で開く様になっていて、確か、一時間経たないと開かないんですよ」

「・・・わざとらしい真似をする。随分と白銀の奴に恨みがあるのだな。そんなにあいつが目障りなら、排除でもしたらどうなんだ?」

織斑先生が軽蔑の目を向けた。しかしそれと同じ軽蔑の目を、彼は二人に向けた。そして織斑先生の質問に答えずに、彼は話し出した。

「IS学園に失望しました。あの少女には、作戦を妨害する戦闘機を破壊するチャンスがあつた。例え乗り手を殺したとしても、状況的に考えれば、戦闘機の撃墜行動は正しい」

「・・・なのにそれをつまらぬ罪悪感で躊躇した。その結果が現状だ。実に、愚かだと思わないか?」

「篠ノ之箒の判断は人道的には間違つてはいませんが。私は彼女に人殺しをしろとの命令はしていません。もし、それでも間違いがあるとするれば、それは指示を出した私の責任です」

「その人道的な考えが、織斑一夏をあの様にしたのですがね。正しい判断一つ行えない存在が、果たして専用機を持つに相応しいのか」

「その点、AIなどの機械はその時、その瞬間に最適な行動を行う。正に理想の強さだ。人間など比べ物にならない程にな」

「・・・山鳩総理。これはIS学園の教師としてではなく、初代ブリュンヒルデとして言わせてもらいます」

その声は普段の彼女からは予想も出来ない程の怒りが込められていた。

「強すぎる力は、時に全てを狂わせる。10年前の白騎士事件、各国はISの存在を宇宙開発に特化したマルチフォーム・スーツではなく、既存の兵器全てを上回る超兵器としてしか認識しなかった」

「ISの軍事的利用が禁止されている中での平和維持名目の軍備増強は大いに結構です。ですが、それが平和維持に必要かどうか、よく考えてみてください・・・」

その眼はこれまで以上に迫力がこもっていた。流星に予想外なのか、山鳩総理も多少尻すぼみする。

「・・・忠告として受け止めておこう。では、私は福音の対策会議があるのでこれで」

「お二人には司令部への立ち入りを許可してあります。そこで実際の現場でも見ていてください。現在スタッフが福音の所在地を探しています。見つけ次第、プロメテウスを出し撃滅する」

それだけ言うと、山鳩総理はその場を後にした。残された二人は、一度部屋の扉を見た後、司令部に行く為にその場を離れた。

そして部屋の中では、ユーゴが薄汚れた毛布の中でうずくまっていた。先程扉を何度も殴りつけたせいで、拳は血塗れ。

だが、今の彼を支配しているのは痛みではない。恐怖だ。狭い密室に閉じ込められた事へ恐怖なのだ。

「・・・一時間だ。一時間で出られるんだ！なら寝れば直ぐじゃないか！寝ればあつというまだ！」

彼にも先程の会話は聞こえていた。だからこそゴールが見えているこの監禁紛いの行為も、寝る事でなんとか乗り切ろうとしていた。

(寝るんだ！寝るんだ!!あの時みたいに!!!)

彼が密室の中で寝た頃、夕焼けに染まるビーチ。現在、そこには箒がいた。普段髪を縛っている紐がなく、明らかにローテンションである。

「・・・なーに落ち込んでんのよ」

呆れた調子で、その場に鈴がやって来た。

「あくあ。あんたって分かり易いわね。あのさあ。理由はどうあれ、一夏がこうなったのって、結果的にはアンタのせいなんでしょう？」

「・・・」

「それで、現在落ち込んでますってポーズ?・・・ふっざけんじや無いわよ!!」

鈴が勢いよく箒の胸ぐらを掴む。

「今はそれ以上に、やるべき事があるでしょうが!今戦わなくてどうすんのよ!」

「・・・もう、ISは使わない」

「!!」

【パチン!】

鈴の平手打ちが、箒に命中する。特に抵抗するでもなく、箒は力無く倒れ伏した。

「甘ったれてるんじや無いわよ!専用機持ちつつうのわね!そんな我儘が許される様な立場じや無いの!」

「それともアンタは!!戦える時に戦わない臆病者な訳!」

その言葉に、無抵抗に項垂れていた拳を強く握り、怒りで震え始めた。

「なら・・・ならどうしろと言うんだ・・・!もう敵の居場所も分からないんだぞ!!戦えるなら、私だって戦う!!」

「・・・ふふっ、やっとやる気になったわね」

鈴の表情に笑みが戻る。それと同時に背後から足音が聞こえてきた。振り返るとそこにはセシリア、シャルロット。そしてラウラの三人がいた。ラウラはISの右腕だけを展開させている。

「ここから30km離れた沖合い上空に、目標を確認した。現在はス

テルスモードに入っているが、どうやら光学迷彩は持っていない様だ」

「また、先の戦闘で破壊された部位は何故か修復されているが、例の戦闘機は、この付近では確認されていない」

「さっすがドイツ軍の特殊部隊。やるわね」

「そう言うお前達はどうかんだ？準備はできているのか？」

「当然。今日のテストの為に持ってきた、甲龍の砲撃特化パッケージはインストール済みよ」

「こちらのストライク・ガンナーの用意も完了していますわ」

「僕も準備完了してるよ。いつでも行ける」

「まっ、待ってくれ。行くのか!? 白銀がないぞ。第一命令違反ではないのか!?!」

「ユーゴは現在、教官と一緒に行ったきり行方不明だ。ユーゴの居場所を教官に聞くわけにもいかない。だから、我々でやるんだ」

「それにあんた、さつき戦うって言ったでしょ?」

「聞こう。お前はどっする?」

4人の問いを筈が自問自答する。いや、するまでもない。何故ならば、答えは既に出ているのだから。

「私は・・・戦う。戦って勝つ!! 今度は負けない!!」

「なら決まりね。今度こそ確実に墮とす」

その場にいる5人が顔を見合わせた。考えは皆同じ。

夜も暮れ月が顔を出した頃、5機の専用機が空に浮かぶ福音を発見した。ラウラのIS、シユバルツァ・レーガンがレールカノンによる遠距離からの狙撃を果敢した。

「初弾命中!!」

攻撃は福音に直撃した。そしてその砲撃を合図に、福音との戦いの第二ラウンドは開始された。

第25話 リベンジ！VS福音戦！ 前編

箒達が戦闘をしている事。それは島の司令部にも届いていた。山鳩が慌てて司令部に駆け込んできた。

「福音が発見されただど!?!」

「ええ。現在、動ける専用機持ちが対処に当たっています」

「ふざけるな！命令違反だぞ！直ぐに戻させろ！プロメテウスを向かわせれば済む話だ!」

「いいえ、このまま戦闘を続けさせます」

「言ったはずだ！これは我々が対処するべき問題であり、専用機持ちの力は借りんと!!」

「我々は上層部から作戦中止の命令を受けていない！よってまだ、我々の作戦は継続しています!」

織斑先生と山鳩総理の睨み合い。両方ともに一步も引き下がろうとはしていなかったが、やがて山鳩が根負けし、視線を逸らした。

「もしまた失敗してみろ！この事をIS学園の上層部に報告させてもらうぞ!!」

「ご自由に」

「フン！プロメテウスはいつでも出せるようにしておけ！では見せてもらおうではないか。専用機持ちの強さとやらを・・・」

司令部にいる全員が、5人の戦いに注目した。

戦場にて。福音にレールガンは命中したが、それだけでは倒せない。

爆炎が引いた時、その場に福音は何事もなかったかの様に佇んでいた。砲撃された側にセンサーを向け、こちらに攻撃姿勢を見せる5機のISを敵だと判断し、急接近してきた。

「くっ！続けて砲撃を行う!」

しかし先程の不意打ちとは違い、今度は真正面から警戒をされている。放たれたレールガンの砲撃を、福音は容易く回避する。

そのままの速度で、福音は一気に加速してきた。

「今朝に渡されたデータより遙かに速い！」

ラウラの援護として放った、セシリアのブルー・ティアーズとレーザーライフルすら、福音は余裕で避けてゆく。

「くっ！」

遂に福音との距離がかなり詰められた。この距離で銃では隙が大きすぎる。

そこに鈴の甲龍の持つ双天牙月が斬りかかる。数のアドバンテージはこちらにある。AI制御の福音とて警戒は常に怠らないが、全方位に神経を研ぎ澄ます事は出来ない。

バランスを崩した福音が落下してゆく。そこに追撃としてシャルロットのISが仕掛ける。アサルトライフルによる銃撃が福音に襲いかかる。

「もらったよー！」

ラピッドスイッチによる武器の高速切り替え。多数の銃火器による手数之多さで、福音を圧倒してゆく。

移動の際の反撃、福音の弾幕がシャルロット目掛けて降り注いで来た。

「このぐらいじゃ、シールドは破れないよ！」

咄嗟に福音の反撃を、シールドで防いでゆく。しかしその際、攻撃は途切れた。福音はシャルロットから距離を取り、セシリアとの戦闘を開始した。

「福音を誘い込む！行くわよラウラ！」

「任せろ！」

ラウラのレールガンと鈴の龍砲の連続砲撃。しかし福音は、まるで先読みをしているかの様に避けてゆく。

とはいえ、これで福音の道は絞られた。福音の移動ルートに先回りし、箒が赤椿の持つ二刀で斬りかかる。

「貰った！」

初撃はクリーンヒットし、福音のボディに傷をつけた。このまま連撃をくりだそうとしたが、今度は福音が二本の刀を容易く受け止め

た。

「なっ!?!」

両方の刀を握られた事で、箒の動きに制限がかかる。福音は片方の翼部分からビーム砲をチャージし始めた。この近距離で放つつもりなのだろう。

「箒!武器を捨てるんだ!!」

「くっ!ならー!」

脚部に展開装甲を展開した。そして、踵落としの様な一撃が福音へと決まる。その一撃は、福音の左側の翼を破壊した。

翼を壊れてバランスを崩した福音は、海面目掛けて降下していった。

「無事か!?!箒!」

「私は大丈夫だ。それより福音は・・・」

福音は海面に衝突したまま、浮上してこない。

「・・・浮かんで、こないね」

「ではやりましたの?」

「・・・!いいえ!まだよ!」

福音は海中から再び這い上がってきた。破損した翼の箇所は、光の翼の様な物が形成されており、修復されていた。

「不味い!アレはセカンドシフトだ!!」

福音の両翼が、光の翼で構成される。今の福音は全身が膨大なエネルギーの塊である。福音の所持する全ビーム兵器の出力は上昇し、先ほど以上にを焼く存在である。

光の翼が生えた福音は、その寧猛な力をぶつけてきた。

「くっ!さっきまでの福音とは、桁違いの強さだ!」

「リミッターが外れたとでも言うのですか!?!」

「ぐうっ!」

赤椿がビーム砲の直撃を受けた。シールドで軽減こそできたが、I Sと一緒に箒の身体は、真下に叩きつけられ、近くの岩場に落下する。
「箒さん!」

セシリアの声に反応したのか、福音は今度はセシリアをターゲット

にした。距離を取ろうとするセシリアに一瞬で追いつき、近距離のビーム砲で始末する。

「セシリアー！くっ！こいつ!!」

甲龍にラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。シユヴァルツエア・レーゲン。どのISも、今の福音の前には、等しく無力であった。

しかし、誰も逃げようなどとは考えていない。必ず隙が生まれる。逆転のチャンスがある。そう信じているから。

その頃、医療室にいた一夏は。

「……ここは？」

気がつくとも一夏は、何処かわからぬ場所に立っていた。ここは一夏の夢の中である。目の前には、一つのISが佇んでいる。搭乗者の顔は分からない。

しかし一夏には、そのISの正体は何なのか、理解出来ていた。

「白……騎士？」

10年前の白騎士事件。日本に放たれたミサイルを全て迎撃し、そして各国の捕獲部隊を圧倒した伝説のIS、白騎士。それが自分の目の前にいた。

「力を欲しますか？」

目の前のISに乗る存在が語ってきた。

「……」

言葉はいらない。その質問に無言で頷く一夏。するとISは再び質問をしてきた。

「何のために？」

「そうだな……友達を、仲間を守る為。かな？」

「仲間を……」

「ああ。何て言うか……世の中って、結構色々戦わないといけないだろ？道理の無い暴力って、結構多いぜ？そう言うのから、出来るだけ仲間を助けたいと思う」

「この世界で一緒に戦う仲間を……」

「だったら、行かなきゃね？」

ふと、声がある。目の前のISからではない。一人の少女が、一夏の隣にいた。白いワンピースに白い髪。白い帽子を被っている。

「・・・ああ。そうだな」

(何故だろう。懐かしい・・・)

そんな事を思いながら、差し伸べられた手をしっかりと握る。その瞬間、一夏のいる世界は、光に包まれた。

時を同じくして、ユーゴの意識が覚醒した。薄暗い室内だが、そこは見覚えがあった。窓のない長方形の室内。自分が寝たあの部屋だ。

(この感じ、まさか・・・)

自分の身体に触れる。身体の数箇所にも電流でも浴びたかのような焦げ跡が見られた。そして、身体中に感じる異物感。

(この感覚。覚えてる。何年も夢で見てきた。確かこの後は・・・)

【シュツ】

ドアの隙間から、何かが滑り込んで来た。何かと思い拾い上げる。

答えは既に出ているが。

その札はランプの一枚、ジョーカーであった。

扉越しに、誰かの声が聞こえる。自分はこの声の主を知っている。「君の切り札だ。切り札は常に自分の物になる。そう思っていれば、いずれは本当にそうなる。だから君自身が切り札になるんだ」

でも、誰なんだろう。思い出せない。知っている筈なのに、思い出せない。

ここから先、どうなるかを彼は知っている。重い身体を引きずり、ドアの方へと這い寄る。すると彼の周りの空間が歪んだ。

それはこの夢がここで終わる事を意味していた。

(待ってくれ！まだ終わらないでくれ！夢よ！頼む！)

だがそんな思いは虚しく、ユーゴの視界は暗転した。

その頃現実世界では、福音との戦闘により、箒が岩礁に叩きつけられていた。全身が痛む。彼女には、自分がこのまま死ぬのではないかという錯覚を覚えていた。

(私は・・・死ぬのか。しぬというのなら・・・会いたい・・・一夏に会いたい・・・)

「・・・箒。待たせたな」

(この声・・・懐かしい)

その声は、彼女が会いたがっていた人物の声である。朧げな目を開く。彼女のぼやけた視界の中に、白い何か映り込む。

「一夏・・・一夏!?!」

それが一夏だと認識した瞬間、彼女のぼやけた視界は完全に回復した。目の前には確かに一夏がいた。

「一夏!!お前、身体は!?!傷は!?!」

「大丈夫だ。戦える。ユーゴには止められたけどな」

「ユーゴだ?!」

上空を見上げる。そこでは高速で移動する光の翼と、それに負けじと喰らいつく蒼炎がぶつかり合っていた。その人物から通信が送られてきた。

「止めるだろ!普通に考えれば!!」

その通信相手は、白銀ユーゴであった。

「ユーゴ!お前もやつと来たのか!」

「大体の経緯は分かる。こいつをぶつ壊せばいいんだろ!?!」

現在、彼の頬にあるマーカーは赤色に変色している。それはアステカの祭壇を起動させ、反射などの感性を高めている事を意味した。

「さて、こっちは一人で押さえ込むのだと数分しか持ちそうにない。一夏!とつととお前の用事を済ませろ!後鈴達は下がってろ!矢の餌食になる!」

それだけ言うとユーゴは福音から距離をり、ナイフをしまつて弓矢を取り出した。ジョーカーのエネルギーを矢に変換し、上空目掛けて

射る。

少しした後、矢は空中で無数に分裂し、福音の周囲目掛けて勢いよく降り注いだ。福音の一点を狙うのではなく、福音のいる面を制圧する。その行為に、福音も回避で必死となる。

その頃、箒と一夏のいる岩場では。

「一夏。良かった。本当に・・・」

「なんだ箒。泣いてるのか？」

「なっ！泣いてなんかいない！目に、ゴミが入っただけだ！」

必死になって照れているのを隠す箒。すると一夏は、何かを思い出したらしい。

「箒、これ。いつもの髪型の方が似合ってるぞ？」

一夏が手渡した物。それは一夏を看病していた時に、一夏の側に置いていたリボンであった。普段、髪を縛っている箒の私物であった。

「今日は、7月7日だろ？」

「一夏・・・覚えて、いたのか」

「ああ。突然だろ？誕生日おめでとう」

「一夏・・・」

「じゃあ箒、行ってくる！」

一夏は空に飛び上がった。ユーゴ達が戦う戦場の空に。

第26話 リベンジ！VS福音戦！ 後編

その頃、福音とジョーカーは攻防を繰り返していた。彼がファストナイフを取り出す。福音が一気に接近してきたが、超反射により、背後をとった。

だが、福音はアステカの祭壇で強化されたユーゴの反射神経にすら難なく追いついてきた。

【maximum!】

「これでえ!!」

会心の一撃として、ワイルド・ジョーカーの持つファストナイフがエネルギーを、蒼炎を纏う。光の翼と同じ高エネルギーの塊、それを福音目掛けて突き刺した。

【カキン!】

だがその一撃は脆く砕け散った。蒼炎は光の翼とぶつかり合い、やがて力負けし、押し折られた。

「ファストナイフが!？」

福音の追撃がユーゴに襲い掛かろうとした時、福音に体当たりをしてバランスを崩させる者がいた。一夏だ。

「ユーゴ、待たせたな」

「一夏か。すまない・・・って、そのISは」

一夏のIS、白式はその姿を変えていた。ISの持つ第二形態の雪羅に。

「白式の第二形態だ。これなら、行ける!雪羅!シールドモードに切り替え!」

雪羅のシールドモードに切り替えた武装で、一夏は福音の攻撃を防いでゆく。

「あれは白式の第二形態、雪羅!？」

司令部に送られてくる白式のデータ。これによると零落白夜のシールドを強化した装備だ。それらは福音の弾幕を完全に防いだ。

今の状態では雪羅に敵わないと判断したのか、福音の攻撃対象は赤椿へと変更された。即座に光の翼からのビーム弾幕が、再び飛び上がった筈に襲いかかる。

「筈!?!」

「私は大丈夫だ!構うな!」

弾幕をひたすらに避けてゆく。その間に一夏達は陣形を立て直していた。

「一夏よ。筈が敵を引きつけてる間に」

「ええ。反撃のお時間ですわよ」

「ラウラ。セシリア」

雪羅の左側に並び立つ、シュヴァルツエア・レーガンとブルー・テイアーズ。

「一夏。さつさと片付けちゃおうよ」

「エネルギーは十分。僕達の心配はいらないよ」

「鈴。シャル」

反対の右側に並び立つ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタム

ii。

「一夏。短期決戦で終わらせようぜ」

「ユーゴ」

そして真下に待機しているワイルド・ジョーカー。

「・・・行くぞ!みんな!」

「!!!」

そんな中、筈は福音の攻撃を一通り凌ぎきった。

(一夏よ。私は共に戦いたい。その背中を護りたい)

その時、突然赤椿が金色に光輝いた。モニターには絢爛舞踏と記されていた。そして次の瞬間、赤椿の減っていたエネルギーが全回復した。単一能力が発動したのだ。

「エネルギーが、回復した。これが赤椿の単一能力!」

「・・・よし!行くぞ。赤椿!!」

その頃、司令部ではある事が懸念されていた。

「白式のエネルギー残量。10%を切りました!このままでは」

司令部のモニターに表示される各ISのエネルギー量。白式は他のISより遥かにエネルギー消費が速く、既に二桁前半にまで落ち込んでいた。

何とかユーゴ達で福音の移動先を誘導し、タイミングよく零落白夜を決めようとするも、全て直前で回避されている。

この事に一番焦っているのは一夏であった。

(くそっ！このままじゃ・・・)

「一夏！これを！」

駆け付けた赤椿の絢爛舞踏の能力により、白式のエネルギーは満タンのままで回復しようとしていた。だがエネルギーを回復している最中、この2機は無防備である。

それはAIに取っては隙であり、一夏達目掛けて襲い掛かろうとする。

「くそっ！させるかよ！」

「・・・!?ユーゴ!?!」

ジョーカーで真横からタックルし、福音を羽交い締めにした。振り解こうと暴れる福音。ビームの弾幕などは、ジョーカーのシールドバリアで防いでいる。しかし、このままでは振り解かれる。

しかし、今の彼女達はある事に驚いていた。

ユーゴの腕は確かに福音の両脇を羽交い締めにしていた。それとは別、福音の腹部の方にも、ユーゴはそこを腕でロックをかけている。その出どころはユーゴの脇腹。白銀ユーゴの腕が、何故か4本あるという訳だ。

「ユーゴ。あんた、腕が4本・・・」

(使ったのか、隠し腕を)

唯一、彼の記憶を垣間見た為に、事情を知っているラウラだけは落ち着いていたが、それ以外の皆は動揺してきた。それは司令部でも同じである。

「白銀。お前は・・・」

しかし白銀は後悔もなく、至って冷静であった。

「これについては後で話す！こいつを抑えるのにも手間がかかる！だ

からエネルギー補給は早く済ませとけ！」

白式のエネルギーは全回復した。これでまた全力で戦える。再び零落白夜を起動させる。

「ユーゴー・離れろ!!」

一夏が福音に斬りかかる直前、ユーゴは福音から離脱した。斬撃は福音に直撃する。福音の右側の破壊が確認された。

「よし！手応えはある！このまま押し切るぞ！」

空中を飛び交う雪羅と福音。一夏目掛けて、再びビームの弾幕が降り注いできた。

一夏の背後からの来たレーザーの雨が、福音の弾幕を撃ち落としてゆく。

「攻撃を撃ち落とすのは得意なのでな」

「私がここにいる事をお忘れで？」

「この弓矢も、散弾銃みたいな使い方が出来る」

セシリアのブルーティアーズとラウラの連射式レールガン。そしてユーゴの弓矢を使う事で、これらを撃ち落とす。

「一夏！もう一回よ！」

一夏目掛けて撃った弾幕は全て墮とされた。再び福音に接近するも、福音はそれらを避け、その先にいた甲龍に目をつける。

「危ない！」

咄嗟にシャルロットがシールドで甲龍を庇う。エネルギーを回復していない彼女達の機体は、もう限界であった。

「一夏急いで！もう持たない！」

今の福音は甲龍に狙いを絞っていた。こうしてうまれた隙を一夏が逃す事はなかった。

「ああ!!今度は逃がさねえッ!!」

一夏は渾身の力で福音に、格闘用に展開した零落白夜の爪を突き刺し、地面へと叩きつける。エネルギーの余波が、砂浜の砂を巻き上げる。

「ウオオオオオッ!!!」

抵抗する福音であったが、最早そのボディはボロボロであった。一

夏に反撃をする前に、白式の零落白夜が、福音の身体を深く貫いた。
【ザクッ！】

その音と共に、福音のフェイスに表示されたエネルギー残量は0と記されている。糸の切れた人形のように、福音は力なく砂浜に倒れ伏した。

勝ったのだ。自分達は福音に。一夏の元に専用機持ちが集結する。

「終わったな、一夏」

「ああ。やっとな・・・」

「お前達、全員旅館の前の入り口で待機している」

織斑先生の指示の元、皆はその場から飛び立った。

そして島の司令部。ここでは福音撃破の報告に皆が喜んでいて。そんな中で、織斑先生がある人物と向かい合った。

「山鳩総理。一連の戦闘はご覧になられたでしょうか？」

「彼等は、彼等なりに最適な答えを出しました。これでもまだ、彼等は専用機持ちとして、相応しくない存在だと仰りますか!？」

「ぐぬぬぬぬ・・・」

今、彼が何を言おうとそれは負け犬の遠吠えでしかない。一夏や等。IS学園の専用機持ちは確かに結果を出した。その過程はどうであれ、結局何もしなかったプロメテウスとは遥かに違う。

傍観者に何も語る資格はないのだ。

「ISを操るのも、AIを制御するのも、無人機を造るのも、全ては人間です。その事を今一度、よく考えてみてください」

二人が部屋の出口を目指す際、山鳩が言った。

「分かっていると思うが、プロメテウスの事は極秘だ。漏らせば・・・」
「査問委員会による裁判。そして監視。その点については、重々承知しています・・・では、我々はこれで失礼します」

そう言い残し、織斑先生と山田先生はその島を後にした。IS学園のメンバーが撤収した島。そこにはまだ山鳩達が残っていた。

この男の瞳には、何かが写っていた。

「・・・おい。連中との連絡は？」

「いつでも出来ます」

「【計画書は送ったはずだ。後はそれに従って行動する様に】と連絡させろ」

「分かりました」

「・・・IS学園。想像以上に目障りな奴等だ。一つこころでこちらも手を打つか」

電源が落とされたモニター。黒い画面に反射して写る山鳩総理の顔は、不気味に笑っていた。

（直接彼等に手を下す気はありません。ですが、白銀ユーゴにはいい加減、消えてもらいましょうか）

時を同じくして、旅館に戻る為にISで飛んでいる一夏達。

「それにしてもユーゴ。お前はあの島で、一体何をしていたんだ？」

「は？何って・・・あれ？何してたんだっけ」

「おいおいユーゴ。その歳でもうボケたか？しっかりしてくれよ？」

「はは。そうだな。しつかりするか」

（マジで俺、あの島で何してたんだっけ。絶対に忘れられない様な事があつたと思うのに、なんで・・・）

彼の中あつた忘れられない筈の体験。今の彼にはそれが抜け落ちていた。

そして場面は変わり、イスラエルのIS研究所にて。

研究所内では、剥き出しの電気コードが辺り一帯に散乱していた。その先からはバタバタ火花が散らされている。そして床には赤い水溜りと、骸が散乱していた。

「キング。研究者は全員の始末が完了。並びに研究データは全て破壊しました。これで福音の開発情報などはこの世界から完全に消えました」

研究所の社員を皆殺しにしたクイーンが、キングの元に現れた。彼女は髪を含めた全身が返り血に塗れており、研究所内の凄惨さが窺い

知れる。

「すまなかつたなクイーン。お前に仕事を押し付ける様な事をして」
「お気になさらず。そしてこれにて当分の予定は終了しました。これから一週間は、予定などは入っていません。とりあえずこの場を後にしましょう。既にジャックにも、戻る様に連絡したので、後数分で来るでしょう」

「いや、ジャックはもう上空にいる」

二人の元に一機の戦闘機が垂直降下して来た。それは最初の福音戦の際に、一夏と箒を妨害した戦闘機と同じである。

その中から、一人の男が出てきた。

「ジャックか。シルバリオ・ゴスペルはどうなった？」

「はっ！シルバリオ・ゴスペルはISの学園の専用機持ち達の活躍により大破。そしてコアはここに・・・」

あの後、破壊された福音の残骸からジャックが回収したコア。それをキングが受け取る。

「そうか。コアだけなのは残念だが、まあいいだろう。模擬戦のデータ取りには使えるな・・・よし、直ぐに基地に戻るぞ！データの抽出を行うう！」

「はっ！」

三人を乗せた戦闘機は、レーダーに移らない様に光学迷彩を施して飛んでいった。

第27話 一つの終幕／新たなる悲劇

「IS学園の生徒達が止まっている旅館。そんな宿の前には現在、専用機持ちが並べさせられていた。」

「作戦完了!・・・と言いたいところだが。馬鹿者!!」

開幕早々、織斑先生の雷が襲ってきた。

「お前達は重大な違反を犯した。帰ったら直ぐに反省文の提出。そして懲罰用のトレーニングも用意してある。覚悟しておけ」

皆、こうなる事は覚悟していた。とはいえ、いざ実際に雷が落ちると、その迫力は凄まじい物であった。

「織斑先生。そろそろこの辺で。みんな、疲れてるでしょうし・・・」

山田先生が助け舟を出す。

「とりあえず・・・お前達、よくやったな。今日一日は、ゆっくりと休むと良い」

「だがその前にもう一つ。白銀。説明をしろ」

やっぱりといった顔をしている白銀。福音戦の際に見せた、もう一組の腕。その事を指しているのだろう。

「教官。これは・・・」

「いいんだラウラ。知られた以上、ちゃんと説明はしておいた方が、後々付き纏われずに済む」

観念したらしく、彼の両脇からは再び腕が生えてきた。隠し腕。皆がマジマジとその腕と自分の腕を見比べる。

本人によると義手らしいが、自分達の腕と見分けがつかない程、精巧な造りである。

「俺は普通の人間じゃない。サイボーグなんだ」

「サイボーグ?アンドロイドという奴か?」

「いや、俺はサイボーグだ。アンドロイドじゃない」

「違いがわかんねえ。分かりやすく説明できないか?」

「サイボーグってのは生身の身体に機械を埋め込んだ人間を指す言葉。アンドロイドとは、初めから人工的に造られた人間の事を指す。」

様は人造人間の事だよ・・・少し待つてな」

突然ISスーツの上半身を脱いだかと思うと、自身の臍をワンプッシュした。すると腹部を中心として、腹が縦で左右に開かれた。

そして論より証拠として、中の機械部品を見せてきた。彼の胃袋は言葉通りの鋼鉄製であった。皮膚こそは間違いなく人間のそれだが、その下は明らかに人工物で構成されていた。

皆が何も言えずにこの光景を見ている。

「・・・この話をしたのは、あんたらで3人目だ。今から7年前、俺はある事故に巻き込まれた。その時に、生身の身体はボロボロになって、こんな身体になった」

「医者言うには、機械に換えられた箇所から見て、事故に巻き込まれた時、そもそも生きていたのが奇跡だつてさ・・・正直に言うと、この身体になつてから、不便な事しかない。身体の中の異物感が拭た事はない。内臓の半分以上はメカ状態。食に関しては何を食べても、何も感じない始末だ」

（そうか！だからユーゴの奴、セシリアのサンドイッチを普通に食べてたのか！）

（味がわからないんじや、当然だよな。ゲテモノ好きじゃないんだね）
一夏とシャルロットが何かを納得している。そんな中、彼は開いた腹部を収納していた。

「とにかく結論として、俺はサイボーグだ。解ったか？」

「・・・」

その言葉に皆が啞然としていた。何と反応すればいいのかわからないのだろう。

しかし次の瞬間。

「うむ！わかった！」

「ユーゴさんはサイボーグなんですね。では、そういう事にしましょう」

それはあっさりした程、この場の人達が納得しているという結論が出ていた。これには流石のユーゴも少し驚いた表情を浮かべている。

「・・・随分と呑み込みが早いな。俺がこの事実を受け入れるのには

一ヶ月以上かかったのに」

「だって、目の前でこんな物を見せられたら、否定する訳にもいかないよね」

「そうだ。気にするなユーゴ。それに、お前の定義で言うなら私は戦う為に造られたからアンドロイドという事になる。だがお前は気にしていないだろ？それと同じだ」

一夏や箒。シャルロットやラウラ達の雰囲気。それはユーゴが数年程前に忘れてしまった何かを思い出させてくれる。

「……ったく。本当にあれだな。一夏だけじゃなく、お前達みんな……可笑しな奴等だよ」

その言葉と共にこの場は解散となり、一夏達は旅館へと入っていった。そんな中、この場にユーゴと教師だけは残っていた。

「ユーゴ。7年前の事故。一体何が起きたんだ？」

「……飛行機事故だよ。乗っていた飛行機が突然爆発したんだ。そこからの記憶は途切れ途切れ。でも行き先は覚えてる。丁度夏休みの頃のハワイ」

それだけ言うとユーゴも一夏達の後を追いつ、宿へと入っていった。（飛行機事故か……それにしてもあいつ。肝心な事を上手くぼかしたな。アステカの祭壇については、一切触れなかった……）

臨海学校は一日延長された。2日目に行われるISのテストなども、一般生徒は既に殆どが終わっており、専用機持ちについては実戦での莫大なデータが得られている。

つまり延長された今日一日は、初日同様自由時間である。

「それ、スマッシュユー！」

「ピンポイントガード！」

初日は殆ど姿を表さなかったユーゴだが、今日はビーチバレー大会を楽しんでいた。2対2のトーナメント形式で行い、優勝品はかき氷だ。

そしてその決勝戦が、今まさに、開かれていた。相手は並々ならぬ威圧感を放っている。

「さて白銀。そしてボーデヴィツヒ。お前達のペアはクラストーナメント戦以来だな。あれからどれ程成長したか、私に見せてみるよ！」

「はっ！教官の胸を借りるつもりで、全力でぶつからせて頂きます！」
少年漫画かな？この二人のテンションについていけないユーゴと山田先生。

「では、両者位置について……」

「……初め！」の掛け声がかかる直前、ふと布仏さんが辺りをキョロキョロし、そして呟く。

「それにしても、初日に姿を見かけなかったゆーゆーが現れたと思ったら、今度はおりむーの姿が見えないよ」

「そう言えば篠ノ之さん達の姿も見えないね。ひよつとして何かしてる……」

【ドーン!!!】

「たーすーけーてー!!!」

「待ちなさい!!一夏ア!!!」

「見かけないから心配したのに!!」

「もう勘弁できませんわあ！」

「ここから離れた岩場から、一夏の悲鳴と一緒に爆発の様な音が聞こえてきた。どうやら鈴やセシリア達と元気に駆けっこをしているらしい。」

きつと箒もいるんだろう。あつ箒を抱えながら一夏が逃げてる。

「あいつらあ！山田先生！すいませんがこの試合は棄権と言う事です！」

そう言うのと織斑先生は全速力で岩場に向かって走っていった。余りの速さに皆が呆気にとられてる中、織斑先生は宿に戻って行った。

無論、一夏達を引きずって。

そうして今、優勝賞品のかき氷を白銀が食べているとラウラが話しかけてきた。

「なあユーゴよ。私は今、この生活が楽しい物だと思っている。人並

みに笑う事が出来る、この生活が」

「奇遇だな。俺もだ。何せ、なんの味も感じないこいつが、少し美味く感じられるんだからな・・・」

こうして時は流れ、夕食の時間となった。因みに一夏達は罰として食事の量が減らされている。

すると一夏達の元に、谷本さんや鷹月さんが訪れた。

「ねえねえ。それで結局福音の暴走の理由はなんだったの？先生達は、何も教えてくれなかったし。よかったら教えてよ」

「そうだよみんなー。隠し事はなしだよ」

「だーめ。機密って言われてるし」

「大体、アタシ達も詳しい事は知らないのよ」

「それに、詳細な情報を聞けば、お前達にも行動の制限がつくぞ。それでもいいのか？」

「うっ！それは・・・嫌だね」

シャルルに鈴。ラウラ達の言葉に怖気付いたのか、引き下がる。するとユーゴが突然席を立った。

「どこに行くのだ？ユーゴ」

「用を足してくる」

そう言い食堂を後にする。

トイレを目指し歩いていたユーゴだが、廊下の先。自分の泊まっている部屋の前の男女二人を見てその動きを止めた。

二人とも手には重そうな荷物を持っている。表情を一切変えずに、ユーゴは二人に近づいた。

「何をしている」

「あ！君！この部屋を開けてくれ。頼まれた荷物を持っているから開けられないんだ」

どうやら室内に入りたいが、手が自由に使えずに困っているらしい。それは山田先生が頼んでいたISパーツの業者である。床に置けばいいのに。

【ガラツ】

開かれた扉に倒れ込む様に入る二人。

「ふーありがとう。助かったよ。私は……」

「鋼勇作と鋼祥子、ですよね」

「おや？ 私達の事をご存知とは。以前お会いしましたか？」

「ええ。6年前に一度。覚えていませんか？」

「6年前……すいません。その時期は丁度工場が忙しかった時期ですから」

その言葉にユーゴは何の反応も示そうとしない。そんな二人は荷物を指定されていた場所に置くと、部屋を出ようとした。その時、男のポケットから何かが床へと落ちた。

それに気づかず去ろうとした為、ユーゴが慌てて呼び止める。

「あの、これ落としましたよ」

男が落とした物、それはロケットであった。

「ん？ ああ、ありがとう」

男は何気なく受け取り、再び、当たり前の様にポケットに突っ込んだ。それを見ていたユーゴは、何処か寂しそうである。

「……それ、中身は見たんですか？」

「それがこのロケット、開閉部が歪んでいて開かないんだよ。まあ中身は覚えてないから、きつと大した物じゃないよ」

「貴方。他の場所も廻らなくちゃ行けないんです。早くしないと、置いていきますよ〜」

「ああ今行くよ。妻が呼んでいる。ではこれで失礼」

そう言う二人は駆け足で宿を後にした。その背中をユーゴはずっと見続けていた。

その手には血の滲む程の力を込めて。

やがて彼はトイレの一番奥の個室に駆け込んだ。備え付けのトイレトペーパーを引きちぎり、目に当てる。吹いたその紙は血で汚れ、湿っていた。

「楽しい思い出で終わると思ったのに……何で、こんな気持ちになるんだよ……」

暫くの間、彼は固まっていたがやがてトイレで用を足し終えると、食堂に戻って行った。そこでは皆が、食事が既に終わっていたのを待機していた。

「あれ？なんで部屋に戻らないんだ？」

「さつき旅館の人から、織斑先生の伝言で、大事な話があるから生徒は全員食堂に待機している様について・・・今、確認で山田先生が旅館の人と話しに行った所」

その少し前、夕日が地平線に消え月が空に浮かんだ頃、旅館近くの岩肌で、うさ耳を付けた一人の女性が白式のデータを見ていた。篠ノ之東である。

「本当、白式には驚かされるな。操縦者の肉体治療まで出来るだなんて。まるで・・・」

「まるで、白騎士の様だな」

声の主の方に振り返る。織斑千冬だ。

「ちーちゃん」

「・・・例え話が見たい。とある天才が、大事な妹を暗れ舞台でデビューをさせたいと考える。そこで用意するのが専用機と、何処かのISの暴走事件」

「暴走事件に際して、妹の乗る新型機を戦線に加える。妹は華々しくデビューという訳だ」

「すごい天才だね。その人」

「ああ。10年前に、12カ国の軍事コンピューターをハッキングする様な、世界一の天才だからな」

「世界一の天才・・・か」

すると東は何処か自嘲気味に話し始めた。

「ねえちーちゃん。今生きてるこの世界は楽しい？」

「似た様な質問を白銀にされたよ。答えは、まあまあだな」

「・・・そうなんだ・・・ちーちゃんのいる世界はそうだよね」

やがてその自嘲気味な話し方や表情は、昨日見た真面目な状態へと変化した。

「ちーちゃんよく聞いて。この夏、きっと世界は大きく変化する。蒼炎の狩人とネクロノミコンによって。それで世界がどう傾くのかは、私にも分からない」

「でも、もしちーちゃんがあの子の、白銀ユーゴの味方になるなら、これを渡しておくね」

投げ渡したのは一枚の紙切れであった。そこにはびつしりとしたアルファベットが羅列されていた。

「それは日本政府のメインコンピュータにアクセスできる裏コード。そこにこの世界の真実が眠っている。蒼炎の狩人が望む答えもね」

「それともう一つ。今回の福音事件。最初は確かに、私がハッキングしてた。でもね。あのISが現れてから、そのコントロールは突然遮断されたんだ」

「何？それはどう言う事だ？」

しかし束は織斑先生の質問には答えず、いつものものに戻っていた。

「じゃあねちーちゃん。私はこれから、世界中を回らなきゃ行けないからさ。バイバイ」

それだけ言うと束の姿はもう見えなくなっていた。彼女のいたその場には、一つのポケットラジオが転がっていた。

「これは、束のか？」

両耳にイヤホンを差し込み、拾い上げたラジオを弄る。周波数を適当に弄っていると、雑音混じりに歌番組や色々な番組が流れてきた。

そんな最中、あるニュース番組の周波数に合わさった際、織斑先生の手が止まった。

「現在入った速報です。立て籠もり事件です。先程、極東赤軍がホテルをジャックしたとの声明が発表されました。ジャックされたホテルは……」

「え？旅館？えー失礼しました。ジャックされた旅館は臨海旅館であり、現在IS学園の生徒達が泊まっている旅館です。この番組では、

このニュースについて最新の情報を……」

織斑先生の耳には途中から内容など入ってこなかった。情報収集の為にラジオをポケットに突っ込ませ、駆け足で旅館を目指していた。

少し時間を遡らせる。食堂に待機している生徒達。最初は皆、これから何か楽しいレクリエーションでも始まるのかと期待していた。

しかし10分経つても何の変化も無いとなると、流石に周囲も何か変だと感じ始めた。

それから20分経つても、織斑先生も山田先生も戻ってくる気配がない。こうなるとただ事ではないと、生徒達は本格的に騒めきだした。

「一夏。あんた探しに行ったら?」

「そうしようか……」

【ガラッ!!バンバン!!】

人は予想外の事態に遭遇すると思いが停止する。その事をこの場にいた全員が認識できた。

勢いよく開かれた襖と共に、3発の銃声が鳴り響いた。そして室内に雪崩れ込んで来た多数の人間。銃だけで無く、ISで武装している者までいた。

「お前ら動くな!この旅館は、極東赤軍がジャックした!!」

「……ほ、ほ、ホテルジャック!?!」

2021年。7月7日。午後9時頃に発生した臨海旅館ジャック事件。後に世界に大きな衝撃を与える事になったネクロノミコン事件。

その事件の始まりがこの事件である事を、この時はまだ誰も、知りはない。ネクロノミコンに因縁を持つ蒼炎の狩人。当のユーゴすら知るよしもなかった……

オリジナル図鑑① & a m p ; 今後のシナリオについて

一学期編が終わり、これからオリジナルシナリオ、ネクロノミコン編に突入します。

ですのでその前に、現段階で明かせる、又はおさらいを兼ねた、オリジナル図鑑を載せておきます。

オリジナルキャラクター達

・白銀ユーゴ

年齢15歳。織斑一夏と同じく、男でありながらISを動かせる存在。7年前のある事件を追っており、ネクロノミコンへの復讐を目的としている。

基本的に他者に対しては何処か棘があり、突き放した態度を取る反面、他者が自分の復讐に巻き込まれる事を良しとは思わず、必要ならばコミュニケーションを取る等、社交性が無い訳ではない。

そして右の頬にあるメーカーについて触れられる事を極度に毛嫌い。もし触れ様ものならナイフが飛んでくるのを覚悟しよう(ただし信頼した人間にはコレらの行為は行わない)。

そんな彼の正体はサイボーグであり、7年前の飛行機事故で体の半分以上が機械化した。脇腹には1組の隠し腕を持つ。

7年前の事故等については、オリジナル図鑑②で詳しく明かされる。

・如月慎吾

ユーゴに協力する27歳。普段はアイスクリームの移動販売をしている。その裏の顔は天才級のハッカーであり、一流企業や軍部は勿論、IS学園のコンピュータにすら侵入可能。

独自製作のPCやウイルスソフトなどを持つ為、ネットでは基本敵無し。

かつては機械工学や電子工学などで多少名が知れ渡り、将来を有望視されていたが、7年前に突然通っていた大学を中退。その後の足取りは不明。

情報収集やハッキングなどでユーゴのサポートをしている。

・如月奏

年齢15歳。如月慎吾の妹である。え？兄妹なのに年が離れすぎ？その言葉をサ●エとカ●オに言ってきたさい。

ユーゴと同じく、アステカの祭壇を埋め込む者。現在は病院のベッドの上で寝たきり状態。IS学園メンバーを除き、ユーゴの唯一の友達である。

・山鳩義秀

現在の日本の内閣総理大臣。典型的な権力を笠に着てに威張り散らす人間。基本的にいけすかない男であり、白銀ユーゴに対して何かとちよっかいを出してくる。

ユーゴ自身も彼に対して作中で一度、(教師や警官の目の前で)本気で殺害しようとした事もある。その時の会話から、彼の事情に関して少なからず知っている。

・宮野京子

如月奏の担当看護師。精神的にユーゴが如月慎吾に次いで信用している存在。彼女自身、如月慎吾とはそれなりの関係がある。

・ジャック・クイーン・キング

ネクロノミコンに所属する3人組。詳しい事はオリジナル凶鑑2で公開する。

・如月一馬

如月慎吾の父親。かつては偉大な研究者であり、ユーゴとの関わりもあつたらしい。現在は行方不明。

・鋼勇作・鋼祥子

ISパーツなどを制作する鋼製鉄所を切り盛りする夫婦。白銀ユーゴは何かしら知っているらしいが、二人は彼の事を知らない。

オリジナルIS

・ワイルド・ジョーカー

万能なる切り札の名を持つIS。ユーゴの所持する専用機。表向きは独自IS研究会社(実態はペーパーカンパニー)初の試作機らしいが、詳しい事は不明。外見は白式のように白を基調としているが、両

腕には蒼い炎が刻まれている。

「アラスカ条約に登録されていないコアなど、謎の多いISである。装備一覧。」

・ファストナイフ

ユーゴが一番愛用している武器。パッケージされておらずISの腰部分に常備されてる、刃渡り40センチのミリタリーナイフ。鋭利性抜群であり、刺す切るどちらもお手の物。

また、ISのエネルギーを纏わせる事で蒼炎を纏う様な見た目となり、この時はエネルギー弾を飛ばす事も可能。

※なお、ユーゴが常備しているナイフとは別物である。

・ビームアロー（弓矢）

遠距離戦が苦手なジョーカーの為に、如月さんが造った新武装。矢はISのエネルギーを固形化させて放つ。使う本人の腕次第だが、一点を絞った狙撃から散弾銃の様な乱射も出来る。

本人は矢の雨という面制圧型の散弾タイプとしてよく使う。

・熱衝撃吸収マント

如月さんが開発したIS装備。製造過程に置いて既に特殊なコーティングがされており、一定量の衝撃やビーム（熱）を防ぐ事が出来る。

ユーゴにとってはかなり重要な装備であり、今の彼の主な戦い方はこれで敵の銃撃を受け止め、自身の間合いに持ち込んで、ファストナイフによる襲撃を行うのである。

・ビームシールド。

その名の通り、エネルギーシールド。マントが来るまではこれがマントの代わりであったが、最近影が薄くなってる。しかしマントが貫通された際の予防策として防ぐ役割を持ち、使われてない訳でない。

・ソード・ヴォルフ

クイーンの所持するIS。世代は不明。コアはFS-Eタイプのコア。日本狼の様な茶色の外見をしている。

現在の武装。

・ソード・インコム

動物の尾の様な形をした伸縮自在のワイヤーブレード。ISのボディを貫通する程の破壊力を持ち、リヴァイヴに搭乗した制圧部隊の教師相手にこれ一つで圧勝した。

・プロメテウス

日本政府が極秘で開発した第三世代のIS。全身がガンメタルのボディであり、無機質な印象を受ける無人機。1回目の福音戦では右腕のビーム砲から100%の火力で福音を半壊させるなど、戦闘力はかなり高い。

右腕は様々なアタッチメントに切り替え可能である。ビーム砲やガトリング砲。ビームサーベルなど。詳しい事はオリジナル図鑑2にて。

オリジナル単語集

・蒼炎の狩人

ユーゴのもう一つの顔。6年程前から活動。世界中に現れてはISのコアなどを強奪する反面、テロなどもついでに鎮圧するなど、一般世間には義賊の様な評価をされている。

外見は黒装束に暗視ゴーグルにマスク。そしてフードと、見た目は間違いなく不審者のそれである。

(初期はゴーグルではなく仮面を検討してたが、某赤い人と某叛逆王子のイメージしか浮かばない為、ゴーグルとマスクにした。)

なお、原作主要メンバーでユーゴが蒼炎の狩人だと知っているのは、ゴーレム戦時にあの場にいた一夏達。織斑先生と山田先生。篠ノ之束。そしてナノマシン共鳴により彼の記憶を垣間見たラウラだけ。(話の時期の関係上、シャルロットだけは知らない)

・アステカの祭壇

ユーゴと奏にある人体強化システムの名称。特殊なナノマシンによつて脳や脊髄と筋肉を連結させ、脳が感じた瞬間には行動に移せる様になる。

(分かりやすく言うなら、陸上選手の悩みである1秒の壁。これを使えばそれを容易に超える事が出来る)

世間的には8年前に突然禁止となり、その際に情報の殆どが抹消さ

れた。埋め込んだ者は頬に黄色のマーカ―が刻印として浮き出るが、起動時はそこから血が流出する為に赤く染まる。

使用者の反射神経や運動神経を極限にまで高める効果を持つ他、周囲のナノマシンについても反応する。基本的に制限時間はないが、ユーゴは余程の事が無い限り使おうとはしない。

(すっかり忘れていたが、通称AAである)

・FS―Eコア

篠ノ之束の制作した467のISのコア。アラスカ条約によって登録されるこれらのコアとはまた別タイプ。468番目以降のコアを指す単語。

(なお、ゴーレムや赤椿といった篠ノ之束が新たに開発したコアは、FS―Eコアには含まれない)

詳しい事はオリジナル図鑑②にて。

・ネクロノミコン

蒼炎の狩人が追っている組織。クイーンの発言などから、7年前に起きたある事件に大きく関わっているらしい。こちらの詳しい事もオリジナル図鑑②で。

以下、オリジナルシナリオについて。

まず初めに言っておきます。原作部分だけを読みたい方は、2章を飛ばして貰っても全然大丈夫です。

それでも読みたい方は、以下の点を踏まえ、考えた上でどうぞ。

・ネクロノミコン編の目的は、白銀ユーゴの復讐とネクロノミコン。この関係を消化する為にあります。この為オリジナル展開であり、原作の展開は殆どありません。(一応伏線程度で入れる展開もあります)

が)

・原作メンバーは登場します。キャラ崩壊等は基本ありませんが、話を円滑に進める為に、全員肝が据わっています。そしてどんな物事も基本超速理解します。

・作中は基本的にシリウスに進む(つもりの)為、学園要素は愚か、ラブコメ要素なんて微塵もありません。あの束さんが終始真面目状態です。

・実際の戦争や滅んだ国名などが出てきます。歴史的な出来事の名前もかなり出ます。それらが苦手な方にはお勧めしません。(設定として、この世界は現実世界と似て非なる世界である事を警告しておきます)

そして3章の2学期編の事を考慮し、作中の時間軸では、夏休みの期間で一通り終わる内容にしています。その為、2章(特に最初の方)は話の進め方が強引になり、最後は駆け足気味で終わるかもしれません。

以上の要素が大丈夫な方は、温かい目で見てあげてください。

第二章 ネクロノミコン編 第28話 仕組まれた罠

一夜明けた臨海旅館。この周囲には警察や世界中のマスコミなどが殺到していた。IS学園の生徒達を人質に立て籠った極東赤軍の旅館ジャック事件。

国際機関であるIS学園が絡んだ事件。各メディアにとって、これ程人々の関心を集め興味をそえられるネタはそうないだろう。

臨時の対策本部には、偶然旅館に居なかつた織斑先生も合流していた。

「あの旅館には本来、特殊な警察が警備をしていた筈だ。それなのにこの様な事件が起きるとは・・・」

「織斑先生。今は起きた原因を追求するのではなく、如何にこの事態を収束させるかが課題です」

「それは分かっている。それで、極東赤軍の要求はなんでだ？やはり仲間の解放か？」

「今現在連中は、政府などに対して何一つの要求をしてきていません。我々としては内部の情報が欲しいです。テロリストの総数や、人質のいる大体の場所など、それらのデータが・・・」

「・・・実は先程、山田先生の携帯にかけてみたらテロリストが出てきました。その時の情報では、従業員や教師は別の場所に閉じ込められている。片方が抵抗したら、もう片方の人質に危害を加えると・・・」
「いやらしいやり方だな。一体どうなる事か・・・」

その頃、食堂内ではテロリスト達が人質の生徒達に銃を突きつけた。生徒達は身を寄せ合い、震えている。ここにいるテロリストは5人。残りの15人はあの後部屋を後にしたきりである。

【ボーン。ボーン。ボーン】

壁に架けられた振り子時計が9時を知らせる。するとテロリスト

の一人が口を開いた。

「誰でもいい。携帯を持つてるなら出せ」

すると生徒の一人が恐る恐る、ガラケーの携帯を取り出した。テロリストは荒々しく受け取ると、慣れた手付きで何処かに電話をかけた。した。

「対策本部か？まあどこでもいい。日本政府に告げる。我々極東赤軍の要求は一つ！伊豆等に収監されている我々の同志全員の即時開放だ」

それは如何にもテロリストらしい、ありきたりな要求であった。

「三時間の猶予を与える。もしそれまでにこの要求に良い返事がない場合、生徒の人質から一人を見せしめとして処刑する。言っておくがこれは脅しでもなければ忠告でもない。ただの決定事項の通達だ。以上」

【バァーン！】

それだけ言うと女は携帯を銃で破壊した。銃声の音に皆が頭を抱え、震えていた。

そんな中でも、一夏達専用機持ちはなんとかこの状況を打開しようと模索していた。

「ラウラ。軍人として、この場面をどう見る？」

「この場に銃を持っている人間が5人いる。その内の三人はIS持ち。何かしらの隙が生まれれば私達でも制圧できるが、隙が生まれないと、他の生徒達に危害が及ぶ危険が高い」

小声の一夏の質問に、ラウラははつきりと答えた。

「最初に部屋に現れた際、テロリスト達は合計20人いた。そうなるに残りの15人。従業員など他の人質の方へと危害を及ぼす可能性が・・・」

「とにかく今、俺達出来る事は耐える事だ。耐えて耐えて、耐えぬくしかない・・・」

有効な手が見つからない一夏達。その頃、対策本部では、先程の要求について議論されていた。

「やはり要求は囚人の解放ですか。超法規的措置を使用して伊豆の囚

人島に要求すれば、12時までには間に合う事が・・・」

「いや、連中の要求は無視する。テロリストに屈しない。これは国際常識だ」

「それでは！人質達は見捨てるつもりか!？」

「ここで国際機関だからやむなく、日本政府がテロリズムに屈したとなれば、日本だけでなく世界がテロを承認した事にも繋がりがかねない。それにこれは、もう既に日本政府が決めていた内容なんだ」

「日本政府が!？」

「ああ。今回の一件に対して総理は、如何なる要求であろうと日本政府はその要求を受諾する事なく、犯罪行為に対して真っ向から立ち向かう。総理自らが、こう声明を出している」

「では、このまま指を咥えて見ていろと!？」

「だが下手な刺激は敵を凶暴にさせる！かといつて敵に及び腰を見せれば敵は増長してつけ上がるんだぞ！とにかく今は現状待機だ！」
(なんなんだこいつらは。本当にこの一件を解決させようと思ってるのか・・・私には、とてもじゃないが思えない・・・)

織斑先生が言い知れぬ不安を抱いている。こうしてこちらも有効な対策が見出せないまま、無情にも時間だけが流れていった。

そして遂に。

【ボーン。ボーン。ボーン。ボーン】

食道内にある壁に掛けられた振り子時計が、長針と短針が12で重なり音を鳴らした。遂にタイムリミットが来てしまったわけだ。

「要求は受け入れられなかったか。さて。処刑の時間だ」

ISのライフルを生徒達へと突きつける。怯える生徒達を尻目に、テロリストの一人は迷わずある人物の前まで歩いてきた。

それはユーゴである。鼻先には銃口が向けられており、今にも引き鉄は引かれそうである。

「この場で殺してもいいが、マスコミの連中に見せつけた方が、インパクトがある。立ちやがれ」

「・・・おっとー!」

これまで座っていたのに、急に立ち上がった為か、彼はバランスを

崩し地面に倒れ込む。

「ぼさつとするな！早く立ち上がれ！」

「わかったから・・・」

するとユーゴは両手を地面につけるフリをしながら、静かに右手を自分や腰へと手をやった。そこには慣れしたんだ握りがある。

【シャツ！】

【ガキッ！】

そして次の瞬間、ユーゴはナイフを取り出すとテロリストの喉元目掛けて切りかかった。咄嗟のことにテロリストの体勢も崩れるが、直撃を避けた後、直ぐに銃の持ち手で反撃した。

「この餓鬼イ!!」

リヴァイヴに身体を握られ、そして通路目掛けて思いつきり投げ飛ばされた。テロリスト達は追撃目的にライフルをユーゴ目掛けて構える。

しかしこの時、テロリストの全員がユーゴの方を注目していた為、一夏達が襲いかかるのに十分な隙が生まれたのだ。

「来い！白式!!」

一夏達がISを展開しテロリスト達目掛けて襲いかかった。慌てて銃で抵抗する者もいたが、ISと普通のライフルでは、結果は火を見るよりも明らかであった。

そしてテロリスト達が一夏に気を取られているうちに、ユーゴもワイルド・ジョーカーを展開し、テロリストの一人に襲いかかった。

【ドスッ！】

彼の全力の腹パンにより搭乗者が気絶し、ISが強制解除される。

「よし。これで」

「ユーゴ！危ない！」

するとワイルド・ジョーカーに体当たりする様に、残り一機のリヴァイヴか勢いよく突っ込んできた。そのまま旅館の外壁を突き破り、外に出た。

そのままの流れで、ワイルド・ジョーカーとラファール・リヴァイヴが交戦する。

敵は一度離れた後、ライフルを使わずにレーザーブレードで接近戦を仕掛けてきた。負けじとユーゴもファストナイフを取り出し、斬りつけ合う。

「そのISを、機能停止に追い込む!!」

【maximium!】

ファストナイフが蒼炎を纏い、ラファール・リヴァイヴに襲いかかる。この状態ならシールドエネルギーは大きく削られ、敵ISのエネルギー残量ゼロになるだろう。

「これで終わりだ!!」

ナイフを構え、リヴァイヴ目掛けて一気に加速したその時であった。

【ニヤリ】

「!!」

ユーゴは確かに見た。相手のテロリストが笑みを浮かべたのを。それは試合に負け、勝負に勝った者が浮かべる笑みであった。

そして次の瞬間、なんとテロリストはISを緊急解除した。これによりユーゴの目の前には生身の人間が佇んでいる事になる。

「!? 生まれユーゴ!!」

【ザッシュ】

「あ・・・ああ・・・」

駆け付けた一夏が制止を呼びかけるも、それは既に遅かった。

かつて、この状況と似た様な事件が起きたと聞いた事がある。確かにエライ会社の名を借りた会長が殺された事件だ。

ファストナイフはテロリストの胸部に深く突き刺さり、ナイフと肉の隙間からは赤い液体がだらだらと溢れてくる。

ユーゴが固まっている中で、そのテロリストは力無く地に倒れ伏し、やがて動かなくなつた。それが意味する答えはただ一つ。

死。

そして最悪な事にその一部始終を、その場にいたマスコミ達に目撃された。カメラは確かに、先程の行為をリアルタイムで抑えたのだ。

この昼。各国のメディアの前で。ISを使った場面を。

「……き……きやー!!!」

「人……殺し。この人殺し!!」

「皆さん!こどもには見せないでください!!」

「……つしゃ!飯種GET!」

「ユーゴ……」

「……」

周囲の悲鳴や怒声も、一夏達の呼びかけも、今のユーゴには届いていない。

こうしてこの臨海旅館ジャック事件は、実行犯のテロリスト達メンバーの逃亡と確保により、あっさりと幕を下ろす事となった。

人質となってきたIS学園の生徒達の証言から20人いたであろうテロリスト達は、食堂にいた5人を除いて忽然と姿を消したらしい。

不幸中の幸いか、人質は誰一人として怪我人や死者が出る事はなく、生徒達全員、何とか無事であった。

たった一人。白銀ユーゴを除いて……

次の日、ある時間の記事が新聞のトップを飾った。

【白銀ユーゴ容疑者釈放。これに納得できない市民の声が多数】と。その隣には白銀ユーゴの名と、顔写真が公開されていた。

そしてこの新聞記事を読んで、ご満悦な男がここに一人いた。山鳩総理である。

「よしよし君達。一通りは指示どおりに動いたみたいで、安心したよ」彼の話し相手、それはなんとあの後旅館から逃亡した極東赤軍のメンバー達である。

「お前に頼まれていた白金ユーゴの殺害には失敗したが、少なくともそちらの指示通りには動いたんだ。さあ、早く釈放したリーダー達に合わせてくれ」

彼等とはある理由で手を組んでいた。極東赤軍が旅館ジャックを

行う。その報酬は現在囚人であるリーダー達の解放の筈であった。

しかし山鳩は違う。

「リーダー？ああ。伊豆の囚人島に捕らえられていた君達の親玉か。あいつらなら死んだよ」

その言葉を彼女達が理解するのに、数秒のラグがあった。

「・・・は？死んだ？何言って・・・」

「ついでに言うと、あの旅館ジャック事件の際に警察に捕まった4人も、ついさつき全員死んだようだ」。

【バァーン！】

部屋にある備え付けの機関銃が、テロリストの一人を撃ち殺した。

「こういう風にな」

「お！おい！話が違う!!お前の計画に協力する報酬に、伊豆の囚人島のリーダー達を解放するはずじゃ!?それに、この計画で捕まった仲間達も直ぐに解放するって」

「必要なのはあくまで白銀ユーゴの死だ。仮に殺せなかったにしても、君達のお陰で第二の舞台が整った。だからもう、君達みたいな目に見えるだけの悪者は邪魔なんだよ」

「ま！まって・・・」

「精々最後は悪者らしく、惨たらしく死んで逝け」

【ババババババババツ】

機関銃の一斉掃射が、テロリスト集団に炸裂する。悲鳴と共に一人、また一人と血を吹き出し、ただの肉塊へと成り果てる。

やがてその場には、赤い絨毯と間違えう程の鮮血が広がった。

「あーあ。これは掃除が大変だね」

「・・・よろしかったんですかね総理。今回の一件、上に相談せずに独断で動いて」

事の一部始終が終わり、部下の一人が話しかける。

「なあに構う事は無い。私はあいつの様な戦闘狂じゃない。勝てる勝負は確実に勝っただけだ。どんな手を使ってもね」

「・・・さて。次の始末はユーゴ、いや、蒼炎の狩人だが用意は整ってる。後は学園上層部が首を縦に振るだけだよ」

それだけ言うと山鳩は、近くの肉塊を石でも蹴るかの様に跳ね飛ばした。

第29話 別れの日

とある病院。いい加減名前をつけよう。白羽病院。

503号室の患者の看護師担当看護師。宮野京子。彼女は夜勤明けであり、最後の夜勤の仕事として見回りをした後、503号室に向いた。

「待つてたぜ、京子」

すると室内にはいるはずのない先客がいた。如月慎吾である。

「慎吾さん！どうしたんですか、こんな時間に」

「旅館ジャックの一件は知っているな？」

「ええ。その・・・白銀君の事は、本当に残念でしたね。ただ騒ぎたいだけの薄汚い人間のせいであらうに・・・」

話題のあまりの気まずさから、つい目を逸らす。しかし如月さんは平然としていた。

「おいおい。俺達だつてその薄汚い人間と同じだぜ。復讐も私刑も大差無いからな・・・それでもまだ、法律を守るのが人間の正しい姿だと言う輩がいるなら、ユーゴみたいに人間なんかやめてやる」

「如月さん！」

「・・・言葉が悪すぎたな。奏も同じなのに、非人だなんて・・・本題に移る。俺はお前に預けていた物を回収に来た。あの指輪をな」

すると彼女は黙って部屋に置かれていた一つの箱を手渡した。中には模様の違う二つの指輪と、一つのチョーカーが収められていた。

彼はその内の一つの指輪を受け取ると、静かに指に装着した。

「慎吾さんも戦うんですね」

「・・・今回の一件はこれまでとは明らかにレベルが違う。遂にネクロノミコンに近づいたのかもしれない」

「ユーゴの奴にも話は付けてある。決行は今日。俺も全面的に援護する・・・お前達の力を借りるつもりはないが、もしもの時には・・・奏の事を頼む」

そう言い慎吾は深々と頭を下げる。そんな彼に京子は言った。

「やめて下さい。そんな事を言うくらいなら、生きて戻ってきて下さいよ。この子の為にも」

ペットの傍に座り、頬に刻まれたマーカ―を優しくなぞる。

「・・・お母さんを早くに失って、お父さんも事故で死んで。それなのに目が覚めた時に、貴方や白銀君までいなくなったら、この子は本当に一人ぼっちになってしまいます」

「・・・・・・・・京子。これを」

如月さんが鞆から取り出した物体、それはペンライトの様な形状であつた。

「これは？懐中電灯？」

「化合物分解分析チェッカー。俺の開発した最新の試作品だ。特殊な光を放射し、浴びた人間の体内を細かく分析する。これを使えば、奏の症状も、解決の糸口が見つかるかもしれない」

それだけ言うと如月さんは部屋を出て行った。部屋を出る際、彼は自分の指に嵌められた指輪を握っていた。心なしかその手は何処か震えていた。

京子さんは一人、複雑な気分のまま食堂へと赴いた。朝食を受け取り席を探していると、一人の後輩の前でその足を止めた。

「ねえ後輩さん。相席、いいかしら？」

「あつ、京子さん。どうぞ」

後輩と向かい合う形で座り、食堂の朝食の定食を食す。すると後輩が聞いてきた。

「・・・ねえ京子さん。如月さんとの話、聞いてましたよ。私達、本当にこのままでいいんですかね？このまま副業の医者や看護師として、怪我人や病人を治療してるだけで」

「・・・・・・・・」

「たった二人で抗っているのに、協力すべき立場の私達が不干涉を決め込む事態で、本当にいいんですか？」

「・・・後輩君は若いから仕方ないわね。私達は所詮汚れ役。正義の味方なんかじゃ無いわ。それに、私達は負けたのよ。ネクロノミコンに」

「先輩・・・」

(慎吾さんは心配いらぬ。彼は明確に復讐の為に戦っている。問題は白銀君の方。数ヶ月とはいえ、彼は表の世界を体験してしまった。それにより7年前の面影を追ってしまう)

(・・・それに、昔から私には彼が死に急いでいる様に見える。まるで、自分が生きてる事そのものが罪のように、自分で決めつけて)

場面は変わりIS学園。例の旅館ジャック時間から数日が経った。IS学園では普段通りの生活が行われている。

今日もいつもの様にSHRが開かれていた。その間も、生徒達は期末テストの為、勉強に勤しんでいる。あんな事件があったが、クラスの雰囲気は何一つ変わっていない。

たった一つの空席がある事以外は。

「今日も白銀君は・・・」

「ユーゴは、体調不良で自室にいます」

「そうですか」

出席確認の際に呼ばれる、この場にはいない生徒の名前。このクラスが唯一沈む雰囲気になる瞬間であった。

あの事件の後、ユーゴは現行犯という事もあり即座に警察に拘束された。とはいえ状況的に考えれば、彼の行いは不慮の事故と捉える事もできる。それによりその日の内に釈放された。

だが、釈放され彼がIS学園に戻った際、学園の誰も何も声をかける事ができなかった。

その理由は、今も聞こえてくる、ある人達の影響である。

「殺人犯を引き渡せえ！」

「何がIS学園だ！権利を盾にした犯罪の隠れ蓑じゃないか！」

「無能な警察に代わり、我々は断固抗議するぞ!!」

IS学園の周辺にはデモの参加者が集結していた。あれから毎日の様に拡声器を使い、嫌がらせの様に抗議している。

教室にはこれにうんざりして、耳を塞いでいる者もいる始末。

そのあまりの規模に警官達も出動し、直接的な暴動にこそなっていないが、それでも破裂寸前の風船状態である。

世論は完全に、ユーゴの敵にまわっているのだ。

するとスピーカーから全校舎に校内放送が鳴り響いた。

「全校生徒に連絡します。本日の授業は全て中止とします。各生徒は寮に戻り、自習をしてください。午後には、全生徒は体育館に集まってください。それとこの後、臨時の職員会議を開くので、全教師は速やかに職員室に集まってください」

「・・・ほっ」

皆、何処か安堵した顔で寮へと歩いて行く。外のデモも、寮までには届いてこない。ここだけは、これまで通りに生徒達が普段通りの生活が送れる環境であるのだ。

昼の時間、一夏達はいつもの様に食事を摂っている。皆、考えている事は同じである。

「ユーゴの奴は、これからどうなるんだ・・・」

「状況だけを見るなら、ユーゴの行動は警官が銃を発砲して犯人を射殺したのと同じだ。多少冷たい目で見られる事こそあれど、ここまで酷いケースにはならない筈だ」

「それなのに、世論はユーゴさんを悪いと決めつけています」

「一体、なんでこんな事になっちゃったのかしら」

「・・・兎に角、今一番辛いのはユーゴだ。今の私達に出来るのは、あいつが戻ってきた時、これまで通りに接する事だ」

「ラウラ・・・」

だが、果たしてそんな日は訪れるのだろうか。

こうして暫くして、体育館に集合した。ここにはユーゴと織斑先生を除いたIS学園の関係者が集合している。

壇上では山田先生が真剣な面持ちで立っていた。そしてある程度時間を置いた頃、話しを始めた。

「皆さん。例の事件は既に皆さんも知っていますね。あの一件がどのような形であれ、現状では、皆さん等の安全が脅かされかねない事態となっております」

「これに対し上層部は決定を出し、明日からI S学園を一時休校とする事にしました」

「き、休校だって!?!」

その言葉は一夏だけでなく、全生徒が驚きつつも、何処かで考えていた答えであった。

「不幸中の幸いか、もう時期夏休みですし現状の再開予定は二学期開始日の9月1日です。詳しい事は、各クラスに戻った際に担任から伝達されます。以上です」

つまり、学校を一時的に閉めるという訳だ。この言葉に山田先生は一人、重い顔をしていた。

(…この決定はまだ判りません。ですが、もう一つの決定は流石に…) ここで時間を少し戻そう。

昼頃、職員室では教員会議が開かれていた。そこでは二つの決定事項があった。一つは上記にある、一時的な閉校。

そしてもう一つ、ある重大な事が決められていた。

「…理事会により決定した内容を伝える。公共の電波で、とんでもない事をしてくれたな。この現状を放置しておくのは、他の生徒達にも被害が出かねない。よって上層部は、白銀ユーゴの処理を命じた。よろしいね、織斑先生」

周囲の責める様な視線を受ける。

「…分かりました。それでは白銀ユーゴの身柄を至急引き渡しを」
「違う。上層部は白銀ユーゴの処理を要求している…この意味、分かるね?」

校長のその発言に山田先生がハツとした様な表情をした。織斑先生も、似た様な表情を浮かべていた。

「なっ!?!まさか殺せと!?!」

すると校長は織斑先生に耳打ちする。

「…上層部はそう言ってきた。本来なら専門機関の更識家に委任し

たいが、当主が現在ロシアにいる為、組織として自由に動けないらしい。よって始末については山鳩総理が一任していると。既に暗殺部隊が寮の一室に待機している」

「待ってください！幾ら何でも話が突拍子過ぎます！これでは、余りに彼が不憫過ぎます！」

「以前警官が来た時みたいにも、容疑だけなら知らぬ存ぜぬを押し倒せた！だがメディアの前、それも生放送という無数の市民の前での、決定的な証拠の前では如何なる誤魔化しも通じない！」

山田先生の抗議も、上層部の決定の一言の前には、虚しい遠吠えにしかならなかった。

こうして職員会議は終了となった。織斑先生はユーゴを部屋から呼び出す役割を命じられ、残りの先生が体育館に行き、全生徒が居る事を確認する役割である。

そして体育館に皆が集まった事を確認すると、暗殺部隊はユーゴの部屋を完全に包囲した。

扉以外の唯一の逃げ道のベランダから逃げようものなら、ラファール・リヴァイヴと打鉄を展開した自衛隊部隊が待ち構えている。

明らかに旅館ジャックの際より、対象の殲滅に力を注いでいる事が窺える。

(この展開・・・余りに不自然だ。事がスムーズに進みすぎている。まるで予め、シナリオが決められていた様に・・・)

そんな考えを浮かべている織斑先生。事態の異常性に気付いたらしい。すると部隊の1人が、顎で指示を出す。その指示を受け、織斑先生が扉をノックする。

「白銀。私だ・・・お前の今後について話がしたい。出て来い」
しかし室内は静まりかえっている。今度は強めにノックした。

「白銀！起きているか!?!」
しかし室内は無音である。試しにドアノブを捻ってみる。するとすんなりとドアノブが回る。部屋の鍵が開いているのだ。

この事実には織斑先生の動きが硬直する。

(このままもし、扉が全部開いたら・・・)

それを感じ取った織斑先生は叫んだ。

「白銀！直ぐにISを展開して部屋から・・・」

【ドスッ！】

背後にいた部隊の一人に、織斑先生は殴り飛ばされる。そして暗殺部隊は扉に銃弾の雨を浴びせ、扉を簡単に破壊した。

「対象を探せ！」

一気に暗い室内に部隊が雪崩れ込み、電気を付けて室内を散策する。それ程広くない室内に明かりが灯るなり、直ぐに異常に気がついた。

「対象がどこにもいません！」

「なんだとー！どういう事だ・・・これは!？」

すると隊員の一人が、ベットの下に開かれた、大穴に気がついた。灯りが着く前は気づかなかったが、穴の辺りは若干焦げており、異臭もそれなりに漂っていた。

「まさか床に穴を開け、そこから逃げ出したというのか!？」

【シューン！】

次の瞬間、突然室内の電気が消えて暗闇が周囲を覆った。電球の寿命などではない。IS学園全体が停電に見舞われたのだ。直ぐに非常用電源に切り替わる。

すると織斑先生の元に警告画面が表示された。

「地下区画に侵入者あり!?!こいつは!!」

部隊の面子が食い入る様にその画面を見た。そこには一人の人物が立っていた。顔はゴーグルとマスク。そしてフードに覆われて判断出来ない。

だがそんな中でも、右頬にある黄色いマーカーはよく目立つ。その格好はこの場の皆が知っていた。

「蒼炎の狩人!?!」

暗殺部隊は直様、地下区画を目指して駆け出していた。部屋に残された織斑先生だが、煙が引いてきた頃に机の上には置かれた二つの書類に気がついた。

「これは・・・」

どちらの書類も、ユーゴの直筆であった。

一つはIS学園への退学届。もう一つは、ここに入学する際に独自IS研究開発社からIS学園に貸与された、ゴーレムコアの権利放棄書であった。

「あいつ……」

彼女はそれを静かに懐にしまうと、その部屋に佇み続けた。

(それにしてもあの部隊。殴られた際の感触。まさか……)

少し時間を遡る。地下入り口にて。

「停電の発生を確認」

この停電は如月さんの作ったプログラムのおかげである。それによりIS学園のネットワークに侵入し、電気系統に特殊なコンピュータウイルスを注入した訳だ。

(もう、ここには居られない。なら……)

如月さんが開発した特殊コードを扉に打ち込み、地下区画のロックを強制解除する。マップは先程、如月さんが転送してくれた。目指すべき目標も、マップ上で赤く点滅している。

(……何を悲しむ事がある。いつか来るだろうと覚悟していた時が来ただけの事)

改めて送られてきたマップを確認する。目指すべきゴールはこの地下区画の奥にある、地上に繋がるシャフトのどれか一本。

そこに辿り着ければ、現在包囲されているIS学園の外から、地上出られる。暗示Googleを一度取り外すと、腕で目を拭った。

(ラウラ……みんな。お別れだ)

再びGoogleを掛け直し、ワイルド・ジョーカーを展開したユーゴは一気に機体を加速させ、IS学園の地下区画に侵入していった。

第30話 IS学園脱出

白銀ユーゴの逃亡。外に待機していた部隊にもこの情報は届いていた。

「おい！対象が逃亡しらしい！我々も直ちに指定されたポイントで合流し追撃を・・・え？」

ふと見ると部隊のメンバーの一人の身体が宙に浮いていた。そして浮いたかと思うと、勢いよく扉目掛けて弾き飛ばされた。

「な!?なんだ!?今の!？」

困惑するメンバーを他所に一人、また一人と部隊の連中は宙に浮かび、そして遠くに目掛けて放り投げ出される。

「ち、超常現象だ!!」

姿の見えない存在に皆オロオロしているだけであった。こうしている間にも一人、また一人と身体が宙に浮いては、放り出された。

「くそっ!こうなったらC班を向かわせろ!」

「そ!それが、C班の方には無人の装甲車が襲撃をかけ、甚大な被害を受けている模様!」

「無人装甲車だ?!?へぶっ!」

目に見えない、レーザーにも映らない敵。戦いにおける圧倒的なアドバンテージの前に、包囲部隊は余りに無力であった。デモ隊の皆もすっかり怯え、雲の子を散らす様にその場から逃げ出して行った。

やがて辺りの人間がいなくなると、カメレオンの様に一人の人間が姿を表した。その身にワインレッドの様な色をしたISを纏って。

(数頼みの案山子どもめ・・・あらかた部隊は片付けた。援軍が送られる気配もない。とつとと車にも撤退させるか)

【ビーツ!ビーツ!】

その警告音は、その人物のISから出されていた。

(ん?裏情報の垂れ込みか?・・・!?これは!?)

そこには適当な英数字が羅列されていた。それこそ、ネットのアドレスの様に凡人には理解が出来ないような文字列で羅列されている。

やがてその人物は再び周囲の景色に同化するように、その姿を消していった。その人物の指示で、無人の装甲車もIS学園から引き上げた。

その頃のユーゴ、いや蒼炎の狩人。

IS学園の地下区画には様々な自動防衛兵器が備えられている。だがその照準がユーゴに向けられる事はなかった。

(如月さんが作ったジャミングプログラム。今の俺は幽霊と同類か・・・)

あの時。一度、IS学園の電気を落とした隙に如月さんの作ったウイルスが、学園の防御プログラムを書き換えたのだ。これにより、彼は侵入者と認識されずに、地下区画を縦横無尽に移動できる。

心置きなく地下区画の鉄パイプなどを潜り抜けて、一番近い目的地にたどり着いた。その真下に立つと、パイプの中を勢いよく垂直に上昇する。途中であった鉄製の金網も、体当たりでぶち抜いてゆく。

【ピカッ！】

薄暗い場所から、突然の眩しい太陽の光に一瞬目が眩むも、直ぐに元に戻った。彼が出た場所。そこはIS学園のある敷地から離れた、森の中であった。

だがそのシャフト付近には既に、数機の自衛隊ISが展開されていた。

「まさか警戒されてたのか!?だがリヴァイヴと打鉄の計4機なら！」

ビームシールドを使い、ラファールのライフル弾を防いで行く。すると打鉄の持つ刀が、ジョーカー目掛けて振り下ろされる。

シールドをしまうとファストナイフを取り出し、その一撃を受け流す。そのままカウンターとして、ファストナイフで切りかかったが、その攻撃は表面のボディに傷をつけただけであった。

「打鉄の長所である装甲の厚い箇所か。ならー！」

ナイフを腰に仕舞うとユーゴは距離を取りながら弓矢を取り出した。そして限界まで引き絞る。散弾ではなく一点突破を狙う方に変

更した。

【バリナー！】

勢いよく放たれた矢の貫通力は高く、打鉄の右肩部分を容易く貫通し、破損させた。

「まず1機！」

次に狙いを定めたのは同じ打鉄である。このISのボディは硬く、そう簡単には打ち砕けない。2機のリヴァイヴのタンク役として目の前に壁として立ち塞がった。

打鉄の刀が、ジョーカー目掛けて振り下ろされた。ファストナイフを取り出し、その一撃を防ぐ。その返しと言わんばかりに、装甲の薄い箇所顺势よくナイフを突き刺した。

打鉄の一部から火花が飛び散り、やがて動かなくなった。

「2機！」

これで残るはリヴァイヴ2機だけだ。こいつらにはこのままファストナイフで立ち回る方が有効である。

2機のリヴァイヴはアサルトライフルを乱射して来た。銃弾を今度はマントで防ぎ、一気に加速して距離を詰める。

【maximum！】

エネルギーを纏わせたファストナイフが、一気にリヴァイヴのシールドエネルギーを削ってゆく。

「3機目！」

トドメとして、最後のリヴァイヴを掴むと空中に蹴り上げ、それを勢いよくナイフで貫いた。

「最後!!」

蹴り上げた際と同じ様に、リヴァイヴは思いっきり地面に叩きつけられ、シールドエネルギーが空になる。これにより自衛隊の持つIS全て、強制解除された。

周囲にいた自衛隊のISはあらかじめ片付いた訳だ。

丁度その頃、地下区画から追いついてきた連中も辿り着いたが、その時既に、蒼炎の狩人は遙か上空に辿り着いていた。そのまま加速を利用して、一気に海側目指して飛んで行く。

これでもう、彼は糸の切れた凧である。その行方は誰にも分からない。

「ふざけるな！逃げられただど!!」

とある執務室。暗殺部隊から取り逃したと報告を受け、山鳩が苛立ちを覚えた。

「それとIS学園にあった白銀ユーゴと、ワイルド・ジョーカーに関するデータが全て削除されていました。学園側がUSBに保存されていたバックアップデータを復元しようとした直後、今度はUSB内のデータごと完全に抹消されました」

「恐らく、IS学園が停電した際に、特定の単語に反応する電子ウイルスを混入したものと」

「・・・もう良い！臨海旅館ジャック事件に関する全ての報道を規制しろ！デモの連中にも、この一件に関する抗議は中止だ！」

勢い良く叩かれた机。机の上の花瓶が勢いよく砕け散った。拳に破片の飛び散り、血が滲む。

「圧力をかけ過ぎたか。これで6年前と同じになった・・・おのれ白銀ユーゴ！それに如月慎吾め！必ず潰してやるぞ!!」

すると部下の一人が定時報告に現れた。

「おお、部下Aか。それでどうだ、彼の方は？」

「以前、脳波にはなんの変化も変調も見受けられません。かれこれ6年間と同じ状態を変化していますよ・・・念の為に聞きます。あれ、人間なんですか？」

「ああ。人間だよ。組織に楯突いた、愚かな人間だ。とにかく部署の方には、引き続き監視を怠るな。僅かな変化も見逃すなど連絡を入れておけど」

「了解しました」

そしてその頃のIS学園。あの後体育館で解散した内、一夏達は一

箇所に集められそこで事の一件を織斑先生から伝えられていた。

「ユーゴが逃げ出した!？」

「ああ。正確に言うなら自主退学だがな」

「ユーゴのやつ、やつぱり・・・」

ユーゴ選択は皆予想が出来ていた。すると織斑先生が懐から何かを取り出した。それは茶封筒であり、袋が多少膨らんでいた。

「あいつのベットのの中に隠させる様に置かれていたボイスレコーダー。宛先はお前達だ」

こざつぱりした茶封筒から中身を抜き取る。一夏がスイッチを押すとテープが巻かれ、雑音と木の板を切るような音まじりに、ユーゴの話し声が流れ始めた。

「前略。皆様、突然この様な別れとなる事をお赦し下さい。時間が無いため、要件を簡潔に述べます。私の事は全て忘れてください。私も皆さんの全てを忘れます。それが皆さんが幸せに生きて行く道でしょう」

「そして最後に、皆さんと過ごせた数ヶ月は私の中で忘れていた何かを思い出させてくれました。本当にありがとうございます。そして、さようなら」

直後、ボイスレコーダーと録音テープに仕掛けられた小さい爆弾で、粉々に砕け散った。

「ユーゴ。お前は一体・・・」

困惑する一夏達を他所に一人、ラウラは静かに目を閉じていた。

(私がああの記憶を垣間見た時、いつかこんな日が来る事は覚悟していた・・・ユーゴ。夫として私から言える事はただ一つ。死ぬなよ)

すると織斑先生は懐から何かを取り出した。それは学園の防犯カメラが撮影した一枚の写真であった。そこには複数の人物が映し出されていた。

「今回、白銀の出撃に現れた連中の顔写真だ。こいつらには気をつける。もし出会う事になっても関わらずに、無視を決め込め」

その写真を手渡した後、この集まりは解散となった。

夜も更けてきた頃、夜空を高速で飛ぶジョーカーはやがて森の奥地付近に着地した。

「戻ったぞ。如月さん」

懐かしい。確か数学程前の極東赤軍のテロを潰した際も、この場所で合流した事を思い出していると、車内から如月さんが顔を覗かせた。

正確に言うなら、何も無い空間から突然姿を現したと言うべきか。

「うお！・・・そのIS。まだ残っていたのか」

「ああ忘れもしない。俺がお前達を助けた時、お前が所持してたもう一つのIS。それを俺が改修して補助兵装、ミラージユ・ディメンションを付けた俺のIS、ウィザード」

それだけ言うと如月さんのISは解除され、指輪の待機形態に戻った。それを見た後、ユーゴは黙って空を見上げた。そこから見える夜空は、学園で見える空と何一つ変わっていない。

「・・・後悔してるのか？」

「・・・いざ、こうなると名残惜しいものだな・・・でも、コインと同じ。表と裏はとてつもなく近い距離にあるが、決して重なる事も、交わる事もない。ただ裏の顔。蒼炎に狩人に戻る時が来ただけ」

「悪かったな。お前が学園に通いたって言ったあの時、強引にお前を止めていけば」

「如月さんが謝ることじゃない。これは自分のせい。人並みの生活を送ろうとした自分や他者への甘えが、この結果を招いた」

やがて如月さんの方を向くと、彼の顔は真剣そのものへと変化しており、そして語り出した。

「・・・実は今日、ある情報を入手した。7年前の事件についての情報があるとされる場所が裏ネット上に公開された。情報は一分も経たずに削除されたが、俺のPCには保存されていた」

その言葉にユーゴの表情が一変した。遂に自分達の追ってきた7年前の事件。その手がかりに近づけたのだ。

「それで！その場所は!? 何処だ！教えてくれ!!」

「日本政府のメインコンピュターだ。だからお前にはISを使つて、電脳ダイブをしてみよう」

「電脳ダイブって、ISに搭載されてるナノマシンを使う事で電脳世界へと仮想可視化して侵入させるあの・・・うおっ」

駆け寄りながら車内に入ろうとした際、足元がふらつき、ユーゴが段を踏み外す。ISを解除したと同時に、強烈な疲労感に襲われる。

「・・・とりあえず今日はゆっくり休め。疲れは自覚しなくても溜まっている。こつちも情報の精査。現実時の電脳ダイブ装置の製作、新武装の開発とか、経路の選定とかで色々忙しい。決行日が決まったら知らせる。とにかく今は休むんだ」

「ああ。そうさせてもらおうよ。それじゃあ、お休み・・・」

それだけ言うと二人は、それぞれソファードと助手席に足を進め、やがて二人が乗った車の扉は静かに閉められた。